

---

# 天の意志・地の理（ことわり）

Mu

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天の意志・地の理ことわり

### 【Nコード】

N9726C

### 【作者名】

Mu

### 【あらすじ】

クラブ帰りの公園で突然出逢ったのは、見知らぬ美少女のはずだった。彼女がいう。

「見つけました。わたしの運命」

えっと？ ということ？

「今日はもう離しません」

へ？ 今なんと？

あり得ないふたりの出逢いが、やがて天地の存亡を賭けた争いに。少年と少女を巡るちよつとエッチなハートフルファンタジーです。

\*

\*

\*

二人で暮らし始めた裕人とゆうか。

ようやく得た幸せな（ドキドキな！）生活に再びトラブルが……

二人のその後と天上の陰謀を巡る続編、連載開始です。

12 / 25 続編完結しました。

## 1章―出会いは夢の中の初体験 - 1 -

もう日はとつぷりと暮れている。

クラブ帰りの疲れた足を引きずり気味に俺は、団地の脇の公園を通り抜け近道しようとしていた。

公園の真ん中は小高い小山になっている。

芝生が敷かれたその丘は、この季節、昼間なら昼寝するのにちょうどいい。

だが、今は夜だ。疲れた俺が安易に寝ところがりでもしたら、そのまま朝まで爆睡しそうだ。

丘の脇の道をうつむきながら歩いていると、なにやら頭上がちらちらと明るくなったような……

「うん？」

顔を上げてちょっとキョロキョロ。何の明かりか見てみようとした。

「あれ？」

確かさっきまで誰もいなかった小山の上にうずくまった人影らしき物が見える。

まあ、反対側から誰か上ってきたのだと思えばそれはいい。

ただ不思議なのは、その人影がまるで背後からライトで照らされているように、輪郭がくつきりと光っていることだ。

反対に、体は闇の中に沈んでいてまるで黒いシルエットそのものに見えた。

えーと、この公園にサーチライトなんてあったっけ？

とか、ぼんやり考えながら眺めていると、人影が立ち上がった。

「女の子かな？」

明らかにスカートと思われるシルエツトからすらりとした長い足が立ち上がった。

それと共にモノクロだったシルエツトが次第に色づいてきた。白いワンピースに淡い水色のサマーセーター。膝上丈のチェックのスカートが目にもぶしい。

あれ？今は夜だよな。何でまぶしいんだ？

それまで暗くてよく見えなかった顔が、不意にはつきり見えた。横顔にかかる髪は、緩やかにウェーブしながら肩に届いている。やさしい印象の横顔は、これまで俺が会ったことのある誰よりも美人に見えた。

同年ぐらいかな？

少なくとも高校生ぐらい。というのがその時の印象だ。

不意に、暗くなった。

様な気がした。

辺りを見回すと公園のライトが薄暗く照らしている。

でも、これが普通だよな。

と、気が付いて小山の上を振り返った。

少女は……いた。

ごく普通の明かりの中で、さっきまでまぶしかった服も夜の色に見える。

少女は、顔を少し左右に振って……

「なにかさがしてるかな？」

俺は、とりあえず疲れていて、さっきの出来事はちょっと不思議だけど、

まあそんなこともあるのかなぐらいの気持ちでいた。ただ、足は止まっていた。

その時、少女の顔が俺の方をむいた。

その目がちよつと開かれたような気がした。

あ、まずかったかな。見ない方が良かったかも。

目をそらそうとしたその時、少女の顔に笑顔が浮かんだ。

## 出会いは夢の中の初体験 - 2 -

ドキン！と心臓が打つのがわかった。

俺はぽかんと少女の顔を見ている。

一瞬泣きそうな表情、それから再び顔がほころんだ。

瞳がきらきら光って、吸い込まれそうに、きれいだ。

いや、しかし、なんと言ったらいいんだろうね。目が離せない。

どのくらいの時間惚けていたのか（たぶん、ほんのちょっと）少女がこちらに向けて駆け出してきた。

小山をたつたたと駆け下りてくる。柔らかく髪を揺らしながら、まっすぐ俺を見つめている。

えーと、そのままくると危ないよ。

とか考えたのだが、ここで、我に返った。

えっと、何で俺んどこに向かっているんだ？後ろに誰がいる？（ちらつと振り返って確認）いない。

人違いしてるのか？それとも、どつかで前に会ったことあったっけ？

ありえねえ、ていうか、会ってたら絶対覚えてるはずだ。

いや、もしかしたら小さいときとか？

などと秒速で考えている間に、少女が目の前に近づいてきていた。もう一度あらためて顔を確かめてみる。

知ってる気は……しないよな。

それより、そろそろ止まないとぶつかると。

止まる気配は……ないよな。よけるか？

左足を引いて体を傾けようと思ったその時、少女は両手を広げて、まさに飛び込んできた。

ちよつと衝撃。二三歩よろめいて、少女の肩を借りて踏みとどま

った。

「あ、ごめん。ぶつかって…」

とっさにでたのは、そんな言葉。これって合ってるのか？

少女（というか女の子だなこれは）は、なぜか俺に両腕を回し、抱きついている。

ちよつとうつむいた顔はきれいなバラ色で、肩で息をしていた。

俺はというと、胸に当たる微妙な柔らかさと、顔にかかりそうな髪の毛のくすぐったさと、女の子の香りで、さっきまで考えていたことがどこかに吹っ飛んでいた。



### 出会いは夢の中の初体験 - 3 -

女の子が顔を上げた。

眼が合った。

女の子はちよつと恥ずかしそうに笑つて、

「やっと見つけました。私の運命」

そういった。

俺の頭のどこかでその言葉が反芻された。胸の奥のどこかに落ちた。

それから、改めて疑問。

運命って何だ？ていうか、この子誰だろう？

「あの、きみ誰？」

とりあえず口に出した。

「わたしは……」

女の子はちよつと迷う素振りを見せてから、

「ゆうか。深宮ゆうか。あなたは？」

「……矢上……矢上裕人<sup>ゆうと</sup>」

答えながらどうも何かが引つかかる。

ゆうかと名乗った女の子が目を輝かした。

「そう、矢上裕人さん……初めまして」

そうか！

やっぱり初めてなんだ。納得した。て、状況は全然わからんが……

「えっと、あの、ゆうかさんとやら、俺になんか用？というか、結構恥ずかしいんだけど……」

ここまで、二人、夜の公園で抱き合つてることになる。

改めて口に出すと心臓のときどきが大きくなってきた。

それでも女の子は腕を離さず、うふふて感じではほえんだ。

「わたしは、恥ずかしくありません。なぜなら、あなたのことをずっと捜してきたから。やっと会うことができたから。だから、今

とてもうれしいんです。だから、今夜はあなたを離しません」

はあ？

なんか今、大変なことを言われた気がするが、いや、それ以上に全く理解できん。

この子が俺を捜していた？何で？いつから？

「えっと、ごめん。全然わかんない……」

といいかけたとき、女の子の右手の人差し指が俺のくちびるに触れた。

これは！

古今東西で声を封じる合図か。

それから、女の子の人差し指が眼の前を離れていき、俺の左手と合わさった。

柔らかい手だなと、よけいな感想を持ったとき、合わさった手の間から光が漏れてきた。

光は見る見る強くなり、まぶしくて目を背けた。

ところがどっちを向いても光っている。

まぶしくて仕方なく女の子の方を見ると、ゆうかと名乗った女の子は光の中で俺を見つめながらちよっとほえんで、それから涙が頬を伝った。

だめだ。

よくわからんが、心の蔵を何かに貫かれた気がして、あいている右手でゆうかを引き寄せた。

その時、光が顔まで上がってきて、目の前が真っ白に染まった。

俺は、いつの間にか意識が白くなっていった。

## 出会いは夢の中の初体験 - 4 -

俺の右の手のひらに、渦巻き状の痣がある。

直径1センチ位なんだが、ラーメンの鳴門のようでちょっと見、間抜けな感じた。

昔から時々かゆくなり、ちょっと将来皮膚ガンとかなんとかやばいんじゃないか？と思っていた。

その右手のあたりがなんかあつくなっている気がする。

俺は、閉じていた目を開けようとして、頬にかかる髪と、

くちびるに触れる柔らかな物を感じて、驚いて目を開けた。

目の前にぼやけた肌色の世界。

とっさに焦点が合わない。

俺は、寝てるのか？

くちびるに触れる感触が離れ、俺の目の前に、さっきの少女のアップの顔があった。

目を閉じたその顔は、とてつもなくかわいい人形のような。

髪の毛が緩やかに落ちてきて、俺の頬にふれ、彼女が目を開けた。どきんとした瞬間に、思考の回路が繋がった。

いまのって、き、き、き……言葉にならん。

その顔の近さにどきまぎして視線をしたにそらした。さらに驚愕。俺の目の先に見えてる形のいい二つの膨らみは、その真ん中でつんとつきだしている膨らみは、幼児の頃はいざ知らず、もはや記憶の彼方にある、女性の胸の膨らみだろうか。

俺は、とっさに起きあがろうとして、そして……自分も服を着ていないことに気が付いた。

「うわあ」

どうしていいのかわからず、首をひねって周りを見てみる。

そこには……何もなかった。

ただ、白い光が満ちているだけだった。

女の子が体を起こした気配に、俺は顔を戻してそちらを見た。  
眼が釘付けになる。

白い肌。それがピンク色に染まっている。

形のいい豊かな乳房が揺れて、その胸が呼吸と共に上下している。  
彼女は、俺の隣、腰あたりの位置に膝をそろえて座っていた。

改めて彼女も何も身につけていないことを確認して、俺は眼のやり場に困り、彼女を見上げた。

「ここ、どこ？」

間抜けな質問。

彼女は俺を見つめて、恥ずかしそうな笑顔を見せた。

「それは、今は答えられません。……裕人さん……会いたかった。  
あえてよかった。……今は、わたしを……抱いてください」

もう、訳が分かりません。

いいんでしょうか、俺で？というか、いいのか俺？

さっき初めてあったんだよ。どこの誰かもわかんないんだよ。

しかも、絶対これは普通じゃない。

ありえない。

……だけど、今、目の前にいる少女は現実で、俺の心臓はこれ以上ないほどときどきしている。

そして、さっきから心のどこかで、この少女を懐かしく思っている自分がいる。ような気がする。

少女の体が再び近づいてきて胸が合わさった。

少女の声が聞こえる。

「裕人さん。あなたは、わたしの運命。わたしの希望なのです。わたしのすべてをあなたに……」

## 出会いは夢の中の初体験 - 5 -

カツと胸の中があつくなくなった。

右手の痣が光った気がした。

俺の男の部分と彼女が触ったようだった。それは、いつの間にか、あつく大きくなっていった。

恥ずかしさがいつの間にか消えている。

頭のどこかが切れてんじゃないか？

ちらつとそんなことを考えたとき、彼女が腰を上げ、緩やかに俺にまたがってきた。

「あ…あん……」

彼女の吐息。

俺のその部分は、彼女の中に導かれていた。

それは、なんて言ったらいいんだろうね。

あつくて、柔らかくて、きつくて、包まれている感じ。意識が自然に集中してしまう。

彼女の乳房が近づいてきて、全身に彼女の重さを感じた。

彼女は目を閉じている。

耳の紅さが彼女の恥ずかしさを教えている。

俺は、ちよつと腰を動かした。

「きやつ…うん……」

「あ、ご、ごめん」

彼女の声に驚いて固まる。

彼女は片目をあけて、

「ううん、だいじょうぶです。……裕人さん、気にしないで、抱いてください。……お願いします」

合わされた胸の間から、彼女の心臓のときどきが伝わる。それとも、これは俺の心臓か？

右手を彼女の背中に回し、ふれてみる。すべすべした感触。手のひらでそつとなでてみる。指が滑るように動いた。

その動きに彼女が感じたのか息を吐き出すのが分かった。甘い香り。

だめだ。もう我慢できない。

俺は、左腕を使って体を起こした。彼女とつながったまま、向かい合って座った。

俺は、もう一度だけ上気した彼女に向かって声をかけた。

「俺で、いいんだよな？……俺なんだよな？」

彼女の口元が

「はい」

と動いた気がした。

俺は、その口元にたまらず自分の唇を重ね、そのまま、彼女を押し倒すように横にした。

あとは、もう、本能の教えるところ。

俺の動きに合わせて、彼女から漏れる吐息。

意味のない声と、あるかもしれないつぶやき。

触れる肌から伝わる彼女の温かさ。

俺の下で揺れる彼女の体とそれに合わせて上下する乳房。

上気するかわいい顔。

さつき出会ったばかりのはずなのに、胸のどこかが、懐かしさに染まっている。

俺は、自分がどうしちゃったんだか分からないまま、とにかく、彼女のこを見つめ、相変わらずときどきし続けながら、彼女を抱いていた。

ふいに限界が近づいてることが分かった。

さつきから聞こえている彼女のあえぎ声が大きくなる。その声がさらに俺をせき立てる。

「あー、あん、あー、……きゃう」

「い、いくよ」

そう短く言うのが精一杯だった。

はじけた。

瞬間、真っ白になった。

いや、頭ではなくて、周りが。しかも物理的に。

また、まぶしい光に貫かれたのだ。

えっと、さっき（どのくらい前だ？）も光に囲まれたんだっけな。

と思ったとき、今度は本当に意識が白くなってきた。

白い意識の中に、『覚えていてください、わたしのことを……』

という彼女の声が聞こえたような気がした。

俺は、

「必ず」

と最後に思ったような気がする。

出会いは夢の中の初体験 - 5 - (後書き)

1章―出会いは夢の中の初体験―了

次回から、

2章―再会は危険の香り―

です。

よろしく



## 2章―再会は危険の香り - 1 -

「どわあ！」

起きるときに大声あげたのは、たぶん初めて。

跳ね起きたのはベッドの上。俺の部屋。俺のベッド。

ただし、服は制服のまま。

疲れて帰ってきてそのままベッドに倒れ込んだのだろう。鞆が床に投げ出されている。

どこをどう帰ってきたのか全く記憶なし。

あぶない、あぶない。

最近クラブで疲れてるからなー気を付けよう。若いみそらで交通事故なんかに遭ったらやばいからな。

とぼんやり考えていたら、何かが頭に引つかかった。

そう、なんかよくわからんが跳び起きちまったのは、なんだかすごい夢を見ていたような気がする。

そう考えたとき、胸がときどきしてきた。

怖い夢だったのか？

そんな感じでもないけれど、心臓のドキドキが収まらない。これは、不安？胸騒ぎ？それとも……

「うん？」

なにげに机の上の置き時計に目をやって、俺はベッドから飛び降りた。

やばい、遅れる。

始業開始のチャイムと共に教室にすべり込んで座った。

よかった。担任はまだきてない。

教室の窓は大きく開け放たれていて、走ってきて窓際の席に着いた俺の体に、5月の風が気持ちいい。

高校入学からようやく一月半、クラスのメンツの顔と名前が一致して、おぼかな無駄話をする相手もできた頃。始業前の教室では、そこかしこで何人かづつ集まっておしゃべりの輪ができていた。

俺はなにげに教室を見回していて、ふっと違和感がわいて視線を戻した。

そこにクラスの女の子が3人ばかり集まって笑いながらなにやら話している。

座っている一人の周りを二人が囲んでいた。

俺の所から、座っている横顔しか見えないのだが、その横顔に見覚えが……なかった！

ちよつと待て、あんな女子いたか？

俺は、入学からの短い記憶を手繰ってみた。

記憶にない。ような気がする。

自然、その子を見つめるような格好になっていたが、不意に視線の先の顔がこちらを向いた。

大きめの瞳。その眼がくりつとして興味心旺盛なネコのような。

その瞳に、ショートカットの髪がよく似合い、全体としてとても

健康的な明るさをたたえた美少女だった。

こんなかわいい子を気が付かないはずないよな。

と頭の片隅で思ったとき、少女が俺を確認してニツと笑顔を見せて、合図するかのように目を伏せた。

すごい違和感というか既視感。

自分の知らない人からいきなり挨拶されるような（まあそうなんだが）、最近似たようなことがあったような……

俺は、前の席にいるおぼかな話し相手に声をかけた。

「なあ、桜井、あそこの席の女子っておまえ知ってるか？」

あん？という感じで首を振ったやつは、俺が指さす女の子を見、俺を振り返っていきなり言いやがった。

「なんか悪いもん食ったか？矢上っち。アルツハイマーにしても早

過ぎるぞ」

いや、そういわれてもだな……

「おまえなー、我がクラス一の美人にして、運動神経抜群、1年にして陸上中距離のエースになってる蒼井<sup>あおい</sup>さんを知らないとは言わせないぜ」

いや、詳しい説明ありがとう。ていうか俺の記憶にないって言うのはどゆこと？

「ちなみに俺の見立てじゃ、我が校のトップファイブにはいるかわいさだ」

いつ見立てたんだよ。ていうか他は誰だ。

「後の4人は……まず、2組の後藤さんだろ。こちらは、バトミントン部で……」

ハイハイ分かった。こいついつの間にそんなこと調べやがったんだ。まったく。

俺は、すでにやつ声を聞き流しながら、もう一度蒼井さんという女の子を見た。

周りにいたクラスメートは自分の席に帰ったようで、彼女は、まっすぐ前を見つめて座っている。

さっきの仕草はどういう意味があつたんだろう。

本当に俺が今まで気づかなかつただけなのか？

そう思っていたとき、

「で、なんと言つてもすごいのは、2年の深宮さんだろうな」

「ハイ？」

思わず漏れるでかい声。クラスのあちこちでくすくす笑いが聞こえる。

えーいそんなことはどうでもいい。今、なんか引かなかった。

桜井のやつがきょとんとして俺を見つめている。

「今、なんて言った？」

「だからあ、我校トップファイブを……」

そこで、担任が入ってきた。

無駄話終了。

俺は、心の中がアップアップしていた。

## 再会は危険の香り - 2 -

一時限目の休み時間、桜井のやつからもう一度我校のトップファイブの説明を聞くことになったが、引がかかっていた物が分かった。深宮ゆうか。

桜井推奨我校一の美人だそうだ。

ちなみに一年先輩、2年生。ファンクラブあり。どっから手に入れたその情報？

それはともかく、この名前妙に引かかる。

初めて聞いたような、昔から知っているような……

どこか遠い記憶に結びついていっているような……

えーい、はつきりせん。

後で、ちょこつと拝んでこよう。なんか思い出すかも……

そんなこんなで方針を決めて、もう一つ、うちのクラスの不思議の確認。

クラス名簿から確認しましたよ。

蒼井瑞穂。

確かにはつきり書かれてる。て言うことは、俺の思い違いか？

間抜けだな、俺。しっかりしろ、俺。

なんだか今日は朝から不調だ。

さて、昼休み。

購買で買ったパンを早めに片づけて、俺は2年の教室に向かった。が、目指す教室には外から眺めた限りでは、それらしき人物はおらず、空振りかあとと思いながら、自分の教室に戻りかけた。

階段を一年の教室に向けて下りる。中央階段は結構広くつくられていて、踊り場も大きいのだが、そこに、4、5人の女子生徒が固まって、おしゃべりしていた。

ちらつと見て、通り過ぎようとして、あれ？と思った。  
なんか光っている。

もう一度視線をやった後に、俺は、ハデに階段を踏み外した。  
いつてえ……今日は、厄日だ。

踊り場にしりもちを付いた俺を生徒たちが驚いて見つめている。

さっきの女生徒たちも一斉にこっちを見たようだ。

俺は、しかし、その時、不思議な物を見ていた。

女生徒たちの真ん中で、文字通りオーラを放って光っている少女。  
その光が次第に薄れていき、見えなくなるまでを、夢のように眺  
めていた。

そして、思い出した。

今俺の目の前にいる少女。

やさしげな目元。緩やかにウェーブしたきれいな髪。制服の下に  
息づく豊かな胸。

この少女こそ、ゆうか、深宮ゆうかであることを。

カッと顔が熱くなる。

少女の裸体が頭に浮かぶ。

だが、待て、あれは現実であるはずがない。夢だろう。昨日見た  
夢だ。

だが、夢の中で俺は、この人を抱いたんだ。俺は、それほどこの  
人を想っていたのか？

いや、待て、会うのは初めてだったはずだ。

それより、これは現実か？まだ夢の中か？

俺は混乱していた。だから、彼女が俺に近寄ってくる姿が網膜に  
は映っていたのだが、全く理解していなかった。

「あの、だいじょうぶ？」

夢の中で聞いたと同じ声。だがそれは、通りすがりの慌て者に対  
する全く普通の調子だった。

「あ、ハイ、だいじょうぶです」

俺は、急いで立ち上がった。

「深宮さん……？」

思わず漏れた俺のつぶやきに、

「はい」

と答えた彼女と眼があった。

「わたしに何か……」

と彼女が尋ねる。俺は、

「……すみません。俺のこと知っていますか？」

ときくしかなかった。

しかし、いやになるね。自分のあほさに。もうちょっとなんか言  
いようがあるだろう……

彼女は、ちよつと首を傾げ思案して、

「たぶん、初めてお会いすると思います。……もしかして、わたし  
の思い違いなら、許してください」

いや、もう許すも何も……

「いえ、すみません。俺の勘違いです。こちらこそごめんなさい」  
といって、頭を下げる。

そのとき、耳元で小声が聞こえた。

「ごめんなさい。また後で。裕人さん」

はつとして顔を上げる。

いたずらっぽくほほえんだ笑顔の中で彼女がウインクした。

静かに離れて友達の下に帰っていく彼女。

みんなで階段を上がっていく。

誰かが、なかに、あの一年生とかいう声が聞こえる。

俺は、ただその光景を眺めていることしかできなかった。

あーもう、ぐちゃぐちゃだ。

### 再会は危険の香り - 3 -

こういうのを千々に乱れるとかいうんだろうね。

それから俺は、この今日最後のホームルームの時間まで、まるで授業なんて聞いちゃいなかった。

いったいこれってどういうことなのか？ あれは、夢じゃなかったのか？ 本当にあったことなのか？

俺がどうかしちゃったんじゃないのか？ 今も夢の中なんじゃないか？ それともどっかパラレルワールドにとばされたのか？

大体俺の知らないクラスメートやら、正体不明の美人の先輩がいるし……

し、し、しかも……考えただけで顔が火照ってくる。

午後の授業いっぱい悩んで、もはや思考停止状態。疲れた。

ホームルームの終わりを告げるチャイムと共に担任がでていくと、ぐったりと机に寝そべった俺に、桜井が声をかけてきた。

「ヘイ、矢上っち。深宮さんと第一種接近遭遇したそうだな」

驚いて顔を上げる俺。こいつどうして知ってやがる？

「あ、その顔、本当なんだ。おまえが階段を踏み外して、下にいた深宮さんを押して倒したっていう話だけど……」

「違う！」

誰だ、そんな尾ひれの付いた間違った情報を流したやつは。

「違うの？ でも、昼休みの階段で君と深宮さんがころんでたって」

「転んでたのは俺だけ。彼女はそばにいただけだ」

「ふーん、そう。でも深宮さんいたんだ。で、我校一のお嬢様を見た感想は？」

俺は、瞬間的に顔が火照ってくるのが分かった。それを何とかやつに気づかれないようにしながら答えた。

「オ、オーラがでていた」



いや、だつてほんとに光つて見えたんだから……

やつはにやりと笑いやがった。

「イヤー、矢上っちの美的感覚がまともでよかった。ちょっとオーバーかもしれないけどな。蒼井さんのことを知らないような言い方するんで、ちよつと疑つてたよ」

それは、また別なんですが……。

「おまえも深宮さんのファンクラブにはいるんなら、紹介するぞ」  
こいつ、入ってたのか。ていうか、さっきの間違い情報は、そこから来たな、絶対。

「い、いや。今日の所はやめとくわ」

俺は、めいっぱい疲れた頭をほぐすためにも、クラブに行こうと立ち上がった。

## 再会は危険の香り - 4 -

考え事はとりあえず脇に置いて、ひたすら体を動かしたことで、ようやく頭が普通に戻ってきた。

あー疲れた。

夕闇迫る土手の帰り道。河原に沿って歩くと吹く風が気持ちいい。ただ、歩いていると今日の出来事は何だったのかとまた考え始めていた。

冷静に考えて、まず、あれは昨日の夢だ。そうに違いない。

すっごく恥ずかしくて、思い出すとドキドキしちまうが、夢なんだからそういうこともあるだろう。

俺がそんな夢を見たり、深宮さんが俺のことを知っていそうだったりするのは、たぶん、きっと何処かで会ったことがあるんだ。

俺の中に何となくもやもやした、それでいて懐かしいような気持ちがあるのは、きっと、ずっと昔に会ったことがあるからなんだ。それがいつなのか全然思い出せないが……。

そんなことを考えながらぼんやり歩いていると、何かが土手を駆け下りてくるのが見えた。

いや、違うか？

夕闇迫る景色のそこだけが歪んで見える。そこに透明なレンズがあつて光を曲げているような感じ。それが、形を変えながら移動して、急速にこちらに向かってくる。

まるで大型の鳥のように翼を広げ突っ込んできた。すごい衝撃。

何にぶつかられたかも分からないまま、足が浮き、体が吹っ飛んだ。

痛ってー。

地面にぶつかって頭がくらくらする。

何だーと思つて顔を上げた眼のはしに、再び移動する影が映つた。今度もさつきと同じように鳥のような形。それがまっすぐ俺の方にくる。

やばいと思つて立ち上がろうとするが体中がずきずきする。間に合わない。とつさに持っていた鞆を前に出してかばう。

衝撃。鞆と共に体が吹っ飛び、地面の上を転がった。体中に痛みが増す。カッと胸が熱くなった。

くっそー、何だつてんだ。どうしてこんな目に遭わなきゃなんないんだ。

肘をたてて体を起こしたとき、さらに3番目の影がやってくるところだった。

もう目の前に来ている。動けない。右手が痛い。いや熱いのか？

そう思つたとき、影の動きが止まつたように見えた。

同時に、土手を誰かが駆け下りてくる。俺の目の前、影との間に飛び込んできた。

「あぶない！」

俺が叫んだとたん、猛烈な風が俺の左右を駆け抜けていった。

目の前で、制服のスカートが舞い上がる。

両腕を水平に上げた背中越しに、前を向いている顔の両側で髪が舞っている。その髪を右手でまとめながら、振り返った顔。

そのとたん、俺の心臓がドキンと鳴った。

再会は危険の香り - 5 -

「裕人さん、大丈夫ですか？」

深宮ゆうかが心配そうに俺の横にしゃがみ込んだ。

俺は、あわてて起き上がろうとして、

「つつ！」

痛みで顔が歪む。

「ごめんなさい。少し遅くなってしまいました」

そういいながら、腕を背中に回し俺を支えてくれる。

痛みに耐えながら、上半身を起こして一息つくと、鼻に届く彼女の香りが痛みを和らげてくれるような気がする。

「どうして……？」

俺が声を出したとき、彼女は答える前に、さっと振り返って、俺を守るように背中を向けた。

彼女の背中越しに、少し離れた土手を誰かが駆け下りてくるのが見える。

背の高い男。豊かな髭をしている。すぐ後ろを少女が追いかけてきた。

ショートカットのその顔に見覚えがある。

あれは、蒼井さん？

男が振り返って追ってきた少女に右腕をつきだした。なめらかな動きでそれをかわすと二人の位置が入れ替わっていた。

男は、右腕を素早く薙いだ。少女には届かない。

ところがそこからあの影が飛び出した。

あぶない！

俺が心の中で叫んだとき、少女の姿が一瞬消えて、男の至近距離に進入している。

まるで舞うように少女の両腕が交差して動いた。

次の瞬間、男も少女もさつきいた地点から5メートル近く離れて立っていた。

俺は驚きながらその光景を見ていた。

「大丈夫ですから」

深宮さんが肩越しに俺につぶやいた。それから立ち上がって、

「瑞穂、ありがとう」

と柔らかくいった。うなずいた蒼井さんは男を警戒しつつ下がってくる。

男は髭の端でにやりと笑ったように見えた。

「下がちなさい。あなたではわたしの相手はできませんよ」

初めて聞く深宮さんの厳しい声。男は、今度ははつきりと笑みを浮かべた。

「おひさしぶりですな、姫。あなたの守りは確かにやっかいだが……まあ、手のないこともなし……」

男の口調にはとぼけたような余裕がある。

「そちらのボーヤは、しよせん人。あなたに勝ち目があるとは思われぬが……まあ、よい。小手調べは済んだ。次は、覚悟しておかれるといい」

男の声が終わるやいなや、砂塵が舞い上がった。男の周りで風が渦を巻いている。

その中で影が揺れたと思ったとき、男はすでに消えていた。

舞い上がった土埃が深宮さんの前で分かれ、俺の傍らを通り抜けるのを、俺はボーと見ていた。

今のは、何だ？ いったい何が起きてるんだ？ これは、本当のことなのか？

人が消えた。目の前で。嘘だろ。なんか間違いだろ。

それとも、俺の頭がおかしくなったのか？ 幻を見てるのか？

俺は、頭を振ろうとして、体中の痛みに気が付いた。

あまりのことに忘れていた痛み。息が苦しくなる。

不意に、深宮さんの顔が目の前に現れた。俺の瞳をのぞき込むような仕草。

すっと、さっきまでの狼狽が収まっていく。

ああ、そういえばこの子に会ってから不思議なことばかりなんだな……

頭の何処かでそう思いながら、俺は意識が薄れていくのを感じていた。

再会は危険の香り - 5 - (後書き)

2章―再会は危険の香り―了

次は、

3章―うれし、恥ずかし、キスの味―

よろしく。

### 3章―うれし、恥ずかし、キスの味 - 1 -

ここは何処だろう。

どこか野原の上。足元から緩やかに下る草原が見える。

見晴らしはきかない。30メートルぐらい先には白いもやがかかっている。

奇妙なことに、俺の周りで風が渦を巻いているのが見える。いや、風じゃないかもしれない。

大気中になんだか不定形の固まりが浮かんでは、風にながされるように消えていく。そこかしこに、いくつもいくつも浮かんでは消える。

これは何だ？

ふと傍らに少女が座っていることに気が付いた。

今まで気が付かなかったのか？

それとも不意に現れたのか？

俺には分からなかった。ただ、それが深宮さんだということは直感で分かった。

彼女が俺の方をむいて、微笑みかけてくる。

幸せそうな優しい笑顔。世界中の生きとしいける者がその笑顔で魅了されそうだ。

そして俺も。

彼女がそつと両腕を胸の前で伸ばした。

そこで初めて俺は、彼女が今まで見たことのない服装をしていることに気が付いた。

これは、なんと言ったらいいんだろう。昔の、そう、ギリシャ神殿のレリーフに刻まれた、女神たちの服装に似ているだろうか？

その服が微光を放っているように見える。いや、服ではなくいつか見たように、彼女自身が光っているのか。



俺が見つめるその前で、彼女が伸ばした手の先で、さっきの不定型な大気をつかんだ。

とたんに手の中に薄いオレンジ色の小鳥が現れた。

俺は、それをちつとも不思議に思わない。

彼女がおとなしくしている小鳥の頭を撫でている。それから、そつと放す仕草をすると、小鳥は高く舞い上がった。

彼女が俺の名を呼んだ。

いや、たぶんそれは俺の名なのだろう。なんと言われたか分からなかったが……。

彼女が俺に目配せする。俺にもやって見ろと言うことか？

俺は、手を伸ばし、ちょうどわき上がった渦をつかんでみた。

手の中に、いきなりかえるが現れた。しかも30センチはあろうかという大きさだ。

うわあ。と驚いたときには、巨大がえるは飛び跳ねて一息に、もやの中に消えていった。

彼女が楽しそうに笑っている。初めてみる子供のような笑顔。ころころと弾むようだ。

そんな彼女の笑顔を見て、俺は幸せだった。なんだかとても幸せだった。

俺が、なにげに渦をつかむと、今度はきらきら光る薄水色の蝶が手のひらいっぱい羽を広げていた。

その蝶を慎重につかんで彼女の髪にのせる。彼女はいやがりもせず、そつと指で蝶を触って、俺にほえんだ。

蝶までが彼女の光に包まれて、まるで輝くりボンのように彼女の髪を飾った。

俺は、その笑顔をいつまでも見つめていた。

## うれし、恥ずかし、キスの味 - 2 -

目が覚めた。

俺の部屋。俺のベッド。服は、、制服のまま。

うーん、すごいデジャブー。

あれは、昨日のことか？それとも、昨日のことと思ってるのは全部夢か？

はっとして時計を見る。

朝。登校するにはまだ十分早い。

俺は、のろのろと起き上がる。

体の調子は問題なし。特に痛いところもない。

記憶では息もできないほど痛めつけられた気がするが……。

やはり夢なのか？どこから夢なのか？

俺は、部屋を出て廊下を歩き始めて、はっとした。

何かいる。食堂から、かたかたとした音が聞こえる。

事情があつて一人暮らしの俺の家で音が聞こえると言つことは、その意味することは……

俺は、昨日の髭面の男を思いだした。

突然おそわれた記憶。何にぶつかられたか分からないが、強烈な衝撃。夢だとはとても思えない記憶。

俺は、体がかがめ、おそるおそる食堂に近づいた。部屋のドアは半ば開いている。

ある種の恐怖が胸を締め付ける。

くっそー、落ち着け、俺。

もしかしたら、単なる泥棒かもしれないし……いや、それもやばいな……とにかく、正体を見極めて対処を考えないと……

額にうつすらと汗が浮かんできた。

俺は、ドアの隙間から中をのぞき込んだ。  
手前にはテーブルがある。イスが4脚。その奥にキッチン。  
床すれすれの視線が動く物をとらえる。

それは、白いソックスに、すらりとした長い足。その足がキッチンからこちらを向き、何事もなかったように声が聞こえた。

「裕人さん。朝ご飯にしましょう」

「……深宮さん」

俺は、一気に緊張が解けて、その場に座り込んでいた。

一体全体、昨日からどうなってるんだ。

俺が、ボーとして座り込んでいると、彼女がぱたぱたと俺の前まで来て、膝をそろえてしゃがんだ。

目の前の膝がかわいい。

その膝小僧反則ですよ。

いや、そうじゃない。そんな事じゃなくて……。

彼女が手を出して俺を引き起こそうとしてくれる。俺はその手を取って……

「深宮さん……」

「ゆうかです」

「へ？」

「そう呼んでください」

「ゆ、ゆうかさん……」

「いえ。ゆうかだけで」

につこり笑って俺を引き起こしてくれた。つないだ手を引いて、  
「さ、食べましょう」

彼女がテーブルの方へ行こうとする。

「ちょっと待って。訊きたいことがいっぱいあるんだけど……」  
俺は彼女を押しとどめようとした。

「ええ、分かっています。あとでうかがいます」

「あ、でも、先に一つだけ訊かせてくれ」

俺の頭の中でいくつもの質問が浮かんだ。

何で、君はここにいるの？昨日のことは本当のことなのか？

何で俺おそわれたんだろう？どうして人が消えたんだ？

俺って、おかしくなったのかな？

どうして君は俺のことを知ってるんだい？なんで俺のことをそんなやさしい目で見るんだ？

君は誰？俺は誰？

だあー、一つにまとまらない。

彼女が俺の目を見て優しくそうにほほえんでいる。

俺は、焦って、苦しくなって、口を開いた。

「あの、俺……君のことを抱いたんだろうか？」  
へ？

何をくちばした！

うわあ、最低だ、俺。

カーとして顔が熱くなってきた。

彼女はと見ると、一度伏せた目を上げて俺を見つめる。首筋から

耳たぶまでピンクに染まっている。

返事はなかった。そのかわり、彼女の顔が近づいてきて、俺のく

ちびると彼女のそれが触れ合った。

背中に電気が走ったような感覚。

俺は、無意識に彼女の手を引いて、体を引き寄せると、抱きしめていた。

その時、彼女の舌が俺の隙間から差し入れられた。舌がふれあい、重なった。

背中を走った電流は、頭まで達してしびれるような感覚。

ああ、もうなんでもいいや。

俺は、ひたすら彼女を感じていたかった。

不意に息が苦しくなって、口を離した。

はあ、はあ、と息が漏れる。

彼女も同じように肩で息をしている。潤んだ目元までピンクに染まっている。

彼女は、閉じていた目を開けて、はじめ恥ずかしそうに微笑んだ。それから、とびっきりのうれしそうな表情で笑った。

もうだめだ。

心臓が締め付けられるような感覚。

撃たれちまったよ、おれ。

彼女の笑顔に貫かれた。

俺は、もう一度背中にした腕に力を入れた。

「あん」

彼女が身をよじって、声を上げる。

「裕人さん……そろそろ時間……です」

彼女がつぶやくように言う。

俺はようやく我に返って、彼女を離れた。

### うれし、恥ずかし、キスの味 - 3 -

それから二人、黙ってテーブルに着く。

彼女のつくってくれた和風の朝食がおいしそうだ。

そういえば、彼女、制服にエプロンだったのか。今、気が付いた。うん、かわいい。なんか、幸せな気分だ。

こんな気分を前にも感じたことがあるような気がする。

いつだっけ？えーと、いつだっけ？

彼女を見つめながらそんなことを考えていると、ゆうかが口を開いた。

「裕人さん。今はあまり時間がありませんから、少しだけお話ししますね」

「え、あ、そうか……。うーんと、ゆ、ゆうか。俺に質問させてくれる？」

彼女はちよつと恥ずかしそうな表情をする。

「あ、ごめん、今度は大丈夫だから……」

うなずく彼女。

「でも、俺、バカな質問するかもしれないけど……その時はちゃんとやってくれ」

「じゃあ、ゆうか。俺には君が普通の人には思えないんだけど……君ってもしかして、超能力者だったり、宇宙人だったり、未来人だったりする？ごめん、バカな質問で……」

彼女はちよつと考える素振りを見せて、

「そうですね、今の人の基準からすれば、超能力者というのが一番近いでしょうか。でも、わたしは人です。ちよつと古い人ですけど」  
話の後の方はよく分からないけれど、超能力者というのは少し納得。

「じゃあ、昨日会ったひげ面の男もそうなの？あ、それから蒼井さん？」

「みんな同じ様な人です」

「やっぱり夢じゃなかったんだな」

彼女がうなづく。

「俺は、ゆうかと何処かで会ってるのかな？ここ数日じゃなく。ずっと以前に」

「ええ」

「何処であつたんだろう？思い出せないんだ」

彼女はちよつと困った顔をした。

「説明が、難しいです。ずっと以前、世界の中心でとしか……。裕人さんが思い出せないのは、あなたがまだ、本当の意味で目覚めていないからです」

「目覚めていない？」

「そう、そのうち分かります」

いわれていることの意味が理解できなくなってきた。

えーと、どうしよう？

違う質問を試してみる。

「その時俺は、ゆうかと仲良しだった？」

そのとたん、彼女の瞳に大粒の涙が浮かんた。それは、頬を伝わり、流れ落ちる。

え？俺、いけない質問をしたのか？

しまった。そうか、俺が忘れてるのがいけないんだ。それで、ゆうかは悲しんでるんだ。

「ごめん。俺、無神経なことだった。忘れちゃいけなかったんだよな。でも、ごめん。まだ思いだせないんだ」

ゆうかは涙を拭いながら、

「いいんです。また、会えたのだから。いいんです」といった。

胸が切なくなる。

忘れているものならば、思い出したいと思う。彼女のためにもきつと思ひ出したい。

彼女が落ち着くのを待つてから、もう一度尋ねる。

「まだ、質問してもいい？」

うなずく彼女。

「俺は、どうして襲われたんだろう？ あれは、俺が目当てだったんだよな？」

彼女は少し表情を引き締めて、

「そう、あの者のねらいは、裕人さん、あなたです。なぜかという  
と、あなたは、長い間閉じこめられていた。でも、今、あなたはここにいます。だから、彼らはあなたを再び閉じこめたいのです。もしくは……」

彼女の表情が曇る。

「ごめん、ちよつと分からないよ。俺、閉じこめられた記憶なんてないし。それも忘れてるのかな？」

だめだ。自分が信じられなくなってきた。

「そうですね。それは分かります」

「じゃあ、俺はこの先もまたねらわれるのか？」

彼女はちよつと眉を寄せて、固い声でいった。

「そうなると思います」

俺の脳裏に昨日の記憶。全身の痛みがよみがえる。俺は、一瞬息が止まって、ふーと吐き出した。

ゆうかが俺の手を握ってきた。俺にまっすぐ目を向けて言う。声には静かな力があつた。

「裕人さん。あなたのことは、わたしが守ります。だから、心配しないでください。瑞穂も助けてくれるでしょう。だから、何かあったときは、わたしは瑞穂を捜してください。わたしは必ずあなたのことを見ています」

気持ちが悪く落ちていく。それにしても……



「俺に、できることはないのか？自分の身を守るために。……俺には何の力もないけど、ゆうかたちの負担を減らしたい」

何ができるわけでもないと思いつながら、守られているだけじゃあ納得いかなかった。

彼女は軽く微笑んだ。

「裕人さん。覚えていてください。あなたは、本当ならば、おそれるものは何もないのです。ただ、今はそれを忘れているだけ。今はわたしの守りが必要でも、やがて、守られるのはわたしの方でしょう。だから、おそれないで。何があっても、信じて」

彼女の声が胸の奥に響いた。

勇気がわき上がってくる気がした。

## うれし、恥ずかし、キスの味 - 4 -

それから、俺たちは少し遅くなった分、急いで朝食を片づけて、一緒に登校した。

途中からどちらともなく手をつないだ。  
すっごく恥ずかしい。

学校が近づいてくると、恥ずかしさに耐えきれず、俺は手を離れた。

ゆうかは校門に向かってちょっと駆け出すと、振り返って、俺に手を振った。

それだけで心臓がドキドキする。俺は、周囲を見ないようにして校門をくぐった。

教室へ続く廊下を曲がったところで、部屋の前にいる蒼井さんの姿が目に入った。

明らかに俺を待っている感じ。彼女がずっと寄ってくる。  
まるでネコみたいだ。えーと、なんていったらいいんだっけ？

「お、おはよう。ていうか……はじめましてかな？」

「はい。こちらこそ。……裕人さん元気になりました？」  
印象どおり明るい声だ。

「昨日は、ありがとう、助けてくれて。でも、びっくりしたよ。かつこよかった」

彼女はへへへという感じで笑った。

「ゆうかお姉さんにちゃんと聞いたんですね」

「うん？ いや。詳しいことは、あんまり……。だけど、ゆうかときみが守ってくれていることは聞いた」

そこで彼女は突然ニマツとした。

「今、お姉さんのこと名前で呼びましたね。……朝からいちゃつい

てませんでしたか？」

なっ！なんで！そんなこと分かるんだ？

脳裏に、ゆうかとのキスを思い浮かべて、顔が火照ってくるのが分かる。

「あ、いや……してない……。ほんと……いちゃいちゃなんて……」

俺は、見事にしどろもどろになっている。

「してない……ちょっとだけキスしただけで……」

あああ、自爆。言わずもがなのことを……

蒼井さんがちよこつと舌を出して、わざとらしく肩で息をした。

「裕人さん。お姉さんのことをちゃんと頼みますね。きつとですよ」  
急に真剣な表情。

「あ……俺……努力する」

そのとたん彼女が吹き出すように笑った。ほんとくるくる表情が変わる。

「もう、大丈夫ですよ、裕人さんなら。お姉さんの想い人なんですから」

その言葉に俺の心臓が反応する。

想い人。

俺はそう呼ばれたのか。

どという経緯でそうだったのか分からないけど、今は、ゆうかこそ俺にとつての想い人だ。素直にそう思える。

蒼井さんは、口の中でまったくうとかつぶやきながら、

「では、裕人さん。何かあったら、できるだけ皆と離れて、わたしがお姉さんのそばにいてください」

「うん。分かった」

それだけいうとにこつと笑って俺より先に教室に入ってしまった。

俺は、なんだかちよつと緊張しながら席に着いた。

鞆を開いて中の物を取り出そうとする。突然バンツという大きな

音とともに、背中に激痛。

痛ってー。くそーいきなり襲ってきやがったのかよ。

俺は急いで振り返って身構えようとした。  
が、あれ？

そこに立っていたのは桜井だった。

「何すんだよ、このやろ」

俺が身構えたこぶしを突き出そうかと思ったとき。

「矢上っちー。今朝、深宮さんと一緒に登校してきたんだってー」

うわあ、もう知られてんのか。

「しかも手えつないでたって話だけどー」

どひゃー、やめてくれ。

「どゆこと？」

奴は好奇心満々の顔をしている。しかも、教室がざわつくのがはつきり分かった。

俺は……一瞬ごまかすことを考えたが、口について出たのは、

「俺、ゆうかさんを好きになっちまった」

という言葉。奴が畳みかけてくる。

「それでアタックしたのか？」

「え？それは…えーと……」

「そっか、昨日の昼休みのアタックだな。そうだろ？」

「そ、それは、ちが…」

「で、深宮先輩がオーケーしたのか？くっそー、信じられねえ。何でおまえなんだ。なんでだろうー」

おい、人の話を聞け。ていうか大声出すな。

教室のざわめきが大きくなったのがわかる。

やべー。やっぱり誤魔化すべきだったか。

桜井の奴はまだ『驚天動地だ』とかわめいてやがる。

俺は、教室を見渡す勇氣もなく、ちらっと、蒼井さんの方を見た。その瞬間、彼女は大げさに肩で息をして、両手のひらを上へ向けた。  
あーあきれられてる。まあ、そうだよな。俺がバカでした。

ただ、彼女の目がにこにこ笑っているのを確かめて、知られてはいけないことを言っただけなのではという危惧は除くことができた。  
ごめん。今度から気を付ける。

## うれし、恥ずかし、キスの味 - 5 -

結果的に、ゆうかのファンクラブの力を見誤っていたようなのだが……

俺が、休み時間に廊下に出たり、移動教室に行くために歩いていると、そこかしこでざわめきが上がる。わざわざ教室の中から覗きに出てくる奴までいる。

何で、あつという間に学校中に広まってるんだ？

おい、どういうことだ、桜井？

俺は移動教室まで席が隣り合っている桜井の奴に真剣に尋ねた。

「あのな、矢上っち。おまえはこの奇跡に気づいていない。深宮さんがおまえを選んだという奇跡に。みんなその衝撃にやられてるんだ。だから、あつという間に広まっちまったんだよ」

そこまで言うか、おまえ。

でも、たしかに俺にとっても奇跡というか、夢のようだ。

ここ2日ほどの間、俺は自分が夢の中にいるのか、それとも現実にいるのか自信がなかった。

今は……たしかに普通の日常ではないけれど、これが現実だという自信がある。

その自信はゆうかがくれた。

もしかしたらどこかのパラレルワールドで2日前までの俺がいるのかもしれないけれど、ここにいる俺は、今の世界を選んだんだ。ゆうかといえることを選んだんだ。そう思う。

それにしてもどうすりゃいいんだろうね？このにわか有名人状態。俺って、あんまり目立つちゃいけないんじゃないのか？

すぐ見つかる標的状态。旗持ってねらってくれて言ってるようなもんだよな。

ただ、はじめから何処にいてもあいつには見つかりそうだから、意味はないのかも。

蒼井さんも何も言わないし……。  
うーん、悩む。頭が疲れてきた。

つらつら悩んで机に突っ伏した昼休み。教室が突然ざわめいた。  
やな予感。

おそろおそろ顔を上げると、教室の入り口でゆうかと蒼井さんが話している。

俺に気づいて手をふるゆうか。部屋にいる人の目が一斉に俺に集まったような気がする。

えーと、ゆうかさん。周りの状況に気づいていませんか？  
それとも、知っててやってます？しかも、俺を呼ぶように手を振るし……

仕方ない。まあ、自業自得だよな。

俺は立ち上がって、入り口まで行く。みんなの視線が刺さるようだ。

ゆうかはそんなことお構いなしに、俺と蒼井さんの手を両方にとって、

「じゃあ、いきましよう」  
と歩き出す。

楽しそうだ。

まるで小さな子供のような笑顔。家族に囲まれてはしゃいでいるような。これから遠足に出かける時のような。

俺は、その顔を見ているだけで、周りのことは気になくなっていた。

ゆうかの向こう側で、蒼井さんがくすつと笑ったようだった。

うれし、恥ずかし、キスの味 - 6 -

で、女の子ふたりとおべんと食べてる状況ってのはどうよ？

しかも中庭に堂々とシート引いて座ってるってのは、どう考えても目立ちすぎでしょ。

さらに、ふたりとも桜井曰く我が校のトップファイブだぜ。

俺、そのうち襲われるんじゃないかな？あ、いや、襲われるのか。別の奴だと思っけど。

ゆうかと蒼井さんはふたりで楽しそうに話しながら食べている。

まるで姉妹のよう。

あれ、そうなんだっけ？

「あの、ゆうかと蒼井さんって、どういう関係？きみは、ゆうかのことお姉さんって呼ぶよね？」

「そうですね。関係はありますけど、直接のお姉さんじゃないですよ。ゆうかさんは、わたしにとってはずっと年上のお姉さんというかそんな感じですよ」

ずっと年上？

「それって、落ち着いてるって事？」

「うーん、それもありますけど……」

「これこれ、瑞穂ちゃん。それ以上言わないの。裕人さん混乱してるじゃない」

「ハ―イ、お姉さん」

うーん。俺って遊ばれてる？まあ、いいや。

通りすがりの奴らにジロジロ見られている気がするが、もうなれた。というより、この状況で開き直った。開き直った証拠に、なんだか大声で言いたくなってきた。

お、れ、は―、ゆ、う、か、が―好きなんだぞ―！

誰がなんていっても好きなんだ！彼女の笑顔が好きなんだ。



だから、二度と彼女を泣かせない。だから、思い出したいと思う。俺が忘れていることを。

ゆうかは、俺が目覚めれば思い出すといった。なら、どうにかして目覚めてやる。

なにをどうすればいいのかわからないけれど、きっとできるはずなんだ。きっと。

そんなことを考えていて、ふたりの話を聞いていなかったんだが、蒼井さんがずっとゆうかの耳に口を寄せた。

この状況で内緒話ですか、お二人さん？

蒼井さんがなにやらささやく。ゆうかの顔が見る見る赤くなっていく。

耳まで赤いよ。

そんなになりながら彼女の口から

「ええ」

という声が小さく漏れた。

はあ？なに？

蒼井さんが両手でほっぺを押さえている。彼女の顔にも赤みがさす。突然蒼井さんが両手を俺の方に伸ばした。

えーと、なに？握手？

俺も両手を出して……ばしん！と彼女の両手が俺の手のひらを上からはたいた。

うわ、痛いよ、蒼井さん。

彼女はすかさず俺の両手を取ると、ぶんぶん振りながら、

「もう、絶対、お姉さんのこと大切にしてください。約束ですよ」  
とにじり寄ってきた。

いや、すごい迫力。ちらっとゆうかの方を見ると、まだ、恥ずかしそうに顔を赤らめながら俺の方を見てる。

えーと、大体なに訊かれたかわかりました。

ごめん。俺も今日おんなじ様な事きいたよね。ほんと恥ずかしい。

にじり寄って俺の回答を迫っている蒼井さんに俺は、  
「うん。わかった。約束する。絶対に」

とはっきり告げた。

そう、もう迷うこともないし、誤魔化すこともない俺の気持ち。

蒼井さんは、ちょっと意外そうな表情。それから、見る見る泣き顔になっていく。俺から離れてゆうかに抱きついた。

「よかったですね、お姉さん。よかったです……」

涙声。ゆうかは黙って背中を撫でてやっている。それから俺の方をちらっと見て、まだ赤い顔で微笑んだ。

あー後から顔が火照ってきた。熱い、熱い。

ていうか、きみたち。そんなところで美少女が抱き合ってたら、眼のやり場に困ります。

周りのジロジロ度も上がったような気がするし……それに、俺が泣かしたと思われるでしょ。いや、俺が泣かしたのか。

えっと、そろそろ戻りませんか？ふたりとも。ね。

うれし、恥ずかし、キスの味 - 6 - (後書き)

3章―うれしい、はずかし、キスの味―了

次回から、

4章―あらしの別れ

どろどろ、よろしく

#### 4章―あらしの別れ - 1 -

教室に戻ると、当然といやあ当然だが、桜井の奴に、はたきまくられた。

まあ、あれだけ公然とすりゃあ仕方ないか。情報網云々の話じゃないな。

奴は、うらやましいだとか、俺にも分けてくれよだとか、

「しかも、何で蒼井さんまで……どうして両手に花なんだ！」

とか、わめいていたが、仕方ないので適当に相づちを打っておい

た。

午後の授業が始まるのが、待ち遠しいなんて今まであったか？

しかし、待ち遠しかった授業を、おれはすでに聞いてない。

午後イチは眠い。教師の話がお経に聞こえる。

つまり全く聞いてないということなんだが……

ちよつと意識が飛びかけていると、突然辺りが明るくなったような気がした。

見ると、教室に電灯がついていた。

あれ？なんで？と思ってふと気が付いた。

窓の外が暗い。

さっきまで晴れ渡ってたのに。窓際の俺の席から外の様子がよく見える。

空に黒い雲が広がっていく。遠くの空はまだ晴れているようだが、近い空には、見る見る雲の厚みが増してく。今にも雨が降り出しそうな感じ。雲が少し低くなった気がする。

眺めている俺の前で、雲が突然落ちてきた。

「なっ！」

驚きで少し腰が浮いた。

天から地に向かって雲が螺旋をまく。

これは、竜巻？

と思った瞬間、開いた窓から猛烈な突風が吹き込んだ。

教科書やノートが舞う。窓際の生徒が部屋の内側に投げ出されて倒れた。そこかしこで悲鳴が上がる。おれも投げ出されたが、とっさに踏ん張ってかろうじてしゃがみ込んだ。

突風は、次から次から吹き込んでくる。誰かが窓を閉めようとしてやがんで窓際によるが、つかんだサッシを動かせないようだった。他の生徒は、床に座って少しでも風の影響を避けようとしているが、今にも風圧に耐えられず飛ばされそうだ。

俺は、蒼井さんを搜した。彼女は体制は低くしているが、それほど力も入れずたたずんでいる。

俺は、彼女に目配せした。彼女もうなずき返す。

これは絶対あいつの仕業だ。どうしよう？どうしたらいい？

俺は風圧に耐え、何とか蒼井さんのそばまで寄ると、

「出よう。みんなを巻き込まないところに」

とだけようやくいった。

彼女はうなずくと俺の手を取った。それだけで俺の周りの風が弱くなったような気がする。

廊下を出て校舎を進む。信じられないことに、廊下の方が風が強烈だった。狭い通り道を吹き抜けるよう。

何処か風の吹き込まない部屋はないのか？

俺がそついうと蒼井さんは、

「それはだめです。狭い部屋に閉じこめられると、逃げ切れません」ときっぱり言った。その表情には、少しも怖れはなく、瞳に強い意志を感じた。

まったく、この子は雰囲気があるところ変わるよな。

とかよけいなことを思う。

俺たちは校庭に出た。

## あらしの別れ - 2 -

そこは、なんていう景色だろう？

100メートルほどさきに巨大な竜巻が天へのびている。幅は、10メートルほどだろうか？その中を、地上から空へと何かが舞い上げられていく。

あれは、校庭の木か？

近くのフェンスが軒並み倒れている。

俺は風に逆らいながら、両腕で顔をかばっていた。

「裕人さん、下がって！」

蒼井さんが俺を背中にかばう。

彼女の手のの中にいつの間にか一本の長剣が握られているのが見えた。

それは、すらりとした両刃の剣で、まるで中国の武俠小説に出てきそうな代物だった。

彼女が素早くそれを動かした。三つの何かが斬られたような気がした。

俺の目にも新たな影が見えた。

それは昨日俺がたたきつけられたんだかわからない大気の固まり。

しかも、いくつあるんだ、これは？

八つまで数えたところで、蒼井さんが目にも留まらない速さでまとめて切り裂いた。まるで舞っているようだ。

彼女は油断なく周りに気を配っている。その背中から、いつかゆうかに見たような光があふれだしているのが見えた。

その時、強風が急に弱くなった。竜巻も上空からほどけかかっている。

驚いて顔を上げると校舎の屋上に人影があつた。

「ゆうか！」

思わず叫ぶ。

彼女はちよつと俺の方を見て、安心した表情を見せた。それから胸の前で組んでいた両手を離し腕を差し出した。

見る見る竜巻が消失していく。そして、それがあつた空中に男が一人浮かんでいた。

見覚えのある、髭面の男。男は苦笑しているようだった。

「お見事といわせてもらいましょうか。わたしの力を封じ込めておしまいになった」

ゆうかは厳しい声でいう。

「あなたの負けです、風伯。もう私たちに手出しは無用にしてください」

「そういうわけにもいかんのですな。これは、天の意志なのだ」

「天の意志も永遠に普遍というわけではありません。しかも私たちには、天の盟約も、地の理ことわりもあるのです。」

男は、少し困った顔をしたが、出てきた言葉は、

「わたしごときには判りませんな。ただ、天の意志に従うまでだ」  
次の瞬間、男は両手を合わせ、何事か唱えた。男の手の中から、複数の何かが飛び出した。

それは、三匹いた。いや三羽というべきか？人の背丈ほどもある巨大な羽を持つ鳥。その羽が赤く燃えているように見える。

これは、なんだ？

もしかして不死鳥とかフェニックスとかいわれるやつか？そんなの本当にいたのか？それとも、これもやつの超能力の一つなのか？怪鳥は凶暴な目をして俺たちを見ている。

ゆうかが明らかに非難の声を上げる。

「自然の理を曲げて、この世に呼び出すなど、太古においてはともかく、今の世には許されません！」

男が腕を振る。怪鳥が一斉に飛び出した。

### あらしの別れ - 3 -

火が飛んでいるような気がした。

三方から一斉に迫ってくる。ねらいは明らかに俺。

蒼井さんが俺の前で剣を構える。

一羽が突然火を噴いた。俺は身構える。蒼井さんが振るった剣は炎を吹き飛ばしている。

時間差をつけて反対側からもう一羽が火を噴く。剣が翻ってそれも弾けるように消える。

その隙に三羽目が俺に飛びかかってきた。蒼井さんの剣がその鉤づめを持った足をくい止める。

俺は、なんとか彼女の動きに合わせて、体を回り込ませていた。

だが、彼女の動きが早すぎてついていけない。

思わず少し離れたところで、目の前に怪鳥の爪があった。

うわあ！やばい。

とっさに腕を出してかばう。その時、右の手のひらが熱くなって、光った気がした。

あれっと思うより早く、目の前に人の影。俺は、それがゆうかだと直感した。

あぶない！

反射的に手で彼女を押しつけようとする。彼女をつかんだ俺の右手が発光した。その光が彼女の周りの光と融合する。手のひらが少し熱い。

あれ？前にも似たようなことがあったっけ？

頭の片隅に浮かんだ疑問はすぐ忘れる。

ゆうかの肩越しに、襲ってきた怪鳥が空中に固定されたように浮かんでいた。羽ばたきもしていない。

「おかえり」



ゆうかがそれだけを言った。

空気をふるわすような甲高い鳴き声。目の前で、煙が消えるように怪鳥が消えていった。

ゆうかがゆっくり振り返る。こんな時だというのに優しそうな笑顔。俺も落ち着く。

「裕人さん。今、あなたは……」

言いかけて、はっとした表情。

え？と思ったときには、ゆうかに突き飛ばされていた。

瞬間、目を開けられないほどのまぶしい光。

しりもちを付きながらゆうかの方をかるうじて見ると、光の中でゆうかが、透明な球体の中にいた。

「お姉さん！」

初めて聞く蒼井さんの悲鳴。

俺は、とつさにその声の方を振り返った。

彼女の剣が一閃していた。爪を見せて迫っていた怪鳥が両断され、消えていった。

ずっとまぶしかった光が弱まった。

俺が振り返ったとき、球体はもはや鈍く光るだけで、しかし、空中をずっと男の方に向けて遠ざかっていく。

俺は立ち上がって追おうとした。その時、猛烈な風が再び吹き付けた。

「ゆうか！」

彼女は心配そうに俺を見ている。傍らに蒼井さんがやってきた。

「あれは？」

「結界です。しかも信じられないほど強力な。ゆうかさんをこの世界のつながりから引き離してしまっぐらいに……」

蒼井さんの深刻な顔に、改めて不安が拡がる。

「どうしたらいい？」

彼女が苦しそうに首を振る。

そんな！だめなのか？そんなことあるか！

どうしたら、ゆづかを取り戻せる？どうしたら助けられる？

その時、勝ち誇ったような男の声が聞こえた。

「はっはっは。こちらにも手はあると忠告したはず。我々として総力を上げればこのようなこともできるのだ。姫よ、すでにあなたの守りもなく、従う者もただ一人。いかに武勇の娘とはいえ、あなたの想い人を守り通せますかな？」

男は、風の中で不自由に飛んでいた怪鳥を呼び寄せると、瞬く間に消し去り、再び両手を合わせた。

さっきと同じだ。

男の手から今度は一つの影が飛んだ。

## あらしの別れ - 4 -

これは、ライオン？

金色のたてがみを持ったその獣は、しかし、体長が3メートルはありそうな大きさで、長いしっぽの先が2つに分かれている。

明らかに今の世の生き物とは異なる姿。風の中で激しく揺れるたてがみからバチバチと火花が散った。

「あの男の行く末を、そこでじっくり見物なさるといい」

髭面の男はそういうと、獣に向かって手を振った。

異形の獅子がほえる。その声はまるで落雷の音のように聞こえた。いや、実際それは落雷だ。

獣のしっぽが振られるたびに、低く立ちこめた雲の間から、稲妻が落ちた。

それは、正確に俺をねらい、焼き殺そうとしている。

蒼井さんの剣が、まるで避雷針のように稲妻を吸い取ってくれていた。

そんな事して大丈夫なのか？

稲妻を防ぐたび、蒼井さんの顔に苦痛の表情が浮かぶ。

やっぱり、このままじゃだめなんだ。俺を守るために、彼女は獣に近づくこともできないでいる。

どうしたらいい？俺になにができる？

俺は、顔を上げてゆづかを見た。

彼女の顔には、さっきあった心配そうな表情は消えていた。かわりに俺を真剣に見つめる瞳。

ゆづかが俺に向かって叫んだ。

「裕人さん。信じて！」

その言葉が心の奥に突き刺さる。

ゆづか。俺はなにを信じたらいいい？蒼井さんの力か？俺自身のこ

とか？それとも……

そう、ゆうかは俺に信じろといった。忘れないでといった。俺自身を力をもつ。

でも、ゆうか。俺が、今信じるのは、おまえだ。ゆうか自身だ。そしておまえに関わる全てのことを……

よし、決めた。

たぶん一瞬でもあれば、蒼井さんには十分なはずだ。

「蒼井さん。俺、あいつの注意を逸らすから、その隙にやつつけてきよ」とした彼女の表情。それからあわてて首を振る。

何か言いかけたその口を人差し指で封じて、

「大丈夫。だと思っ。……俺は、ゆうかを信じる」

蒼井さんが少しだけ逡巡して、それからうなずいた。

「じゃあ、わたしの合図で」

短く指示をする。

うなずいて俺は、彼女と獣の両方をうかがう。落鳴が耳にいたいタイミングをうかがっていた彼女の手のひらが小さく振られた。

いま！

俺は全力でゆうかに向かって駆け出す。

あいつがこつちをねえれば隙ができるはずだ！

視野の片隅に、駆け出す蒼井さんの姿が映る。獣が俺の方に向いたようだ。

突然の咆吼。近づいてくる振動。

それが、空気を切り裂く稲妻だということに、一瞬で気づいた。次の瞬間、体が光に貫かれた。

## あらしの別れ - 5 -

カッと上がる体温と、焦げるにおい。

ああ、俺死ぬのか。

頭をよぎる。ただ、電撃のしびれは感じなかった。

俺は、どのくらいそうしていたのだろう？

顔を上げると、異形の獣が横たわり、蒼井さんが、深刻な顔で、こちらにかけてくる。

髭面の男は驚いたような、困惑した表情で固まり、最後にゆうかは、俺に微笑みかけていた。

駆け寄った蒼井さんが俺にふれようとして立ち止まる。

そういえば、俺の体はなんだか光に包まれているようだ。少し暖かい。

「裕人さん！大丈夫ですか？」

「あ、ああ」

俺にもよくわかんねえ。これは、どういうことだ？

「なにが起こった？」

男が気が付いたようにうなった。

「風伯。あなたはわたしの伴侶についてよく知らないようですね」  
ゆうかが静かにいう。

「敵対するならば、もっとよく調べることです」

「なっ！誰が、伝説の時代のことをよく知っているというのだ！たしかにあなたは、その一人だが……」

「稲妻は、王者の剣なのです。その剣で彼を貫くことなどできません」

男が始めて狼狽した。

「そのものは、まだ王者ではなかったはず。それ故、封印されたはずだ」

ゆうかが俺を見つめて静かにいう。

「いいえ、私たちはすでに伴侶になりました。彼は、王者のしるしをうけたのです」

毅然とした表情だったゆうかが、俺を見つめてやさしく微笑んだ。

胸が熱くなる。

ゆうかを取り戻したい。

俺は、妙な自信とともに男に向かって歩みだそうとした。

男がハッとして、いきなり手をかざした。風が舞い上がる。

男とゆうかのカプセルが歪んで見えた。

「ゆうかー！」

俺は叫んだ。蒼井さんが飛び出していく。追いつく前にふたりの姿が消えた。

俺には、最後のゆうかの表情が、いつも通りの優しい笑顔に見えた。

## あらしの別れ - 6 -

胸の中が、激しい焦燥感に詰まる。

嘘だろ。なんで、ゆうかが……

ねらいは俺だったんじゃないのか？

「蒼井さん！」

戻ってきた彼女に叫んだ。

「追いかけてよう。どうしたらいい。俺を連れていってくれ」

蒼井さんがうなずく。

「……でも、少し待ってください」

蒼井さんの冷静な声。でも、俺は、焦っていた。

「待つつて、どうして？ ゆうかがつれて行かれたんだ。早く、助けなきゃ……」

思わず、蒼井さんの両腕を押さえた。

「うつ！」

腕をつかんだ俺の右手が瞬間輝く。蒼井さんが眉間にしわを寄せた。

驚いて、俺は手を離れた。彼女が俺の右手を見つめる。俺も手のひらを見た。

例の鳴門形の痣が、白熱したように白く輝いている。だが、それほど熱くもなく、痛みも感じなかった。

こんなの初めてだ。

蒼井さんはそれを見て、

「ああ……」

と納得したようにいった。それから、

「裕人さん、聞いてください。少し時間をいただきたいのは、ゆうかさんが何処に連れていかれ、どのように守られているか調べるためです。それによって、私たちのやり方も決めなければいけません。」

「でも、ゆうかが……」

「お姉さんのことならば、とりあえず、心配はいりません。なぜなら、本当の意味で、ゆうかさんをどうにか出来るような者は、そうはいないのです。ただ、彼らは、ゆうかさんをあなたの守りからなんとしてでも引き離したかったのでしょう。でも、それも、おそらく、無駄なこと……」

彼女が俺の右手をちらつと見る。

俺は、彼女の話がよくわからなくなった。たぶん、それは俺が知らないことが多すぎるからなんだ。

なんで、俺はねらわれているんだろう。なんでゆうかは俺の前に現れたんだ？

俺は誰で、あいつは何で、ゆうかは誰なんだ？

「蒼井さん、教えてくれ。俺はいつたいどういう物語の中にいるんだ？ゆうかを取り戻すために相手にしなくちゃいけないのは、どんなやつなんだ？たのむ」

俺は頭を下げた。彼女の声が降ってくる。

「わかりました。わたしの知っている限りのことをお話します」

顔を上げて瞳と瞳が合った。彼女は軽く笑って、

「でもその前に、裕人さんの体の周りの“気”を静めてください」

え？それはどういう？

そういえば、俺の体は稲妻に打たれてから、薄く光に包まれているようだった。

“気”ってこれのことか？

「そう、そのまま発散し続けては、裕人さんが消耗してしまいます」でも、どうすりゃ？という疑問はすぐにわかったようだった。

「裕人さんの右手の紋章、そこが一番“気”が強いところですから、意識をそこに集中して、気を押さえようと念じてください」

この痣？これって、紋章なのか？

「そう、それは稲妻の紋章です。王者の紋章なのです」



俺は、改めて鳴門形の痣を見つめる。それはまだ白く輝いている。蒼井さんがいったように、意識を集中してみる。とりあえず、何かを押し返すように意識する。

痣の輝きが薄れてくる。ずっと、光は収まり、痣は今までは違う赤い色に染まっていた。

「じゃあ、行きましょう」

蒼井さんがその手を取った。

たちまち俺たちの周りに白い光が立ちこめる。

そういえば、前にもあったな。何回目だった？

と思ったときには、すでに光に覆い包まれていた。

## あらしの別れ - 6 - (後書き)

4章―あらしの別れ 了

次回から、

5章―遠い約束

ふたりの出逢った意味が、ようやく明らかに？

## 5章―遠い約束―1―

今度は、意識を失うことはなかった。

白い光のベールが晴れたとき、俺と蒼井さんは、俺の家にいた。今朝、ゆうかと過ごした食堂兼リビングルーム。そこに戻っていた。

蒼井さんが握っていた俺の手を離す。俺は、朝のことが遠い昔のような気がした。

「では、お話ししよう」

俺たちは手近なイスに腰を下ろした。

「裕人さんは、この世界の始まりのことをどう考えますか？」  
いきなり深遠な問い。

えーと、ビッグバンで宇宙が始まったんだっけか。

「そう、そういう言い方もできますね。でも、私たちはこのように聞いています」

太古の混沌の世界は厚い気で満たされていました。

その中で、まず、天と地が分かれた。

天には比較的軽い気が、地には重い気が集まったといわれています。

いずれにしても、このころの気は、創世の力に満ちていました。

やがて、気の中から、人が生まれ出ました。

天には3人の、地には2人の人。

今の人の基準からすれば、彼らは神と呼んでもいいのかもしれない。

天には男神が2人。女神が1人。地の神は、男女の神でした。

天では、気の中から、風が生まれ、雲が生まれ、雪が生まれ、虹が生まれ、太陽が生まれ、あまたの星が生まれました。

天神たちは、さらに、様々な生き物たちが生まれるのを手助けしました。

地上の生き物とは少し違いますが、天にも鳥や、獣や、木々があるのです。

そういったものたちは、時たま間違つて地上に姿を現し、伝説の生き物と呼ばれたりしています。

やがて、天神たちは、自分たちの仲間を生み出しました。

最初は、自分の体の一部と天の気を用いて。

たとえば、髪の毛であったり、涙であったり、爪であったり。

そのようにして天の人は増えていったのです。

しかしそのようにして生まれた人は、はじめの人ほど世界の気をよく扱えませんでした。

やがて、様々なものを生み出した天の気も薄くなり、もはや新しい仲間も生み出せないと思われたとき、新しいかたちで人は生まれました。

そう、一人の男神と女神の間に、その共同作業によって、三つ子の女の子が生まれたのです。

三つ子は、幼くして誰よりも世界の気をよく感じ扱うことが出来ました。

天の人々は、彼女らに世界の気を司らすことを決めたのです。

上の姉には昼の世界、二の姉には夜の世界、そして最後に末の妹には、地上の世界を。

その末妹こそ、ゆうかさん、夕風姫、またの名を、深淵宮代夕風姫御子（ふかふちのみやしらしめす ゆうなぎのひめみこ）と仰います。

## 遠い約束 - 2 -

俺は、ゆうかの名にびつくりした。

途中から、ただ神話の物語を聞いている気になっていたからだ。

じゃあ、ゆうかは、神様っていうことか？しかも、地上を支配する様なすごい神。

本当なのか？

だが、今まで自分の身に起きたこと、見たことを考えると蒼井さんの話を信じざるを得ない気がする。

「そう、神という言葉は今の人から見ればそうですが、ゆうかさんも、わたしも、人にはわかりありません。今の地上の人は、全て天の人の子孫なのです」

「その証拠に、時々、よく未来を知ることの出来る人や、ものを動かすことの出来る人が現れます。それは、古き能力の発露なのです」  
「それから、地上の支配といっても、それは、権力のようなものではありません。ただ、地上の気の秩序を守り、調整し、乱雑にならぬよう整えるものなのです」

そういうことなのか。では、ゆうかは地上を見守ってくれていたのか。

あれ？じゃあ、地上に生まれた2神はどうなったんだ？

「続きをお話ししましょう」

地上を司ると決められたゆうかお姉さんは、幼くして天から地上に降られました。

その頃、地上では、先に生まれられた男女2神によって、数多くの生き物が生まれていました。

地上には天より濃い大気があり、地上の生き物ははるかに種類も数も豊富でした。

そのかわり、地には2神の他に人はいませんでした。ただ一人の

息子を除いて。

その2神の子こそ、裕人さん、あなたです。

……え？

お、俺が？

地上の神の子？

いや、だって、しかし……

「正確には、あなたの遠い前世とでもいえいいでしょうか？いえ、それも正確ではないのですが……」

前世？前世でゆうかにあつていたと？

「そうです。地上に赴かれたゆうかさんは、あなたに会われました。お二人ともまだ幼かったはずです」

あなたは、ゆうかさんと同じように、地上の2神からお生まれになりました。そして、同じように地上の気をよく扱われていたはずですよ。

幼いふたりは、惹かれ合い、理解し合い、尊敬し合い、互いに互いを想うようになれました。

地上は天上とは異なり、いかに初めの人とはいえ、2神の寿命は万歳を越えることはありませんでしたので、お二人は老いてこられた2神にかわり、地上の気の中から、さらに多くのものが生まれる手助けをされました。

その中で、ゆうかさんは、決められたのです。

自分が地上の守り神になるよりも、あなたに地上をゆだねることを。そうして自分はあなたを助けていこうと。

そして、天上に願い出られました。

その願いは聞き届けられたと聞いています。

一旦は……。

それから後、何があったかは、詳しくわかりません。

その出来事より、はるか遅くに生まれた私たちには、たとえ天上

にいても、詳しく語られることはないのです。

ただ、地上には天上人がたくさん降られて、今の人の祖となったこと。

ゆうかさんが、天上の片隅で、ほとんど誰にも会わず、過ごされていること。

そして、裕人さん、あなたが、限らない人の転生の中に封じられたことが伝えられていました。

### 遠い約束 - 3 -

俺は……しばらく口がきけなかった。

それじゃあ、おれは……俺の前世は……地上の神なのか？初めの人の息子？

そこで、ゆうかに逢って、俺たちは想い合って、そして、何が起こったんだ？

ゆうかは天上にかえり、俺は封印された。つまり、ふたりは引き離されたのか。

なぜ？どうして？何があった？

蒼井さんはわからないというように首を振った。それから彼女は遠くを見るようにいう。

「ただ、ゆうかさんには、わかっていたのです。いつか、必ず、あなたが帰ってくると。封印のくびきから解き放たれると。それを、長い年月、そう、気の遠くなるような年月、ずっと待っておられたのです」

俺は、愕然とした。

ゆうかが待っていたという年月はいつたいどのくらいなのだろう？千年、万年のオーダーじゃないだろう。

この世の始まり近くから、今まで、待ち続けていたというのか？こんな俺が生まれてくるのを。

いつまで待てばいいのかわからない不安の中で。たった一人、全てを心にしまつて。

俺は、自分が泣いているのがわかった。蒼井さんが俺を見ている。でも、かまうもんか。

胸の奥の熱いものがせり上がってきて、俺は、我慢できずおえつを漏らした。

また、右手の痣、紋章だったつけ？が、白く光り出している。



「裕人さん。あなたが戻ってきてくれて、本当によかった。本当に……」

蒼井さんも涙声で言った。

わたしは、そんなに昔に生まれたわけではないけれど、ゆうかさんが想い人をずっと待っていたことは知っていました。

たまたま、ゆうかさんの庵近くで生まれたわたしは、小さい頃からゆうかさんに可愛がってもらいました。

長じるにつれて、どうしてあんなに美しい人が、ひっそりと暮らしているのか疑問に思ったのですけれど、

「どうして、こんな所にいらっしゃるのですか？」

というわたしの幼い言葉に、

「人を待っているのよ」

とだけ答えられました。

やがて、古き時代の伝説を耳にしました。そして、ゆうかさんがその中の一人であることも。

わたしは、ゆうかさんが、その想い人をずっとずっと待ち続けていることを知りました。

だから、わたしは、ゆうかさんの願いが叶うように、助けたいと思ったのです。たとえ、天上を敵に回すことになっても。

あなたが、どうして解き放たれたのか、わたしにはわかりませんが、永遠に解けない封印などないのです。

そして、封印が解けたことを最初に気づかれたのは、ゆうかさんでした。

ゆうかさんは密かにあなたを捜されました。地上の数多くの人の中に。

おそらく、ゆうかさん以外にあなたを見つけたのは不可能だったでしょう。

そして、ゆうかさんは、再びあなたに会われました。

お姉さんが、

「見つけました」

と、とてもうれしそうに、私たちに言われたとき、わたしは、ゆうかさんとともに地上に行くことを望みました。

そして……私たちの動きはきつと見張られていたのでしょうか。こんなに早く天上人があなたを狙ってくるなんて。

「ですから、私たちの相手は、天上人なのです」

天上人。

それって、神って言うことか？

俺が、ゆうかを救い出さなければならぬ相手。はるか昔に俺とゆうかを引き裂いた相手。

俺に立ち向かえるのか？今の俺に出来るのか？

恐怖は感じていない。不安が大きかった。

相手が大きすぎて、自分は小さすぎるように感じる。

それでも、ゆうかを取り戻したい。もう一度ゆうかを待たせるわけにはいかない。

俺は、蒼井さんにもう一度訊いた。

「どうしたら俺は、天上人と戦えるだろうか？」

蒼井さんはちよつと首を傾けて、

「裕人さん。あなたはもう気を扱うことが出来るはずです。しかも、ゆうかさんに劣らないぐらいに。まだ、慣れないところはあると思いますが、意識して扱ってみてください」

俺は、困った顔をしていたのだろうか？

「裕人さん。もう一度お姉さんの言葉を伝えます。 “信じて”」

そう、そうだった。俺は、ゆうかを信じたんだ。ゆうかは俺を信じていた。

ならば、信じよう。俺には、ゆうかを取り戻すことが出来ると。

俺の姿を見つめていた蒼井さんが、安堵したように息を吐いた。

そして、

「少し休んでください。わたしが見ていますから」

そういえば、いつの間にか夜になっている。たしかに、全身に疲労感があった。

これが、彼女が言った消耗だろうか？

俺は、彼女にちよつと目配せすると、

「ごめん。じゃあ」

といって、次の間にあるソファに転がった。

リビングのイスの上から彼女が俺を確認し、ちよつと上を仰ぎ見たのがわかった。

俺は、そのまま魔法のように寝入ってしまった。

## 遠い約束 - 4 -

ピンクに輝く髪飾りと、胸元にはきらきら輝くブローチ。

清楚な中にも華やかな意匠のワンピースをまとったゆうかが、俺の前で眠っていた。いや、眠らされているのか。

俺たちを取り囲むように、いく人も天上人が武装して立っている。

俺は、この光景を夢の中で見ていると、はつきり意識していた。

これは、遠い記憶のはずだ。

彼らはどうしてここにいるのか？

俺は知っていた。俺とゆうかの祝いのために、わざわざ天上からやってきてくれたはずだった。

今日が祝いの日だった。だが、彼らは突然俺たちを取り囲んだ。皆に会えて喜んで、はしゃいでいたゆうかが、意識を失って倒れた。それは、明らかに異変。

囲みの中から、美しい2人の女性が進み出してくる。

ゆうかによく似た、しかし、冷たい感じのする美女たち。それは、ゆうかのふたりの姉だ。

一人は日輪の意匠の冠をかぶり、もう一人は月の形の大きな首飾りをつけている。

彼女たちが俺に要求する。

そなたが、我が妹と一緒にすることは認められない。

地上の司は、あらためて、我らの子孫がつとめる。

このことを認めれば、そなたを天上に迎えよう。

ただし、我が妹と会わせるわけにはいかない。

俺たちは、だまされていたのか？

ゆうかは、天上人も俺たちを祝ってくれていると思いこんでいた。

しかし、これは……

もし、ここで戦えば、どうなる？

取り囲むあまたの天上人と戦うことは、出来ぬ事ではないだろう。だが、ゆうかはどうなる？

彼女をかばい、そしておそらくどこかに封印された彼女を呼び戻すことが出来るのか？

もし、要求に従えば……ゆうかは助かるのか？それでもなお、排除されるのではないか？

俺も、たとえ天上に座を占めても、厳しい制約を受け、ゆうかを失うことになる。

それでは、この先いかに世界が続くとも、俺にとっては無意味。では、どうすれば……

俺の心を見透かすように、日輪の美女が口を開く。

「拒否すれば、そなたも、我が妹にも明日はありません」

俺は、しばらく考えてから答える。

「地上のことは、好きに差配すればいい。だが、そなたらの要求をきく前に、俺にも条件がある」

「条件など……」

周りでつぶやきが漏れる。

「まず、一つは、夕凧の無事を約束すること。そして天上にその座を用意することだ。二つ目は……俺に天上の座などいらん。それよりも、地上に永遠にとどまるのが望み。そのために……人の生々流転の中に俺を結びつけること。もし、この両方が飲めないのなら」

俺はちらつとゆうかを見る。

「たとえ、この世を再び混沌に返そうとも、俺は、力の限り戦うまでだ」

周りがざわめく。ふたりの美女の顔に険しい影が差す。

「我が妹のことは、言われるまでもない。だが、そなたの望みの後半は……我らには、出来かねる」

「いや、出来ないはずがない。生と死の世界を司るお二人が力を合  
わせれば、いと容易いこと。それとも、ここで、天と地を貫く争い  
を始めるか？それも、潔い」

俺は、内なる気と外なる気をまとい、全身に光があふれ出した。  
周りの者が後ずさる。

日輪の美女は月の姫となにやら話していたようだが、俺に向かっ  
て口を開いた。

「やめなさい。そなたの条件、かなえましょう。我らの力を持って  
して」

「では、誓え。天地の“気”にたいして」  
そうして、彼女らは誓った。

俺は、眠っているゆうかの手を取って、彼女に届くと信じて心に  
念じた。

「俺は、地上で生きていく。ふたりが出会い、ともに創世に手を貸  
した地で。いつの日か、再び出会うことがあるだろう。そのための  
選択を俺はした。俺は、その時を信じる」

## 遠い約束 - 4 - (後書き)

5章―遠い約束 了

次回から

6章―姫御子の望み

物語はいよいよクライマックスです。

裕人くんはゆうかさんを救い出せるのか？

天と地の行くへは？

お楽しみに

## 6章―姫御子の望み - 1 -

目覚めた俺の中で、夢の記憶は鮮明に残っている。  
そうだった。

人の転生に封じられるのを望んだのは、俺自身だった。  
いつの日にかその封印が解け、ゆうかと再び出会うことを願った  
のは、俺だったんだ。

そして、俺たちは再会した。

「ゆうか……」

小さくつぶやく。

「あゝ起きた、起きた」

近くで、場違いに明るい男の声が聞こえた。

あれ？

俺はあわてて上半身を起こす。

そこに、男の子がいた。背の高さは、俺と同じぐらいだろう。でも、顔が幼い。せいぜい中学一年生といった感じ。しかも、明らかに戦闘服とわかる銀色の鎧をまとっている。そのアンバランスさに、俺は、一瞬疑問を忘れた。

「よく休まりましたか？」

男の子の後ろから蒼井さんがのぞき込む。その姿に、もう一度驚いた。

彼女も、しなやかな銀色の戦闘服を身につけていた。一体型のスーツのような格好、腰のベルトに例の長剣が挟まれている。

俺がきくより先に、蒼井さんが口を開いた。

「この子は、紗那しなといいます。わたしの弟です」

男の子は無邪気な顔で俺を見ている。

「ゆうかさんの行方と、情勢を探ってきてくれたのです」  
そ、そうなのか？ありがとう。



でも、こんな幼くて、大丈夫だったのか？

「裕人さん、私たちをあまり見た目で判断しては、だめですよ。それに、この子はこういうことには特別な力を持っています」

男の子が、ちよつと照れたような仕草を笑いで隠した。

「そうなんだ。あ、それで…… ゆうかは何処につれていかれたんだ？ 無事なのか？」

「はい。ご無事です。ただ、結界に閉じこめられています。場所は、ゆうかさんの天上の住まい」

そこで、男の子が口を開いた。

「今、守りは少ないな。風伯、雷侯のふたりが手勢を率いて屋敷を固めてる。でも、てんでなつてないよ」

「紗那！ 軽々しくいわないの」

少年はちよつと肩をすくめた。

「でも、他の連中、こつちに向かおうと準備してるよ。ねらいは、お兄さんだからね」

「ええ、それはわかつてるわ。だからこそ、今なのよね」

蒼井さんがうなずくと、俺に説明した。

「天上の一軍がこちらに向かおうとしています。だから、ゆうかさんの守りは手薄。向こうは、こちらが動くとは思っていないでしょう」

少年がうなずく。

「これから、急襲します」

蒼井さんが宣言する。

「わかった」

俺は、蒼井さんの瞳を見つめながら答える。自分でも驚くほど冷静な声だった。

「ゆうかさんを取り戻し、お二人が力を合わせられるようにすることが、事の勝敗を決するでしょう。それを、覚えていてください」

俺は、うなずいて、立ち上がった。

「これを……」

といって蒼井さんに渡されたのは、銀色に輝く上下の服だった。それは信じられないほど軽く、薄く見えた。

「これは、よく気を保ち、物理的衝撃に耐える事が出来ます」

「それから、これ」

といって少年がさしだしてきた。それは、一本の剣。蒼井さんのよりも幅広で、少し長い。

「あ、でも、俺、使えないかもしれない」

正直にそういうと、少年が手を振った。

「大丈夫だって。お兄さんになら扱えるはずだよ。それに、これは、お兄さんの気を引き出す依代よりしろだから。まだ気の扱いになれないって聞いたからさ」

少し意味が分からなかったが、受け取る。手にもったとたんに、鞘の中で輝きが走った。

「ほらね」

少年が姉に同意を求めるようにいった。

「じゃあ、お兄さん、着替えて身につけてきてくれよ。それから、出発だ。天馬を2頭引いてきたからさ。それに乗っていくよ」

少年が楽しそうにいうのを聞いて、俺は思わず蒼井さんを見た。彼女が困ったように肩をすくめた。

## 姫御子の望み - 2 -

天上の世界というものがどういうものか、俺にはよくわからない。俺たちは、紗那がつれてきた天馬、これってペガサスだよな？に跨って、出発した。

俺は、当然馬に乗った事なんてなかったので、蒼井さんの前に一緒にのせてもらった。

天馬は、ぐんぐん上昇していき、あっという間に地上の景色は遠ざかった。

いつの間にか白い霧に取り囲まれている。紗那が俺と蒼井さんの少し前を進んでいる。

天馬って、飛んでるときも空を駆けてるんだ。とかいうよいいな感想が浮かぶ。

それよりも、俺の後ろで手綱を取る蒼井さんの体が、背中に密着して、ちよっと落ち着かない。ボディースーツを通して、はっきりと体の膨らみを感じる。

「あのー蒼井さん。なんで、きみの服、ボディースーツなの？」

「おかしいですか？」

彼女が手綱を動かしながら答える。

「いや、そういう訳じゃないけど……紗那のは、なんか昔の鎧風だし、俺のは普通の洋服だからさ」

蒼井さんは、ちよっとおもしろそうに笑って、

「紗那はあれがお気に入りなんです。わたしのは、今の地上の戦闘服風にしてみたんですけど……」

うーん、ちよっとなんか違う気がするが……。

俺は振り返って、なにげにスーツで強調されている蒼井さんの胸を見ていた。彼女が何か気付いたようにいたずらっぽく笑う。

「裕人さん。今変なこと考えてませんか？だめですよ。お姉さんに言いつけますから」

「え、いや、違っつて……」  
ちよつと焦つて、前を向いた。

前に行く紗那が合図する。もうすぐのようだ。  
霧から抜けた。

眼下、はるか遠くに、地上、いや天上か？が見える。全体的に薄い色彩の世界だ。

よく見ると、所々に林が見える。ただ、その葉は緑一色というところはなく、赤やらピンクやら青やら、なんだか作り物めいている。建物は、あまり見えない。数軒の家がある。みんな、古い日本の家屋みたいな感じだ。

そのうち一軒が白っぽいがけの縁にある。紗那がその家を指さした。

「正面、崖の反対側に結構、兵がいる。でも、崖側は手薄だな。姉さんたちは、裏から突っ込んで。俺はこれで、ちよつと脅かしてくる」

彼の手に数個の丸い玉が握られている。

出発する前に一応手順を決めた。彼がその玉（まあ爆弾だ）で正面を攪乱している隙にゆうかの元に駆けつける。

俺は、とりあえず集中して気を保ち、後は剣に任せる。ここまで来たらやるだけだ。

「じゃあ」

とだけ軽くいって、紗那の天馬が駆け出す。すごい勢いで降下していく。

一瞬後、ものすごい爆裂が建物の前庭でおこった。  
うっわー、こんなに威力があつたんだ。

家の中や、周りから数十人の兵が出てくるのが見える。  
続いて2発の爆発が連続して上がった。兵が吹っ飛ぶ。混乱している。まだ応戦は来ない。

「いきます」

蒼井さんがいった。俺がうなずくと同時に天馬が急降下する。まるで墜落してるんじゃないかと思うぐらいだ。

建物がぐんぐん迫ってくる。屋根瓦の一枚一枚が目映る。

うわっ、ぶつかると思ったとき、天馬はふわりと地に降りた。

そこは建物の裏庭。庭の向こうに建物の外廊下が見える。

そこに、天兵が残っていた。ぱつと見4人。

蒼井さんが飛び降りる。その時にはすでに剣を手にしていた。

俺も天馬から降りて、紗那に渡された剣に手をかけた。

抜き放つ。俺の手から出た光が刀身を被った。

俺に、剣技とか見切りなんて出来るわけがない。とにかく、落ちて置いてこいつをふる。後は、剣に聞いてくれ。

ちらつと蒼井さんの方を見ると、すでに一人の兵がうずくまっていた。彼女は次の一人に向かい合っている。

俺は、そちらに行く必要がないことを理解し、目の前の男に向かった。

手に長い棒のようなものを持っている。そいつでたたき伏せようというのか？

男が近づいてくる。

俺は、走った。男に向かって。

間合いなんてしらん。

男が棒を振り下ろすのが見えた。かまわず手元の剣を水平に一閃する。光に包まれた刀身が、いきなり何倍にも大きくなったように見えた。

目の前の男が吹っ飛ぶ。いや、その後ろにいたもう一人の兵も同時に吹っ飛んだ。

俺は、ちよつと啞然。ほとんど手応えもなかった。

「わあ、やりますね」

蒼井さんの声。彼女もふたりを倒して俺のそばに来たようだ。

俺たちは、そのまま廊下に上がって、戸を開け放つ。

部屋の中に一人の男が立っていた。

### 姫御子の望み - 3 -

「風伯！」

見慣れた髭面が、すつと目を細め、腰から剣を引き抜いた。

「おまえとは縁があるという事かな？」

男の剣が陽炎のように揺らいで見える。いや、あれは空気の揺らぎか？

蒼井さんが小声で俺にいう。

「次の間、たぶん、ゆうかさんが……」

俺はうなずいた。

蒼井さんがいきなり跳躍する。天上近くを顔は男に向けたまま、緩やかに一回転したように見えた。

男が剣をしたから振り上げようとする。

俺は、前に出た。

俺ののばした剣が、男の剣を遮る。剣は、反発し合うように弾けた。

男がそのままの勢いで剣を薙ぐ。刀身から小さな渦。避けようとしたときには、体に取り込まれている。

強烈な風圧。それが渦を巻いて俺に襲いかかる。体がねじ切られそうだ。

気を静め手のひらに集中する。強烈な風圧の中で、どうにか動かせる。

一瞬の気合いで剣を縦に振った。

竜巻が飛び散った。

剣が光で2倍の幅に見える。

男の顔に、ちよつと驚きの表情が浮かぶ。

この間、ほんの一瞬だったのか？

男の後ろに着地した蒼井さんが次の間を開け放った。

そこに……ゆうかがいた。

鈍く光る球体状の結界。その中で、ぐったりと肩を落として座っている。高校の制服がひどく場違いだ。

「ゆうかー!」

俺は叫んだ。彼女がハツとして顔を上げる。いつもより白い生氣のない顔。だが、やさしく微笑んだ。

「今、助ける。すぐ助けるから」

蒼井さんが球体に歩み寄るのが見えた。

俺も行こうと駆け出す。だが、男が立ちはだかった。

「通すわけにはいかな」

男の斬撃。また、渦が飛び出す。

今度は逃げずに初めから剣をふった。渦が両断される。

ちっ!男が舌打ちする。

続けて剣がふられる。今度は普通の攻撃。俺には、こっちの方が  
厳しい。

次第に受け止められなくなる。こちらから剣をふる余裕がない。  
くそー、どうにか……

その時、目の前を何かが横切った。

瞬間、まばゆい閃光。

俺は、誰かに腕を捕まれ、跳び下がった。

爆風が戸を吹き飛ばす。天井からがれきが落ちる。

俺が顔を上げると、髭の男が部屋の反対側で膝をついている。苦  
しそうな表情。

俺の横手には、紗那が同じようにうつぶせに伏せていた。

「なんてことするの!紗那!裕人さんは?」

蒼井さんの叫び。俺はハツとしてそちらを見る。

蒼井さんはカプセルのそばで伏せている。ゆうかの結界は傷一つ  
付いてなかった。

「あ、俺は大丈夫。……ありがとう。助かった」



紗那が照れたように笑う。

「お兄さん。あいつは任せて。ゆうか姉さんの所に」

紗那が向こうで立ち上がった髭の男を見て、にやりとした。

俺は、ちょっと逡巡。その間に紗那がすかさず男にダッシュして  
いた。

キーンと金属がふれあう音。紗那の背中が男を押している。

俺は、ゆうかの所に向かった。

## 姫御子の望み - 4 -

結界の中で、ゆうかが苦しげに横たわっている。

「蒼井さん、ゆうかはどうなってるんだ？」

「世界の”気”から切り離されているんです。もしかしたら、逆に気を吸い取られているのかも」

「この結界、どうしたら破れる？」

彼女が俺の瞳を見つめる。真剣な表情だ。

「裕人さん。今ここでこれを破れるのは、たぶんあなただけです。その剣で、切り裂いてください」

「中にゆうかが……」

「中は、大丈夫です。それより、切り裂けるかどうか、裕人さんにかかっています」

俺は、あらためて鈍く光る球体を見た。直径2メートルぐらい。部屋の真ん中に鎮座している。

これを、剣で切る？

よし、やってやる。

構えた剣は光で大きくなったように見える。

とりあえず、ゆうかに危害を与えないように水平に斬りつけた。堅い何かに当たったように、結界の壁で剣がはじかれた。

「もっと強く」

蒼井さんがいう。

俺は、力を込めて剣を振った。だが、ビクともしない。  
「もっと、もっと強く！」

蒼井さんが叫ぶ。

俺は渾身の力を込めて剣をふる。わずかな手応え。しかし、傷が付いたぐらいか。

横たわっているゆうかが軽く目を開けて、弱々しく首を振る。

どういうことだ、ゆうか？もういいってか？いいはずないじゃん。俺は、ゆうかと一緒に帰るぞ。おまえを連れてかえるんだ。くっそー、こんな結界、切り裂くぞ。

刀身からまばゆい光がほとばしる。

俺はもう一度、渾身の力を込めて剣を払った。

剣のぶつかった先から無数の切れ目が走り、結界が一気に飛び散った。

まるでガラスが破裂して飛び散るようにきらきら光って飛び散ったかと思うと、一瞬で消えてなくなった。

俺は、肩で息をしていた。少し疲れたかも。

蒼井さんがゆうかのそばに行く。俺も駆け寄る。

「お姉さん」

「ゆうか」

ゆうかが俺たちを見て微笑んだ。

両手を俺に向けて差し出してくる。その手を取って、ゆうかの上半身を起こす。

俺の腕がゆうかの肩に回り、ゆうかの両腕が俺の首を巻いた。びっくりするほど冷たい肌。ゆうかの顔には、ほとんど血の気がない。

「こんなに消耗されているなんて……」

蒼井さんがゆうかの背をさすっている。

「だい、だいじょうぶ。…少し…多く…気を取られただけ。」

ささやくように話すゆうか。

ほんとに大丈夫なのか？今にも死にそうだ。

どうにか出来ないのか？

……気、気が足りないんだよな。じゃあ、もしかしたら…

「ゆうか」

「はい」

「俺の気でもいいか？」

ゆうかが俺を見上げる。

「あ、あの…でも…今は、裕人さんにも…必要……」

「わかってる。だけど、このままじゃ、ゆうか、歩くこともできないだろ。だから……」

「……わ、わかりました」

俺は、右手の平をゆうかの胸に当てた。手のひらが一番自分の気を制御しやすい。

俺は念じた。俺の持っているものをゆうかに送り届けるように。

最初、俺の手から出た光はゆうかを取り囲み、全身で光っていたが、次第に薄くなり、すっと消えた。

ゆうかの顔に生気が戻っていた。

眼を開けたゆうかが、ほっと息を吐き、うれしそうに笑った。

## 姫御子の望み - 5 -

「姉さん、新手！」

紗那が飛び込んでくる。

見ると、その先で、髭の男は膝を折り、剣がおれている。

「すぐ、新手がくるよ。しかも結構たくさん。逃げるなら今だけど……」

紗那がどうする？という感じできく。

俺は立ち上がろうとした。それを遮るように腕を伸ばしたゆうかがいう。

「紗那。ありがとう。あなたまで巻き込んだのね」

紗那はあわてて、べつにーとつぶやく。

「ここで、逃げてもいいのだけど……待っていようかと思います。

誰が来たのかわかりましたので……」

ゆうかがみんなを見渡して、静かな声でいう。

俺は、彼女の決意を感じてただうなずいた。

俺たちは、正面側の廊下へ移動した。ゆうかは蒼井さんに肩を借りている。まだ、少しつらそうだ。

正面の庭は、爆発の跡が生々しい。木々が根本から折れ曲がり、大きな窪みもできている。

人は、誰かが連れていったのか一人も倒れていなかった。

いやー、こりゃ、ハデだな。

俺はあらためて、蒼井さんを見ると、彼女は肩をすくめた。

うーん、彼女の弟はそうとうすごいや。戦いなれてる。

ゆうかと彼女を支える蒼井さんは、廊下に腰を下ろし、俺と紗那は、庭に降りて左右に位置した。

がれきとなった塀の向こうから武装した集団が近づいてくるのが見えた。

100人ぐらいいるだろうか？

馬上の者も10人程度いる。その後ろになんだか大きな乗り物が見える。

「来たね」

紗那が何の緊張感もなくいう。

兵が近づいてきた。

馬上の者は、きらびやかな甲冑を身につけている。手に手に剣や矛を持っている。弓矢を背負っている者も多い。肅々と近づいてくる姿にさすがに威圧感がある。

前庭にはいるところで兵が停止した。兵の囲みを割って、天馬の曳く馬車が前に出た。

扉が開かれる。そこから、一人の女性が現れた。

見た目は十分成熟した20代後半から30代ぐらいの美女。胸に日輪の首飾りが輝いている。

知っている。

この女性を俺は知っている。

ゆづかの姉、昼の司、日輪の女王だ。

険しい表情をたたえている。彼女の声が響く。

「夕風。なにゆえそなたは、天を乱そうとする？ 全てははるか昔に決まったこと。今更後戻りなど出来ぬのだ」

「上の姉さま。わたしは、これまで一度も天を乱そうとしたことはありません」

さつきまでよろめいていたゆづかの驚くほど厳しい声。

「そればかりか、一度もあの時のことを申し上げたこともありませんわ。でも、今は、今こそは、申し上げましょう」

「世界の始まりの頃、わたしは地上の司を仰せつかった。でも地上に赴いたわたしは、そこで、彼に出会ったのです。地の二神から生まれた彼は、わたしより遙かに優れて、地の気を司ることが出来ました。ですから、地上の司は彼が行い、わたしが伴侶として支える

事に、お姉さま方も、天上の方々も同意なされた。その盟約を勝手に破棄されたのはどなたでしたか？」

天上の兵たちが少しざわつく。

「天の命は、変わったのだ。そして、地上の司はもはや必要ない」「そう、変えられたのはお姉さま方ですわ。でもわたしには、天の命でも変えられぬものがあります。それは、わたしが彼の人の伴侶であること。そして、そこにいる裕人さんがわたしの夫だということですよ」

兵の動揺が大きくなったようだった。日輪の姫が声を上げる。

「そのようなことは、許されまい」

それから俺をキットにらんだ。

「あの折りに消していればこのようなこともなかったのに。もはや、これまで」

日輪の姫がすつと下がって右手を挙げた。

## 姫御子の望み - 6 -

日輪の姫の合図に、兵たちは我にかえったように隊伍を整え、前面の兵の弓矢が引き絞られた。

俺は、剣を引き抜き、紗那は、さつとあの玉を出した。

先に飛び込もうと思って動いた瞬間、目の前の兵がいきなり膝をついて弓を取り落とした。

続いてその後ろの兵も崩れ落ちる。

見る見るうちに兵が倒れ、残っているのは数名の騎馬武者と、日輪の姫だけになった。

彼らも苦痛の表情を浮かべている。

俺は、何が起こったのか、とっさにはわからなかった。

ハッと気付いて振り返った。

そこに、ゆうかがいた。

蒼井さんに支えられながら、両腕を高く上げている。

彼女の全身が、今まで見たこともないほど光り輝いている。

まぶしくてまともに見れないくらいだ。

じゃあ、これはゆうかがやっているのか？

たった一人でこの兵たちを押さえ込んでいるのか？

同じ天上人のはずなのに、これだけの者を押さえることが出来るというのか？

だが、ゆうかの顔に憔悴の表情が浮かぶのを俺は見た。

さっきまで、歩くこともできなかったくらい疲労していたんだ。

このままじゃまずい。ゆうかがまた倒れてしまう。

俺は、ゆうかのもとに駆け寄ろうとした。

その時、一瞬ゆうかが腰を落とした。蒼井さんが支える。

ゆうかの力が一瞬揺らぐ。

日輪の女王が手に持った杖を一閃した。



距離はあった。間に俺もいたはずだ、  
だが、見えない何かがゆうかにぶつかったようだった。  
ゆうかと蒼井さんが一緒に後ろの壁まで吹っ飛ばされた。

「なっ！」

俺は、ふたりの所に駆けつける。  
その間にも、ゆうかの体がずるずると壁づたいに崩れ落ちるのが  
スローモーションのように見える。

俺の脳裏で、兵に囲まれて眠らされていたゆうかの姿がフラッシュ  
バックのように蘇る。

頭の中が真っ白になった。

意識がどこかに飛ぶ。

自分が咆吼しているのがぼんやりわかった。

俺は、剣を真上に上げて、叫んでいた。

俺の全身から何かが流れ出る感じ。冷静ならやばいと感じたかも  
しない。

突き出した剣を通してそれらはまっすぐあふれ出た。

刀身が幅1メートルぐらいの光に包まれ、その先が何処までも何  
処までも伸びた。天井に穴があき、空のかなたで雲を貫いて霧散さ  
せる。

何処まで先が伸びたのか見えなくなったそれを、俺は、地上に振  
り抜いた。

天井が崩れ落ちる。落ちてきたがれきは光の中で蒸発していく。  
光る剣先がはるか彼方の木々をなぎ倒し、地にめり込んで、しゅ  
うしゅうという音を立てて地が裂けていく。

ほとんど何も抵抗を感じない。

俺は、もう一度引き抜いて、今度は日輪の女王めがけて剣を振  
った。

彼女の口元が堅く引き結ばれる。手に持つ杖をかかげ俺の光を受

け止めようとする。杖が赤く発光する。

俺の振るった剣が初めて抵抗をうけて止まる。

俺は渾身の力を込めて上から振り下ろそうとする。

杖との接点がまぶしく発光している。

じりじりと女王が押されて膝をついていく。苦悩の表情が浮かぶ。

もう少し、もうちょっとで倒せる。

俺は、どこか人ごとのようにそう考えていた。

日輪の女王はもはや倒れんばかりの姿勢で、赤い杖の光も見erkるかに弱くなってきた。

あともう少しで……。

## 姫御子の望み - 7 -

その時、俺の耳元で優しい声が聞こえた。

「待って、裕人さん。わたしは、ここにいます」

その声が俺の胸の中に落ちた。

俺はハッとして剣を止める。

長く伸びていた光が急速に縮んで、日輪の女王の杖から光が離れた。

俺の体に、白い腕が回されている。ゆうかが背中から俺に抱きついていていた。

その白い顔。

気が付いて俺はゆうかを支えるために剣を持つ腕を彼女の背に回した。

周りは、がれきの山になっていた。建物はハデに崩れ、地面に裂け目がのぞいている。

天上の兵たちは大半が倒れ伏し、数名の者が女王を囲んで立っているだけだった。

蒼井さんが、紗那の肩を借りておれたちの隣に来た。

ゆうかが俺の腕に体を預けながらいう。

「もうやめましょう、お姉さま。このまま続ければ、世界は混沌に帰るでしょう。裕人さんの剣は王者の剣。山を砕き、海を割り、星を貫くでしょう。……けれど、私たちに何の野心もありませんわ。わたしの望みは、ただ、この人と生き、この人と死ぬことです」

初めて聞くゆうかの決意。

俺の心に、その言葉が染み込んでいく。

日輪の女王が苦しそうに立ち上がり、俺たちをにらみつける。もう一度やるつもりか？

剣を構えようとしたとき、彼女が口を開いた。

「その言葉、覚えておく。もし違えれば、その時は容赦はすまい。だが、わたしも、一つ約束しよう。そなたたちが今の天地に暮らす限り、我ら天上人はもはや、無用の手出しはせぬ。古き盟約を果たそう」

ゆづかはうなずいた。

これで、片が付いたのだと俺にもわかった。

俺は、ゆづかを支えていたが、自分も全身疲労感に襲われていた。これ以上いるとゆづかともども倒れそうだ。ゆづかの顔色もすごく悪い。

傍らの蒼井さんを見た。もう紗那から離れてすっかり自分で立っている。

「蒼井さん、実は…そろそろ限界」

俺は小さい声で言った。ゆづかは安堵したのか目を閉じて、俺の腕の中でぐったりしている。

紗那が口笛を吹いた。

2頭の天馬がどこからともなく駆けてくる。

日輪の女王が見守る前で、俺たちは天馬に跨り、飛び立った。

ゆづかを蒼井さんに預け、俺は今度は紗那の前にのせてもらった。すごい疲労感。でも、何とか地上までは保ちそうだ。

そうだ、一つ聞いておこう。

「紗那。君たちは、これからどうするつもり？地上にいるかい？それとも天上に帰る？」

「うーん、俺はどっちでもいいな。昔少しだけ地上で過ごしたこともあるし……。うん。あのころはおもしろかった」

「へー、そうなんだ。きみのことだから、合戦とかしたのかい？」

「まあね」

「姉さんはどうすると思う？」

「うーん、たぶん、しばらく地上にいると思うな。姉さん地上は初めてだし、ゆうかさんとはばく一緒にいたそうだからね」

俺はちらつと後ろを振り返った。ゆうかと蒼井さんが一緒に天馬に乗ってついてきている。

「そうだな、その方が俺も心強いかな」

紗那がちよつと大人びた表情で笑って、

「俺の姉さんに手を出してもいいけど、ゆうか姉さん怒らしちゃだめだよ」

「なっ、手を出すって、おまえ」

「だって、昔は何人も奥方がいたんだぜ」  
いつの時代の話だ。

「でも、ゆうか姉さん怒らしちゃ絶対だめだな。見たらさうさっきの、あれでほとんど気絶するほど疲れてるときだったんだぜ。普通の時だったら、冗談でなく山一つぐらい吹っ飛ぶから……」

いや、冗談であってほしい。それは…。

ちよつとめまいがした。気が遠くなる。

紗那が揺れる俺の体を支えてくれる。

ありがとう紗那。ちよつと眠るわ。

俺は天馬に揺られていることも忘れ、眠りの中に落ちていった。

姫御子の望み - 7 - (後書き)

第6章―姫御子の望み 了

次回から最終章

おはようはベッドの中で

もうすぐ完結です。  
よろしく。

## 終章―おはようはベッドの中で・1・

よっぽど疲れていたのか、夢も見なかった。

目覚めたらまだ夜。部屋の中に月の光が差し込んできている。

ベッドで身じろぎしたら、体が触れた。

振り返ったところにゆうかの寝顔。

わお！

こんな近くで、ドアップのゆうかの顔を見るのは、初めて出会ったとき以来か。寝顔がすごくかわいい。

はっと気がついて、布団の中の自分の格好を確かめてみる。

よかった。服着てる。

でも、あの銀色の戦闘服じゃなく、普段着のＴシャツにトレパンってのはどういうことだろう？

自分で着替えたのか？ひょっとして誰かに着替えさせられたのか？すごく気になる。

ゆうかは、制服姿だ。上着は脱いでいるから、ブラウス姿だけど、胸が目立つ。

思わず見つめてしまう。

「裕人さん？」

うわあ！

突然話しかけられて、心臓が止まりそうになった。

ゆうかが目を開けて、俺を見ていた。

「あ、あの、お、おはよう。……ていうか、まだ夜だけど……」  
何を言ってるんだ、俺は。

「裕人さん」

「はい？」

「裕人さん」

ゆうかがもう一度俺を呼ぶ。

「はい」

こたえる俺。

そして、もう一度。

「裕人さん」

「はい」

いいながら、俺は目の前のゆうかを抱きしめた。ゆうかの瞳から涙があふれそうだったから。

今度は俺が呼ぶ。

「ゆうか」

「はい」

「ゆうか」

「…はい」

「ゆうか」

「……はい」

ゆうかの声が涙でくぐもる。

俺たちはしばらくそのまま抱きしめ合っていた。

ゆうかの頬を伝わる涙が、俺の頬も濡らした。でも、ちっともイヤじゃなかった。

それからしばらくして、ゆうかが顔を上げて、指で涙を拭いた。

俺も、手で拭ってあげる。

その後で、ゆうかがようやく微笑んだ。

それは、なんと言ったらいいんだろう。

涙の跡の残る顔が、ほんとに無邪気な、心からの微笑をたたえている。

俺は、この笑顔を、一生忘れない。この笑顔を守るためなら、なんだってしよう。

ゆうか、約束するよ。

心の中でそう誓ったとき、ゆうかが俺の顔を見つめ、  
「なあに？」

ときいてきた。



「い、いやあ、ちょっと、きいときたいことがあって……」

照れくささにごまかした。

なあに？とゆうかがきく。

「あ、あの、一つ不思議に思ってるのは、ゆうかたちが俺の高校に来るのに、みんなの記憶をどうやったの？あれも、力？<sup>ちから</sup>」

ゆうかがクスツといたずらっぽく笑う。

「そう、あれは少し大変でした。おかげで、変な噂とかも混じっちゃいました」

「うーん、そうか。でも俺が知らなかったのはなんで？」

「裕人さんには、はじめから効きませんでした。それに、その前に会っていましたし……」

ゆうかの目元に恥ずかしさが現れてくる。俺は、話題を変える。

「あの、ゆうかつて、地上に来るにあたって、家族とか持ったのかな？その、学校と同じように人の記憶をかえて……」

「いいえ、それはしていません」

「そうか……」

俺は、ちょっと考えてから言ってみる。

「おれ、両親がもういなくてさ。じいさんが近くに住んでるんだけど、今ここは一人暮らしなんだ。それでさ、ゆうか」

彼女がじつと俺を見つめている。俺は、思わず目を閉じて声を出した。

「俺と一緒に住まないか？いや、俺と一緒にいてくれ。ずっと」

声が震える。耳元で

「はい」

とはつきり聞こえた。背中にまわされたゆうかの腕に力が入る。唇に触れる柔らかな感触。

目をあけるとゆうかの閉じたまぶたが目の前にあった。

終章―おはようはベッドの中で・1・（後書き）

次回、最終回です。

## おはようはベッドの中で・最終回・

ベッドで、好きな子と抱き合って、キスしている。  
どう我慢しても、自分を押さえられるはずがない。

自分のが大きくなっているのがわかる。彼女と密着してるだけにかなり恥ずかしい。

ええい、この際恥ずかしがっても仕方ないや。

キスしていた唇を離して、俺は、思いきって口にする。

「あの、ゆうか……俺……君を…抱きたい」

ゆうかの顔が月明かりでもわかるくらい赤くなる。

いや、俺だって、心臓がばくばくいつて破裂しそうだよ。

ゆうかが、小さくうなずいた。そして、

「待つてね。服を……」

と言つて、ベッドから滑りおると、俺に背を向けて制服を脱ぎだした。

ゆうかが服を脱いでいくのを、ほんと、ドキドキして見ていた。  
すべて脱いでしまつてから、背を向けていた彼女が俺の方を向いた。

ゆうかは腕を広げて立つている。

月明かりが彼女の裸を照らしている。

完璧なシルエットを描く裸体。

形のいい豊かな胸と、くびれた腰。張りのある胸の上で、ピンと立つている乳首。

ゆうかは、しばらく恥ずかしそうに立っていたが、突然、ベッドの中に飛び込んできた。

そして俺に抱きつく。

「あゝ、恥ずかしかった」

えーと、なんでまた……そんなこと。

「うーんと、裕人さんには、ちゃんと見てほしかったというか……えっと、えっと……」

ゆうかさん。うれしいけど、なんか、こっちまですごく恥ずかしいですよ。それに、

「たぶん、後で、いっぱい、たくさん見ますから……」

あ、ヤベ〜と気がついたときには、彼女の顔中が赤く染まっていた。

俺もそそくさと服を脱いだ。

改めて、ベッドの中で彼女を見る。恥ずかしそうな表情の中にも、瞳だけがキラキラ輝いて見える。

「ゆうか」

彼女の名を呼んでからキスする。互いの舌が口の中で絡まる。あたたかい。

俺の手が、彼女の胸に触れる。

優しくさわってから、軽くもんでみる。キスしている口から彼女の息が漏れる。

彼女の全身が淡く光りだしているのがわかる。そういえば、俺の手にも光のベールがかかったようだ。

その指で乳首に触れてみる。

「あん」

ゆうかがたまらず声を出した。

「ゆうか。一緒に生きていこう。この先ずっと」

俺は、彼女の両乳房をさすりながら、心の中でつぶやいている。

この先ずっと、朝、起きたら、おはようと言おう。

夜、一緒に寝るときに、おやすみと言おう。

ゆうかが待った果てしない時間のかわりに、俺という時間を過ごす。

ゆうかと一緒になる時間を。

喘ぎの中で、ゆうかが小さく来てと言った。  
俺は、ゆうかの上から、彼女の中に入っていく。  
光が俺たちを包む。俺たちは幸せだった。

ーおわりー

## おはようはベッドの中で・最終回・（後書き）

「天の意志・地の理」最後まで読んでいただいて、ありがとうございます。

楽しんでいただけたでしょうか？

けっこう長いお話ですが、ようやく最後まで行き着きました。

もし、よろしければ、感想などいただけると、作者としてはうれしく思います。

よろしく願います。

それでは、また、別のお話でお会いできることを楽しみに。

M u

\*

\*

\*

2009/10 追記

「天の意志・地の理」続編が始まります。

本編を読んでいただいた方に、また楽しんでいただけたらいいなと思います。

よろしく。

## 続1章―二人暮らしはドキドキ・1・（前書き）

二人で暮らし始めた裕人とゆうか。

ようやく得た幸せな（ドキドキな！）生活に再びトラブルが……

二人のその後と天上の陰謀を巡る続編、連載開始です。

続1章―二人暮らしはドキドキ・1・

「裕人さん……裕人さん」

誰かが俺を呼ぶ声が聞こえた。柔らかく透き通った綺麗なソプラノ。

ああ、ゆうかだな、と俺は夢現むつの中で考える。

「裕人さん、早く起きないと、今日は……」

ゆうかが少し心配げに声を変える。

何だろう？ なにかあったのかな？

でも、まだすごく眠たい。俺は寝ばけ眼を少しだけ開く。

白いポロシャツ地の夏の制服を着たゆうかが猫のように四つん這いで俺を見つめている。ゆうかはそのまま身を乗り出してきて俺の両肩に手を掛けた。

ゆうかの豊かな胸の膨らみが間近に迫る。綺麗な顔がアップになる。彼女のキラキラした瞳が俺を覗き込んできた。

ああ、こんな近くでゆうかを見るのはいつ以来だろう？

いつか見たその光景がチラツと脳裏をよぎる。

でも、あれは夢だったかな？ そしたらこれも夢なのか？

じゃあ、もつと近くでゆうかを見てもいい？ ゆうかを感じてもいい？

まだ覚めやらぬ微睡みの中で俺はそう思った。

ごく自然にゆうかの背に腕を伸ばしていた。そのまま彼女を引き寄せる。

「あ？」

バランスを崩したゆうかの身体が俺の上に覆い被さる。

「きゃっ？」

ゆうかが焦った声を出す。

「え？ ……おわ！」

身体に伝わるゆうかの重みにこれが夢でないことを悟った。



「あわわわわ……」

いっぺんに目が覚めた。心臓がドキドキと暴れ出す。顔が一気に火照った。

至近距離でゆうかと触れ合っている事実、胸がひっくり返るほど恥ずかしい。

薄い夏服越しに感じるゆうかの肌の柔らかさ。

顔に落ち掛かる髪の毛のくすぐったさ。

鼻腔に届く甘い香り。

俺の身体はどんどんと熱くなっていく。

「あ、わ、わるい……」

ゆうかに謝ろうとして顔を動かした。

「あ、いえ、わたしこそ……」

ゆうかも焦った声を出す。

二人が慌てて顔を動かした瞬間、頬が触れる程の距離にあった俺たちの唇が触れた。

「うっ……」

触れ合った部分から電気が奔った。

「あっ……」

ゆうかが声にならない声を上げる。

そのまま俺たちはどちらからともなくさらに顔を近づけていた。ゆうかの柔らかい唇に俺のが重なる。甘い痺れが後頭部に走る。

うわあ！

頭の中がパニックだ。

俺、今、ゆうかとキスしてる！

それだけで心臓が喧しい。

だって、ゆうかとのキスなんて、いつたい、いつ以来だ？

そう思いながら、実は良く分かっていた。

それは、あの日、ゆうかを取り戻した日以来。もう2ヶ月も前のことだ。

俺とゆうかは天地創造の昔に引き裂かれた恋人だった。

長い長い年月を二人待ち続けていた。ゆうかは天上の神として。

俺は地上の人の転生の中で。

そして、俺たちは再び巡り会った。

俺たちは引き裂かれた運命に終わりを告げ、生涯の伴侶となったんだ。

ただ、ほんの少し問題だったのは……人の転生に結びつけられた俺が本来の記憶を全て取り戻したわけではなく、しかもまだ高校生にしかなくていいことだった。

だから、俺の意識としてはまるっきり高校生なわけで……あの時から始まったゆうかとの生活は、かなり、と言うか、むちゃくちゃ、ドキドキもんだった。

あの日、ゆうかを取り戻した日。

俺はゆうかと一緒に暮らしたいと思った。ゆうかが一人で待った長い年月の代わりに、俺たちがずっと一緒にいる日々を送りたいと、そう願った。

そうやって始まった俺たちの二人だけの生活は、両親が死んでからずっと一人暮らしだった俺にとって、ものすごく新鮮で楽しくて毎日がドキドキものだった。

朝、一番に顔を合わせておはようと挨拶し、夜、二人だけの食事のあとに部屋で寛ぐ生活。

そんな夢のよう二人暮らしの中、ゆうかとの会話の一つ一つに心が時めいた。きっと恋人たちの新婚生活（うわ！）てやつは、こういう感じなんだろうなあ。

それはすごく嬉しくてわくわくして、そして……めちゃくちゃ恥ずかしかった。

いや、だって好きな子と一緒に暮らしているわけだから、当然だ

ろう？

それに健康な高校生の男子だったら、どうしても考えてしまうことがあるわけで……そう、あれ。いわゆる……エ、エッ……いや、だから恥ずかしいんだって！

転生する前の昔の俺がどうだったか知らないけど、今の俺は単なる高校生のガキだからな。そりゃ、そういうことも考えるさ。

しかも俺とゆうかはすでに一度（いや、二度か？）結ばれているわけで……あわわわ。だから余計に恥ずかしいんだって！

え？ 一度だけっていうのがなにか？ ……あつ！

えーと、実はそう。あの日以来、俺たちはずっとその……そういうことは……してないんだ。

あ、いや、別にゆうかに嫌われたとかじゃないぞ。その、なんて言うか、あの日以来お互い妙に意識してしまって……あの時、自分がどうしてゆうかにあんな事言えたのか今じゃ信じられない。

あの時は、お互い自然に身体を重ね合う事が出来た。心臓が飛び出すんじゃないかと思うほどドキドキはしたけれど、それが当然だと思ったんだ。

でも、今は、変に意識してしまって……

原因は……たぶんあれだな。と俺は思った。

## 二人暮らしはドキドキ・2・

ゆうかを取り戻した日。

俺はすごく満ち足りた気分で寝ていた。ぼんやりとした夢現の中で、俺はその気持ちがまだ両親が健在だった幼い頃に感じたことのある、全てが揃っていてなにも欠けたところのない幸せな気分だと思った。

こんな気持ち、ずっと忘れていたような気がする。俺は欠けていたものを取り戻せたんだ。

そう思いながら寝返りを打って……

「うわわわ！」

ベッドから転がり落ちていた。

「痛っ！」

段差を落ちて当然腰を強打した。

「いててて……」

くそー。

さっきまでの気持ちいい眠りから強制的に覚醒させられた。

俺は手で腰をさすった。

「うん？」

手が剥き出しの肌当たる。

あれ、俺、服？ と思ったところで声が聞こえた。

「裕人さん、どうし……あっ」

「つつ！」

ベッドの上でゆうかが軽く上半身を起こしていた。落ちた俺を見つめてそのまま固まっている。

薄明かりの中で彼女の裸の身体がずれた掛け布団から覗いていて……めちゃくちゃ綺麗だ。……なんていうことを思っている場合じゃない！

ベッド下に転がり落ちた俺は素っ裸で、しかも、腰を開いてい

……

「うきやあ！」

まるで女子みたいな悲鳴が口から漏れた。慌てて脚を閉じて股間を押さえる。

ま、まとも！？！　うわー、恥ずかしい！

ゆうかがなにも言えず頬を染めて俺を見つめている。あ、あの、ゆうか、そんなに見つめられたら……

「あは、あははは……」

俺たちは二人して照れた笑いを漏らした。

さっきまで抱き合っていたはずなのに……いやそれだから余計、猛烈な恥ずかしさが沸き上がってきた。

俺はともそのままもう一度ベッドに戻ることも出来ず、部屋を出てリビングのソファで眠った。ていうか、そのあと全然寝れなかったけどな。

と言うわけで、翌日から、ベッドはゆうかが使い俺は布団で寝ることになった。まあ、そもそもあのベッドは一人用で二人で寝るのは無理なんだ。（そりゃ、落ちるよな）

それに、いくら俺たちが生涯の伴侶だからと言って、一緒の布団で寝るのはいくら何でもまだ早すぎるだろ？　俺たちまだ高校生だし。

それともう一つ。

ゆうかの部屋を作った。

だって、やっぱり女の子には自分の部屋が必要だろう？　だから空いていた部屋を片付けてゆうかの部屋にしたんだ。

ただ、そうすると今度はゆうかの部屋に出入りするのが妙にはばかられた。

だってそうだろう？ 女の子の部屋に入るのなんて今までまったく経験ないし、まして夜中に尋ねたりしたら、たとえそうじゃなくても下心があると思われそうだ。そんな勇気は俺にはない。

今更ながら、なんであの時はあんなに大胆だったんだろうな？  
ほんと不思議だ。

そんなこんなで俺はどんどん意識してしまうようになった。それはゆうかも同じだったんだろうか？

夜、リビングのソファで並んでテレビを見ていて、ふと手が触れただけで、ビクツと身体が跳ねちまうことがあった。お互い驚いたように赤い顔で見つめ合ったまま固まっちまって、そのあとしばらく会話も止まっちまったわけだが……

うーん、俺たちってバカだろうか？

でもな、たぶん、そういうもんなんだと思うんだ。恋するっていうことは……いや、ま、よく分からんけど。

そんなわけで俺たちは出会った頃よりずっと、えっと、なんだ……プラトニック(?)な生活を送っていた。

送っていたわけなんだが……

二人暮らしはドキドキ - 3 -

「はふー」

合わせた唇からゆうかの息が零れた。瞬間、開いた唇の隙間から熱い舌が触れる。

「うつつ！」

脳天直撃。電流が奔った。

「あ、あん……」

ゆうかが堪らず声を漏らす。

俺はいつの間にか背に回した腕を引き寄せていた。

すぐく久々に触れるゆうかの温もり。心臓がドッキンドッキンと鳴り出す。

合わせた唇の温かさ。触れ合う身体の柔らかさ。制服越しでもわかる胸の膨らみ。身体中がカーと熱くなる。

うわあ、だ、ダメだ。

俺の中でなにかが外れる音がした。

うー、もう我慢できない！

「ゆうか……」

口づけていた唇を少し離して俺は言った。

「……は、はい？」

ゆうかが真つ赤に頬を染めながら上目遣いで俺を見つめる。心臓のドキドキがさらに大きくなる。

「……いいか？」

一瞬の沈黙。それからゆうかは恥ずかしげに微笑みながら小さく頷いた。

ドクンと大きく鼓動が跳ねる。俺は腕を支えに身体を回転させる。

「あつ」

ゆうかと俺の位置が入れ替わる。緩やかにウェーブしたゆうかの髪が布団の上でパツと広がった。

「裕人さん……」

「うん」

ゆうかの制服を両手で捲り上げる。スベスベした素肌の上を掌が滑るように動いていく。

ゆうかの白い肌が露わになって、一緒に捲られたブラの下から綺麗なピンクの膨らみが覗く。

「ううん……」

触れるとゆうかが声を漏らした。

「あ、裕人さん……わたし」

「うん？」

ゆうかが潤んだ瞳で俺を見つめる。

「う、嬉しい……です」

「うわー！　と思った。心臓がやばいほど暴れる。」

「こんなゆうか、かわいすぎる！」

「今までずつと意識していたから余計にそう感じるんだろうか？」

「ゆうかが欲しいと思う。彼女が欲しい！」

「恥ずかしいけど、心臓が飛び出しそうだけど、でも！」

「ゆうか、愛してる」

「わたしもです」

俺はもう一度ゆうかに口付けし、その手をゆうかの腰に回した。その時。

「ひゃらり、ひゃらりららひゃらりひゃらひゃらひゃら」

「うわ！」

突然鳴り出した間の抜けた音楽に跳び上がりそうになった。

「な、な、なんだあ？」

「ゆうかも驚いた顔で俺を見つめている。」

「……あ、ケイタイか」

「ようやくそれが着メロだと気づいた。しかもその着メロの主には」



覚えがあった。

クラスの友人、それも悪友に類する桜井からのものだ。  
はあー。あいかわらずタイミング悪いやつ。

俺は鳴るケイタイを無視してそう思っていたら……

「きやあ！」

突然ゆうかが声を上げた。

「え？ なに？ どうした？」

びっくりして尋ねる俺にゆうかが手首の腕時計をかざす。

「裕人さん、もうこんな時間です！ 早く、早くしないと」

「え？ はっ！ そうか！」

一瞬で現実に取り戻された。

「うわー、やべー」

俺は慌てて身体を起こす。ゆうかはまだ赤い顔でそそくさと制服の裾を降ろした。

「あの……先にリビングに行ってますね」

「あ、ああ……」

正直に言っと、まだちょっと惜しい気がしてたんだが。

「わかった」

ゆうかは立ち上がって部屋を出ていこうとして、くるっと戻ってきた。

え？ 忘れ物か？

そう思った俺の前で、ゆうかがにこっと花のように微笑んだ。

「わあー」

その笑顔に一瞬惚けた。今更ながら心臓がドクンと跳ねる。

彼女はそのまま顔を近づけてくると俺に軽くキスをした。

「あっ……」

「待ってますね」

彼女がパタパタと足早に部屋を出て行く。

俺はなんだか今までのことが嘘のようにすっきりした気分で、自分も着替えるために立ち上がった。



## 二人暮らしはドキドキ・4・

ゆうかに出会ったのが初夏の頃で、それから二ヶ月。もう夏だ。

高校生的にはもうすぐ待ちに待った夏休み。今年の夏はゆうかと一緒にこれからすごく楽しみだったりする。

しかも、今朝の出来事で横たわっていた問題も解消しそうな気がするしな。

だが、休み前の俺たちには一つの重大な試練が待ち構えている。それはなにかというと……まあ、いわゆる定期考査なわけだが、それでもって今日はその初日だったりするんだな、これが。

ここで遅刻しようもんならかなりやばい事になる。夏休みに追試なんて涙モンだろ？

だから俺たちは急いで朝の準備をして家を出た。しっかり朝食を食べ損ねただけど。

「ほんとにごめん、ゆうか」

「え、いえ、わたしこそ……」

通学路を二人で急ぎながら俺たちは互いに謝っていた。

「起こしに来てもらったのに、こんなに遅くなっちまって……」

「あ、でも、裕人さんお疲れのようだったから……」

確かに寝不足で今朝は起きれなかったんだが、それも昨日の一夜漬けの試験勉強のせいなわけで……我ながら情けない。

それでも普段はちゃんと一人で起きれるんだ。（まあ、一人暮らしが長いからな）

だから珍しく起きてこない俺を心配してゆうかは見に来てくれたわけだが、それがこの朝のあれやこれやの発端になったわけで……

「あの時、俺が寝ぼけてゆうかを引っ張ったのが悪かったんだよね……」

「いえ、あの、それは……大丈夫です」

ゆうかがパタパタと手を振って否定する。

「むしろわたしも……嬉しかったですし」

そう言ってからゆうかがはっとしたように目を見開いた。たちまち頬が赤く染まる。

「え？ あ？ ……そ、そうか？」

なにを確認してるんだろうね、俺は！

でも、ゆうかが俺の言葉に小さく頷くのを見て心臓が勝手に歓声を挙げた。こ、こら、静まれ！

「あー、それはともかく、せっかく作ってくれた朝飯も食べられなかったし、ほんと、わるい」

「冷蔵庫に入れてきましたから、夜にでも一緒に食べましょう」

「う、うん。わかった」

見つめる先でゆうかがまだ赤い顔で微笑んだ。

また胸がドキドキしてくる。頬が熱くなる。さつき触れ合ったゆうかの柔らかさが脳裏に蘇ってくる。

朝からあんなことしちまうなんて、ほんとに恥ずかしい。

でも、さつきのゆうかの言葉。ゆうかも待っていてくれたんだとしたら……これからはもっと自然に接すればいいのかな？

「行きましようか？」

「ああ」

ゆうかがずっと俺の手を取った。二人の手が繋がる。

もう俺たちは固まったりしなかった。

それでも、俺はあいかわらずドキドキしながらゆうかとともに歩き出した。

「じゃあ、裕人さん、テスト頑張ってくださいね」

「あ、ああ……」

学校の昇降口で、俺に向かって小さくガッツポーズをしてから教室に向かうゆづかを半ば無意識に見とれながら見送った。か、かわいい……

ていうか、俺もちゃんとゆづかに頑張れとか声をかけたほうがいいんじゃないのか？ 定期考査なんてゆづかにとっては初めての経験だもんな。

と後ろ姿を見ながら一瞬思ったが、天上の女神たるゆづかに、たいていのことはわからんはずがないなと思いつてやめた。

それに比べて俺のほうはごく普通の高校生（ちよっとだけ昔の記憶も思い出しつつあるんだが）いつも成績は中の下。どうせ今回も一夜漬けだし……結構やばいかも知れないな。

「おっ！ 矢上っちも今登校？」

「うわ！」

急に試験が不安になったところでいきなり声を掛けられて飛び上がりそうになった。

「ったく。誰だよ！」

振り返ると悪友の桜井がいつもの脳天気な顔で立っていた。

## 二人暮らしはドキドキ・5・

「おまえ、びつくりさせるなよ」

「あれ、矢上っち、なんで驚いてるの？」

振り返って文句を言う俺に桜井は首を傾けていたが、ふと目を細めた。

「……うん？」

やつが廊下を歩いていくゆうかの背中をめざとく見つける。やばい！

「はは、ん。今日も深宮さんと一緒に登校かあ。見せつけるなあ」

「あ、いや、えっと……」

そういや、こいつはゆうかフアンクラブのメンバーだった。また、なんか尾ひれのついた噂が奔るのかな？

俺はちよつと苦い顔になるのを自覚した。

ちなみに、ゆうかフアンクラブてのはいつの間にか全校的に出来ていた非公認組織だ（たぶん）。もちろん学校一の美少女（桜井談）深宮ゆうかのフアンクラブなわけで、そもそもって俺たちが付き合っていることはすでに知られている。ていうか、一瞬で全校的に有名になっちまったからな。

こつ言うのを公認というのかどうか、俺にはわからん。

もつとも、なんでゆうかの相手が俺みたいなのやつなんだと、さんざんな言われようをされてるわけだが……ま、まあ、それはいい。俺だって自分で結構びつくりしてるんだから。

でも、さすがに一緒に住んでいることまでは知られてない。そんなことがばれたらまじシャレにならん。たぶん俺学校で生命の危機に陥りそうだ。

そんなことを考えている間、ゆうかの後ろ姿を真剣な表情でじつと眺めていた桜井が突然言った。

「なあ、矢上つち……」

「うん？」

「おまえさ、この頃……」

桜井が今まで見たこともない真剣な目つきで俺を振り返る。なぜか背筋に悪寒が奔った。

「なんだ？ なにかあるのか？」

「ど、どうした？」

やつは真剣な目つきのまま俺に探るような瞳を向ける。

「うっ！　なんだ？　この目つき？」

ひよっとしてゆつかと一緒に家を出るところを見られたとか？

いや、まさか。

でも、もしそうなら……背中に冷や汗が流れ出す。

桜井が続けた。

「ゆつかさんの……腰の辺りが充実してきたと思わないか？」

「……………はあ？」

本気で仰け反りそうになった。

なにを言い出すんだこいつは？

「ほら、あの後ろ姿。腰のくびれとヒップの張り。なんというか、今、最高に充実してるって感じだよな」

「そんなはずないだろ！　だって最近そんなこと全然してな……て俺はなにを考えてるんだ！」

「バカか、おまえ！　そんなエロい目でゆつかを見るな！　ていうか、おまえは近所のエロオヤジか！」

「あははは。そうじゃないけど……でも、あの歩き方、今日はなんかいいことあったんじゃないかな？」

「うっ！」

その言葉に心臓が跳ねた。やっぱ、朝のあれか？　あれなのか？　それにしても矢上つち、深宮さんと呼ば捨てとは、えらくなったよなあ」

「え？　……………あっ！」

しまった。油断した。そういや、今、ゆうかつて呼んじまったか。  
桜井がジト目で俺を見る。

「いいよなあ。おまえの彼女だもんなあ」

「えーと、それはまあ……」

「そのうち絶対、天変地異が起こるぜ」

「絶対かよ！」

「ったく。頭痛でー」。

俺はやつとの不毛な会話を終わらせるために教室に向かって歩き  
出そうとした。その時、

「いやまてよ、もしかして深宮さんの腰の充実は、ひょっとして矢  
上つちの……」

「は？ なにを言い出すんだこいつは？」

と思ったときには、桜井は俺の襟首をむんずと掴んでいた。

「矢上つち、お・ま・えー」

「すっごい形相で詰め寄ってくる。」

「もしかして、ゆうかさんと、その……お、大人の階段登ってたり  
して……」

ギクツ。

桜井の言葉に顔が強張る。や、やばいかも？ 俺とゆうかの関係  
が知れたら……”破滅”の二文字が脳裏をかすめる。

「うわあー！」

思わず奇声を上げちまった。

「ば、ばか！ そんな嬉しいことあるわけないだろうー！」

「本当にい？」

桜井のやつが100パーセントマジな顔で聞いてくる。なんだこ  
の迫力は？ 嘘つくのを躊躇ってしまいそうだ。

「だがしかし、いくらなんでも、これは言えないだろ。」

「ほんとに決まってるだろうが！」

俺は拳を握りしめて力説した。ええい、勢いだ！

ところが……



「……ふん。そうなのかあ」

「あ？ あれ？」

桜井がいつぺんにテンションの落ちた声を出した。俺も勢いがそがれる。えっと……

「ちよつと残念だね」

「え？」

真顔で言われて面食らった。なんだ？ どういう事だ？

「僕はちよつと期待してたんだけどなあ」

「はあ？ 期待？」

意外な言葉を聞いて首を傾げた。

期待ってどういう事だ？

もしかしてこいつ密かに俺たちの仲を応援してくれてたのか？

だとしたら、案外いいやつなんじゃ……

「ま、そうだよねえ。僕の考え過ぎかあ」

桜井は一転明るい声を出した。それから肩をばんばんたたき出す。おい、痛いぞ。

「まあ、深宮さんとおまえだもんなあ。よく考えたら、いくら何でもそれはないか、あつはつはつは」

やつは大口開けて笑いやがった。前言撤回。やつぱりいいやつでもなんでもない。

結構ムツと来たが……だからといって否定するわけにはいかないんだよな。

桜井はさっきまでの真剣な表情とはまるつきり違うバカ笑いを納めると、今度はニマツと口の端を上げた。

「いやあ。惜しかったなあ。矢上っちを冷やかす絶好のネタだと思っただけ」

「おまえなあ！」

さらにこいつの腹黒認定。危うい危うい。

やつぱほんとのこと言わなくてよかった。助かったぜ。

と胸をなで下ろしたところで、ハタと思い出した。そっぴや、今

朝こいつ電話してきてなかったか？

「さっき、電話くれたか？」

「あー、やっぱり知ってたんだ！」

「いや、まあ、そうなんだが……」

「あ、無視したの？」

「え？ えっと、朝はちょっと忙しくてだな……」

「なんで？」

「いや、いろいろ……」

桜井のやつが疑惑の目を向ける。

い、忙しかったのは本当だぞ。ていうか、これって、やぶ蛇？

「な、なんか用だったのか？」

「うん。今日の英語のテスト範囲教えてもらおうと思って」

「は？」

テスト範囲？ しかも、今から受けるテスト科目の？

俺が呆気にとられていると桜井は笑いながら、

「そうなんだよ。メモがなくなっちゃって」

とか言っただけ。

俺は呆れた。こいつはどうしようもないアホか、さもなくば、ものすごい大物に違いない。後者は限りなく有りえないがな。

「さて、いくか」

俺はほとんどわざとぼけてるんじゃないかと思う桜井をほっぽり出しとつと教室に向かいだした。

「あ、待つてよ」

桜井が慌てたようにあとをついてくる。

俺はさっきの話題がうやむやに終わったことに胸をなで下ろしていた。

## 二人暮らしはドキドキ - 6 -

テストの一教科目はずばり英語だった。

ったく。桜井のやつ、なにやってるんだか。さつき教えたテスト範囲（一応教えた）を確かめる時間もないだろうに。

いや、まあ、俺も人の心配してる場合じゃないんだけどな。

俺は問題用紙を睨みながらちよつと途方に暮れていた。なぜかという、完全にヤマが外れたわけで……

昨日の一夜漬けも無駄だったか。ある意味当然だけど。

と言うわけで、これはもう時の運（違うか？）と諦めて、俺は解答用紙の埋められるところだけはさっさと埋めて、潔く無駄なあがきを放棄した。

シャーペンを投げ出し肩をほぐす。

顔を上げると前のほうに座っている桜井がカリカリと答案用紙にペンを走らせているのが見えた。なんだかいっぱい書いてるようだが、ちゃんと出来てるとは思えんな。

それはさておき、俺の側にぽつんと人が座っていない机が目に入る。

それはあの蒼井さんの席だ。

今日のテスト、実は蒼井さんはお休みだった。

彼女が来ていないことは予鈴の時に気がついた。その時は今日に来るのが遅いなあと思っていたんだが、教師が入ってきて本鈴がなくても蒼井さんは現れなかった。

蒼井さんが休むなんてすごく珍しい。いや、初めてなんじゃないのか？

そう思い当たるとちよつと心配になってきた。

どうしたんだろう？ 病気かな？

でも、彼女、蒼井瑞穂はゆつかと同じく天上人だ。そうそう病気

になったりするもんかな？

それに……土曜は元気だったよなあ。

もはやテストはどうでもよく、俺の脳裏に土曜に俺んちに遊びに来た蒼井さんの姿が浮かぶ。

あの時はまったくいつもと変わらない元気少女だったんだけどな……。

それで思い出したけど、ゆうかとともに地上に残った蒼井さんは週末よくうちにやってくる。一昨日の土曜日もゆうかと一緒にあいかかわらず本当の姉妹のように仲良く過ごしてた。それなのに……。まあ、考えてもわからない。後でゆうかになにか知ってないか聞いてみようかな。

俺はポツカリと空いた机を見ながらそう思った。

とりあえず3教科のテストをやつつけて（やられたという見方もあるが）、昼前に今日のテストは終わった。

俺はぐったりと机に突っ伏していた。

はあ、疲れた。ひよっとして全敗？ 落ち込む！。

そっぴや、英語のテストが終わったあとで、

「なに？ 僕はそこそこだったけど、矢上っち出来なかったの？」

と桜井に笑って言われたときにはマジに落ち込んだ。

あゝあ。疲れた頭をすっきりさせるためにクラブで身体を動かしたいとこだが、テスト期間中はクラブ禁止ときてる。

仕方ないな、おとなしく帰って明日の勉強でもするかな（泥縄だけど）。

そう言えば、普段、俺はクラブがあるのでゆうかと別々に帰っている。

でも今日はテストだから一斉下校だ。ゆうかの教室に行けば一緒に帰れるだろうな。

朝の気分のよかった登校時のことを思い出してチラッとそんなこ

とが頭をよぎった。だけど……

あー、やっぱ、無理だな。

考えただけでそれに伴って発生する事態が怖い。学校ではゆうかに近付くだけで周りでガヤガヤひそひそと五月蠅いし、棘のある視線が四方八方から飛んでくる。

この二ヶ月でだいぶ慣れたけど、あれは結構堪えるんだよなあ。なぜかゆうかはあんまり気にならないようなんだが……

そこまで考えて、ある可能性に気がついた。

えっと、もしかすると……

その時、俺の耳にガヤガヤとした喧噪が聞こえてきた。

はっとして突っ伏していた顔を上げる。

「裕人さん」

「あちゃ！」

いつの間にか教室の出入り口から覗き込んでいるゆうかの姿が目に入った。

ああ、きちやったか。やっぱりな。

俺はにこにこ手を振るゆうかを焦りつつ見た。周りではさつそく生徒たちがひそひそと噂し合っている。俺を見る視線が痛い。

でも、ゆうかはやっぱりそんな周りの様子には気づいてないみたいで……ていうか、ほんとにこれに気付いてないとしたら、ある意味感心する。さすがゆうかだ。

意味もなく感心したあとで、さて、この注目の中、どうしたもんか？ と思った。その時。

バシンと背中を盛大にひっぱたかれた。

「痛ってえ！」

ビクツと背筋を伸ばして振り返ると桜井のやつがニヤニヤしたあほ面で立っていた。

「お、おまえ、なにする……」

「ああ、もう、矢上っちは見せつけてくれるよね。深宮さんのお迎

えなんてさ」

「うつ……」

面と向かって言われるとさすがに恥ずかしい。頬が熱くなりそう  
だ。

そんな俺に桜井がせかすように言う。

「さあさ、早く行きなよ。深宮さん待たしちゃダメでしょう?」

「え? ……あ、ああ」

なんだか意外にまっとうなことを言われてちよつと面食らった。

「そうだな」

それをきっかけに俺は荷物を掴むと急いで立ち上がった。周りの  
ざわざわが大きくなる。

えーい。知るもんか。

俺はゆうかが顔を輝かせて覗いている教室の出入り口に向かって  
歩き出す。後ろから桜井の声が追いかけてきた。

「じゃあね。矢上っち。また明日。ゆうかさんと階段登ったら、報  
告しろよー」

「ちよつ! あほ! 誰がするか!」

振り向きざま桜井を睨んで早足でゆうかのところにたどり着く。

ゆうかが怪訝な顔で尋ねるように俺を見たけど、そんなこと説明  
できませんよ。うん、わからなくていいから。

周りからわき起こる喧噪の中いつもより動揺しながら俺はゆうか  
と教室を後にした。

## 続2章―トラブルは突然に - 1 -

「裕人さん、お昼どうします?」

「そうだなあ……」

土手沿いの道は気持ちいい風が吹いて夏の暑さを少し和らげてくれていた。

俺たちは並んで歩きながら昼飯をどうするか考えていた。

あの後、ゆうかと一緒に学校を出た。

「あの、瑞穂は?」

ゆうかも蒼井さんが休んでいることは知らなかったみたいで、教室を出てきた俺にそう尋ねた。

「休みなんだ」

「そうなんですか?」

「うん。ゆうかはなにか聞いてないのか?」

「ええ。……三人でお昼に出来ると思ってたんですけど」

ゆうかはちよつと首を傾げてそう言った。

うゝん、蒼井さん、ほんとにどうしたのかな?

「後で、様子見に行こうか?」

俺がそう言くと、ゆうかは嬉しそうに微笑んで「はい」と答えた。

「じゃあ、その前に昼飯だけど……」

なんとなくこのままゆうかと一緒にどこか遊びに行きたい気もあるな。だけど、明日も試験だし、そういうわけにはいかないか。

それでもこのまま家に帰るより……

「ハンバーガーでも食いに行くか?」

「あー、そうですねえ」

ゆうかがちよつと上目遣いで考える仕草。

なんだろう? ハンバーガー気分じゃないって事か?

じゃあ別の選択は……。

俺が悩んでいる内に、ゆうかはおもむろに鞆を開くとがさごそとなにか搜しだした。そして鞆の中からひよいとなにかを取り出す。

「あ、ありました、裕人さん」

ゆうかがにつこりと微笑んだ。手にしているのはチラシだった。

「お？ おお？」

「これでお安くなるんですよ」

「ああ、割引券か」

「はい」

ゆうかは笑顔でひらひらとそのチラシを振る。

えーと、ゆうか……遅くなったよなあ、ほんとに。すっかり地上の生活に慣れて……。

俺が感心していると、

「どうしたんですか？」

「え？ いや、なんでもない」

「じゃあ、お昼、いきましよう」

そう言って、ゆうかが俺の手を取った。

途端にまた心臓がドキドキと騒ぎ出す。その手の柔らかさに今朝のゆうかの柔肌を思い出しそうになって……

いきなりざわりと肌が総毛立った。

つつ！ なんだ？！

すごい異質感が身体を包む。

「裕人さん、きます」

「え？ なに？」

ゆうかが今までとはまったく違う鋭い声を出した。繋いでいる手がぎゅっと握られる。

驚いてゆうかを見ると、さっきまでとは別人のように硬い表情をしていた。



なにが、来るんだ？

と聞こうとした時、眼下に広がる河原がユラリと動いた。

まるで塵気楼のように空間が揺らめいて光を放った。

光の中に人影が現れる。光を纏った少女の立ち姿。いつか見たゆうかのように。

「うん？ あれは……蒼井さん？」

光の中に現れたのは制服姿の蒼井さんだった。その身体がぐらりと揺れて堪えきれないように膝を折った。

「え?!」

なんだ？ どうしたんだ？

間髪入れずに蒼井さんの周りに別の光が次々沸き上がってくる。

二つ、三つ、四つ……光の中から同じように人影が現れた。

それは手に手に剣を持った男たちで、蒼井さんを取り囲む様に広がった。

そして最後にもう一つ光が揺らめき、煌びやかな服を身に纏った人物が現れた。

「え？ 女性？」

男のような服装だけど最後に現れたのは女性に見えた。

「ええっ!？」

傍らでゆうかもびっくりしたように声を上げた。

その間にも男たちが蒼井さんに剣を振りかざす。膝を付いていた蒼井さんがよろけながら立ち上がって自分の剣を構えた。

なんだかやばいぞ、これ。なにが起こってるのか全然わからないけど、助けに行かなきゃ。

チラッとゆうかを振り返って、まだ驚き顔のゆうかに告げる。

「俺、助けに行く」

「あ、裕人さん、あれは……」

ゆうかがなにか言いかけたが、それより早く駆け出していた。

蒼井さんが切り込んできた男の剣を辛うじてかわしている。その脚捌きがいつもからは考えられないほど弱々しい。

「どけー！」

俺は一気に土手を駆け下りた。

背中を向けていた男の一人が交わす様に跳び下がる。俺の声で他のやつの視線も集まる。

俺はかまわず男たちの間をすり抜けて蒼井さんに駆け寄った。

「蒼井さん！」

「え？……裕人さん？」

彼女が驚いたように目を見開いて、それから苦しそうに顔を歪めた。

「大丈夫か！」

再びくずおれそうになる彼女をとっさに支える。彼女の腕から剣がこぼれ落ちた。

「なっ！」

近くに寄って初めて気づいた。蒼井さんの顔色は蒼白で、制服はあちこち切り裂かれ腕から赤い血が流れ落ちている。

「うわ！これは……」

ひどい！と思うと同時に、周りを囲むものたちへの怒りが沸き上がった。

なんでこんなこと！

俺は蒼井さんの落とした剣を拾って立ち上がる。

「ゆ、裕人さん……ダ、ダメです」

蒼井さんが俺の腕を引いた。苦しそうに顔を歪めながら口を開く。「そ、その人たちと戦うのは、いくら裕人さんでも、一人では無理

……」

「一人じゃないさ」

「え？」

その時、男の一人が飛び込んできた。一気に間合いが詰まる。やばい！

とっさに蒼井さんを背中に庇いつつ俺は剣を振った。キンという金属が触れ合う音が響く。相手の剣をなんとか受け止めていた。

合わせた剣越しに男の鋭い眼光が俺を睨め付ける。だが俺は冷静に剣を握る右手に意識を集中した。俺の掌が薄く光る。光が刀身を駆け上った。

「なに?!」

相手の瞳に驚きが浮かんだ、瞬間！

「でやつ！」

俺は剣を横殴りに払った。

男が跳び下がって剣を避けようとする。普通なら避けられる距離。だが刀身から伸びた白い光がかすめた。

「うぐっ」

男が呻いて膝を折る。

「何者だ！」

別の男が鋭く声を発した。

「それは、こっちが聞きたい！」

どう見てもこいつら尋常な人間じゃないだろう。光の中から突然現れた。やっぱり天上人なのか？

残った男たちがじりじりと間合いをつめてくる。さすがに同時はきついなとチラッと思う。

俺は蒼井さんを背中にかばいつつ剣を構えた。

「待て！」

その時鋭い、けれど鈴のように美しい声が響いた。男たちが動きを止める。

その声の主は男たちの後ろに立つ人物。

やっぱり女性か。俺はそう思いながら改めてその女性を見た。年の頃はいくつぐらいだろう？

少なくとも俺たちよりは少し上の落ち着いた雰囲気。

整った顔立ちに作り物めいた美貌を湛える美女だ。でも、ゆうかと違ってすごく冷たい印象をつける。

ポニーテールのように後ろで括られた長い髪だけが、まるで体育会系健康少女のようでちよっと違和感がある。

違和感っていやあ、その服がまた、真つ赤な生地<sup>マツアカ</sup>に金や銀の意匠<sup>イシャ</sup>が施された煌びやかなものでイヤでも目立つ。

しかも、男性の軍服のように腰に細作りの剣を掃いていた。

誰だ、こいつ？ やっぱり天上人なのか？

なんかすごくえらそうなんだが……俺はなんとなくえらそうな天上人??? 日輪の女王<sup>ニツリン</sup>なんかを思い浮かべた。

その女性がなにかを探るようにじっと俺を見つめていた。

そして、ようやく口を開く。

「おまえは……」

## トラブルは突然に - 2 -

「わかひめ稚陽姫！」

いきなりゆうかの大きな声が聞こえた。その声になにか言いかけた女性が驚いたように振り返る。

土手を降りてきたゆうかが俺たちに近付きながら周りを囲む男たちの前に立った。

「これはどういうことなのです、稚陽姫？」

「夕凧姫……」

稚陽姫と呼ばれた女性が一瞬驚いてすぐにその表情を引っ込める。

「やはり、それでは、その男が、はついかづちあつ初雷鎚王か」

「は？」

聞き慣れない言葉を言われて俺の理解が付いていかない。男たちがわずかに身じろぎする。ゆうかはかまわず言った。

「これはどういうことかと聞いているのです。答えてください」

「お久しぶりです、夕凧姫さま。近頃地上に降られたと聞きました  
が、その際、わたしもその場にいたかったものです」

「稚陽姫。わたしもあの折、禁軍の司令官たる貴方がいなかったこと、幸運だったと思っています」

「あははは。姫御子さまのその物言い、わたしは好きですよ」

冷たい美貌が楽しそうに笑う。まるでゆうかのその態度を嬉しがつているようだった。

ゆうかが少し眉根を寄せた。

ん？

初めて見るその表情。ゆうかがわずかに緊張しているのだとわかるのに少し時間が掛かった。

俺は稚陽姫と言われた女性をまっすぐに見つめる。今聞いた禁軍司令官の呼称とゆうかの態度。俺の身体にも緊張が奔った。

けれどゆうかはゆっくりと口を開くとはつきり告げた。

「稚陽姫、わたしの友人を傷つけるのに正当な理由が無いとすれば、たとえ貴女といえど……わたしは許しませんよ」

ゆづかの全身からユラリとなにかが立ち昇る。緩くウェーブの掛かった髪が風ではなくふわりと浮き上がった。

「待ってください、夕凧姫さま。理由はあるのです」

「貴女ほどのものが直接出向くような理由なのですか？」

「ええ」

稚陽姫が蒼井さんを指さして宣言する。

「瑞穂……いえ、そのものは謀反人の同胞はいつからなのです」

「え？」

「なに？」

ゆづかが信じられないことを聞いたという驚いた表情をする。俺も言われたことがわからなかった。

「謀反てなんだ？ 誰が同胞だって？」

俺はとっさに振り返って背中 of 蒼井さんと視線を合わす。彼女は困ったように首を振った。

「紗那が……」

「紗那？」

それは彼女の弟の名前だ。けれど紗那が？

「紗那が謀反を起こしたと……」

「はあ？」

「それは本当なのですか？」

ゆづかも蒼井さんに尋ねる。

「わかりません。ただ、そう告げられ、わたしも連行すると言われて……」

蒼井さんが困惑に眉を歪める。

「いかにも、紗那童子は天界において謀反を企てた咎で追われているのです」

稚陽姫がそう宣言する。ゆづかが叫んだ。

「まさか！ なにかの間違いです！」

「いや、これは明白なる事実。よってかのものの姉たるそのものは天界が預かるのが道理」

その言葉に俺は直感する。

「それは……人質か？」

俺の言葉に稚陽姫は薄く口の端を上げた。

「いかようにも取ればいい。王よ」

なっ！

王なんて言ってるが、まったくそんなこと認めていないぞんざいな言い方。ゆうかと話すときは話し方がまるで違う。

しかも稚陽姫の瞳に浮かぶのはあからさまな敵意だ。

俺はそんなにも天上人たちに嫌われているのか。……まあ、そんなのかも知れないなと思う思いが頭に浮かぶ。だけど、

「蒼井さんを連れてなんか行かせないぞ」

俺はまっすぐ稚陽姫を見つめて言った。

「蒼井さんは俺たちの大切な友達だ。おまえたちの勝手にはさせない。それに、紗那が謀反なんて俺にはまったく信じられない」

稚陽姫の瞳が陰しくなる。

ゆうかが周りの男たちを無視するようにずっと下がってきて俺の隣に並んだ。

「稚陽姫。わたしも我が伴侶と同じ思いです」

稚陽姫は苦々しげに口を開く。

「姫御子さま、貴女はそのものと伴侶になるという愚かな選択ばかりか、天界に背く謀反人をも庇うつもりですか？」

「なに！」

俺の頭に血が昇る。

愚かな選択だって？！ なにを言ってやがるんだ、こいつは！

確かに俺自身はゆうかに釣り合う自身はまだ無いし、学校でも白い目で見られているからそんなこと自覚してる。だから俺自身が貶められるのなら、それはいい。

けれどこれは、ゆうかの選択を否定されてるんだ。それは絶対許せない。

「謝れ！」

「は？」

稚陽姫が怪訝な顔をする。

「ゆうかに謝れ！」

「裕人さん！」

手に持った刀身から光が迸った。その光がまっすぐ稚陽姫に伸びる。

こいつ、禁軍司令官かなにか知らないけど、俺は怒った！  
その光がとどくと思った。

瞬間。

稚陽姫の身体がふわりと跳び上がる。光の刀身の上に一瞬立った。

「なっ！」

俺が剣を振ろうとしたときにはさつと後ろへと飛び下がっていた。  
稚陽姫が苦笑する。

「王は短気な御仁なのか」

「なに！」

「まあ、姫御子に一途らしいのは認めるが……」

「なっ」

こんな時なのに指摘されて心臓が揺れる。  
「まったく。しっかりしろ、俺！」

「天界は私たちにもう手出しをせぬと約束したはずですよ」

ゆうかが言う。

「瑞穂にも手出しは出来ませんよ」

「それはあなたたちが今の世の秩序を乱さぬ限りにおいてでしょう？  
これは世界を揺るがす大事なのです」

「なんですか？」

ゆうかがいつそう表情を引き締めた。



「紗那がそれほどのことをしたと言っのですか？」

稚陽姫の表情が一瞬固まる。しまったというように見えた。

「それはいつたいたいなんなのですか？」

ゆづかの追求。

「……言えません」

「ならば、謀反の証拠は？」

「それも、言えぬのです」

ゆづかがすつと姿勢を正した。それだけで凜とした気が辺りに満ちる。

ゆづかの口から今まで聞いたことのない言葉が響いた。

「故無くして為すものは偽りなり。偽りは真実を破ること能わず。

なおも募るは、我が権能をもつて正さん」

いつか見たようにゆづかの身体が輝き出す。

すつと世界が白くなつたような気がした。

「言霊の詠唱なんて……」

蒼井さんが驚いたように呟く。

「え？ なに？」

俺は思わず聞き返していた。

「自らの力を解放する術の一つなのですが……ゆづかお姉様が唱えるのを初めて見ました」

「そうなのか？」

そのゆづかの姿を見て周りの男たちがたじろぐ。

稚陽姫は一瞬目を見開いて、それからふつと笑い出す。

「あははは。初めて叔母様の本気を見せてもらいました。これは怖い」

それは、さつきまでとは違うえらくくだけた物言いだつた。

……え？ 叔母様？

「ここはいったん引き下がらせてもらいましょう」

稚陽姫が続ける。

「でも、忘れないでもらいたい。今回のこと、理は天にあるのです」

その言葉が終わらないうちに、ふらりと空間が揺らめいた。

稚陽姫が揺らめきの中に消えていく。すぐに他の男たちも同じように消えていった。

その途端すつと世界が戻ってくる感覚がした。

もしかしたら、ずつと結界かなんかの中にいたんだろっか？

それにしても、最期に稚陽姫が言った言葉が脳裏に引っかった。えっと、叔母様って？ どういう……

その時、パサッと言う音が背後でした。

うつ！ またなにか来たのか？

「え？」

振り返ると蒼井さんが地面に倒れていた。

「蒼井さん！」

「瑞穂！」

俺は慌てて蒼井さんを地面から抱え上げる。傍らからゆうかが心配そうに覗き込む。

蒼井さんは血の気の失せた白い顔で目を閉じて、ただ荒い息を繰り返していた。

### トラブルは突然に - 3 -

ドアをコンコンとノックする。

「入ってもいいか？」

「はい」

中からゆづかの返事がした。

俺はゆづかの部屋のドアを開けて中に入る。ゆづかがベッドの蒼井さんを覗き込んでいた。

「どうだ？」

俺もベッドに近づいて彼女を覗き込む。蒼井さんは目を閉じて眠っているようだった。

「傷の手当てはしました。でも、まだ動けないと思います」

「そんなにひどいのか？」

「……ええ」

ゆづかが少し口ごもった。蒼井さんの顔色はまだ驚くほど白い。

俺は唇をかんだ。

あれから俺たちは気を失った蒼井さんを俺の家に連れ帰った。

意識のない彼女をゆづかのベッドに寝かせ、着替えや傷の手当てをゆづかにまかせた。

その間に俺はどうにかして紗那に連絡が取れないかと考えたが、あいつが携帯なんて持つてゐるわけもないし、無理だよな。

俺たちが一緒に戦ったあの出来事の後、紗那は少しだけ地上にいてその後天界に帰って行った。

彼が以前地上にいた時とは違い平和な世界に飽きたのか？（昔いた時の合戦の様子を生き生きと話してくれたもんだ）

それとも天界ですることがあったのか？

その後、紗那は一度も俺たちの前に姿を現していない。もしかしたら、蒼井さんとは連絡を取っていたのかもしれないけれど。

「……紗那は、なにをしたんだろっな？」

ずっと思っていたことが口から零れ出た。蒼井さんを心配そうに見つめていたゆづかが俺を振り返る。

「わたしにも、わかりません。ですが……」

ゆづかがきつぱりと告げる。

「あの子が理由もなくおかしいことをするわけがありません」

「うん、そうだな。俺もそう思う」

「まして、謀反だなんて」

「ひょっとして、俺たちのことになにか咎められたんじゃないのか？」

俺は考えていたことを口に出した。

俺たちはあの時、天上界に矛を向けた。謀反というならあれこそがそうだろう？

だから、天上に戻った紗那がそれを元に理不尽な扱いを受けたとしたら……

「それは、ないと思います」

ゆづかが慎重な口調で答えた。

「そうか？」

「ええ。お姉様は少なくともあの約束を反故にはなさらないでしょう」

俺は日輪の女王を思い浮かべる。あの時俺たちと交わした言葉。

それは言霊の誓いでもあるのだ。

「うーん。じゃあ、やっぱりなにが起こってるんだろっな？」

俺はベッドの蒼井さんを見やる。

蒼井さんは知っているんだろうか？

紗那がなにをしたのか？ しようとしていたのか？

でも、もしそうなら、彼女は弟を止めたはずだ。ひょっとしたら俺たちに相談してくれたかもしれない。

そう思うと、やっぱり彼女もなにも知らないのだろうと思う。

「それにしても、蒼井さんをこんなに傷つけるなんて、あいつら相手練れなんだな」

ゆうかがちよつと眉根を寄せる。そして告げた。

「ええ。みな天界の力ある武将たちでした。中でも稚陽姫わかひめは日輪の女王の娘にして禁軍総帥です」

「へ？」

俺はびつくりしてその言葉を聞いた。特に……

日輪の女王の娘？ あいつが？

「そ、そうなのか？」

「ええ」

あー、なんとなく、あのえらそうな感じがそうかと思わせる。ちよつと納得。

「あ、そうか。だから、ゆうかを叔母様って……」

「はい。わたしはあの子が子供の頃から知っています」

「そうなんだ。しかも、禁軍総帥？ それって、すごく強いんだろ」

「はい。禁軍は女王の近衛軍。その総帥たる彼女は武技では天界でも並ぶものがない娘です」

それは、さすがの蒼井さんも苦戦するわけだ。俺がそう思っていると、

「もつとも、一対一なら瑞穂も決して引けを取らなかったでしょうけれど」

ゆうかが蒼井さんの額に掛かる髪を優しく撫でながら言う。

「でも、だからこそ今回のこと、天界の本気を感じます。紗那がなにをしたにせよ、このままではすまないのでは……」

ゆうかの表情に浮かぶ不安。俺はそんなゆうかを見たくない。

「大丈夫だ。俺たちで蒼井さんは守ろう。それから紗那も探し出して、天界には手を出させないようにしよう」

ゆうかはもう一度俺を振り返ると嬉しそうに微笑んだ。

その夜は、ゆうかは蒼井さんについて同じ部屋で寝ることにした。俺は自分の部屋に下がってもよかったんだが、なにかあった時のためにゆうかの部屋に近いリビングで寝ることにした。

いや、むしろ徹夜で警戒した方がいいような気もする。天の奴らがいっ戻ってくるか分からない。

リビングのソファに座りながら、俺は天界のことや紗那のことをいろいろ考えた。

謀反とはいったいなんなのか？

天界はこの先どう動くのか？

俺たちは蒼井さんや紗那を守りきれなのか？（いや、絶対守らなきゃいけないと思う）

それにしても紗那は今どこにいるんだろう？

いったいあいつはなにをしたんだ？

そんなことをぐるぐる考えながら、けれど、ほとんど結論は出ないまま時間が過ぎていった。

トラブルは突然に - 4 -

ふと気がついたら眠っていた。

ありゃ？ いつの間にか寝たんだけ？ しまったな。

昨日の徹夜（一夜漬けの）がまだひびいてるのか。

リビングの電気は消され身体にタオルケットが掛けられている。

ゆっかなかな？

俺は彼女に対する申し訳ない気持ちと温かな感情が同時に胸に浮かんだ。

その時、闇がふつと揺れた気がした。

俺の身体が反射的に緊張する。

天の追っ手か？

かざりとわずかな物音がリビングの外の廊下でした気がする。

まずい！ そっちにはゆっかの部屋がある。

俺はテーブルの上に置いていた剣を掴むと音を立てないように注意しながら急いでリビングを横切った。

廊下へと続く扉に手を掛ける。逸る気持ちを抑えて、その扉を開いた。

「うおっ！」

いきなり白刃が闇に煌めいた。

とっさに扉から跳び下がって避ける。ドアは閉められなかった。

影が追撃するように飛び込んでくる。

二度目の白刃の煌めき。

今度は剣で受けた。夜の静寂の中でキンと甲高い音がして、すぐに剣が離れた。

と思った瞬間。横合いから次の刃が迫っていた。

「チッ！」

速い！

剣を逆手になんとか相手の刃を受けた。

心の中で、よし！ と叫んだ。今度は離れないぞ。

伊達にこの2ヶ月、蒼井さんに相手をしてもらって鍛えてきたわけじゃない。

俺はそのまま力押しに押した。相手が下がる。

俺は剣に気を込める。掌の紋章からあふれ出た光が刀身を白く包む。

「え？」

相手が微かに驚きの声を上げた。その光に照らされて相手の面が闇の中に浮き上がって……

「て、あれ？」

「あっ！」

二人して同時に驚愕の声を上げた。その時。

「裕人さん！」

「うわ！」

「え！」

突然聞こえたゆうかの声。それに続いて強烈な圧力が背中にのし掛かった。

おれは立っていることが出来ず押しつぶされるように床に膝をつく。剣を交えていた相手も同様に這いつくばった。

二人して慌てて声を上げた。

「ゆうか、ちょ、ちよっと、待った！」

「痛てて……お姉さん、俺、おれ！」

「え？」

闇の中でゆうかが驚く声。俺はゆうかの力を初めて身をもって思い知りながら口を開いた。

「紗那が来たんだ」

ゆうかの力がふっと消え去る。



俺たちはあちこち痛いところをさすりながら身体を起こした。

「紗那なの？」

パツとリビングの電気が灯った。

ゆづかが廊下からの出入り口でスイッチに手をやりながらこちらを見つめている。

光の中で紗那の姿が明らかになった。まるでその辺の中学生みたいなラフな格好の紗那がそこにいた。

「紗那、おまえ……」

言いかけた俺に紗那はちょっと申し訳なさそうに目を伏せた。

「兄さん、ごめん。おれ、てつきり敵だと思っちまって」

「あー、いや、俺の方こそ、天の追っ手だと思ったよ」

「ていうことは、やっぱりあいつら、こっちに來たんだ」

紗那が憤慨したように言う。今まで黙っていたゆづかが口を開いた。

「紗那、あなた、なにをしたの？」

「ゆづか姉さん……」

ゆづかが紗那に近寄ってくる。紗那はばつの悪そうな表情を浮かべた。

「瑞穂が、怪我をしたわ」

「え？ 姉さんが？」

「ええ、稚陽姫たちが、彼女を捉えようとしたの」

「なんだって！」

紗那はびつくりした声を上げ、

「姉さんは？ 捉まったのか？」

「いいえ。今、ここにいるわ」

「ほんとに？」

紗那が俺に顔を向ける。俺は頷いた。

「ああ、よかった」

紗那はいったん安堵の表情を見せ、すぐに怒りを表す。

「くそう、天のやつらめ。姉さんは、なんにも関係ないのに！」

「紗那、おまえ、いったいなにをしたんだ？」

俺は改めて紗那に問うた。

「それは……」

「彼らは、謀反と言ったわ」

「ちがう！」

紗那が即座に否定する。

「そんなじゃねえ。ただ、俺は……助けただけなんだ」

「助けた？」

「ああ、そうだ」

「助けたって、誰をです？」

俺たちの問いに紗那はリビング奥の扉に視線を向けた。紗那やゆうかが入ってきたのとは別の奥の部屋へと続く扉。

俺たちがその扉に注目した、その時、まるで計ったように扉が開いた。

なんだ？ と一瞬思った。開いた扉の向こうに……

「瑞穂！」

「美音！」  
みおん

「蒼井さん！」

幼い女の子とその子に腕を掴まれて座っている蒼井さんがいた。

え？ この子誰だ？

ていうかどうして蒼井さんが？

あれ？ もう大丈夫なのか？

いろんな疑問が脳裏を巡る。

紗那が少女の元に駆けるように近付いた。俺とゆうかも二人の元に向かう。

「紗那！」

「姉さん……」

蒼井さんがまだ白い顔で紗那を睨んだ。

「あなた、なにをやったの？ この子は誰?!」

「あ、あの、えっと、姉さん？」

その剣幕に紗那が急停止して後ずさる。少女がびくつと肩を揺らした。

「あ、あの、姉さん、美音が怖がるから、ちよつと落ち着いて……」

「なんですつてえ!」

「うわあ。ちよつとたんま」

紗那がたまらず俺たちを振り返る。いや、こっちに振られてもなあ。

俺がそう思っているとゆうかがすつと近寄り、蒼井さんの腕に掴まっている少女の前でしゃがみ込んだ。

「こんばんは」

少女がびくつと怯える。

「怖がらなくても、いいのよ。もう大丈夫」

ゆうかが少女の目線で優しく微笑む。その途端、少女の顔にホッとした表情が浮かんだ。

そして小さく嗚咽を漏らした。

「え？ うわ！ 美音、大丈夫か？ 泣くな、泣くなよ」

紗那がオロオロと取り乱す。俺はちよつと呆気にとられた。

こんな紗那を見るのは初めてだ。戦いの中でもこんなに取り乱した姿は見せたこと無いのに。（まあ、紗那は戦ではむしろ生き生きするやつだからな）

ゆうかが泣いている少女を抱きしめて「大丈夫よ」と優しい声をかける。

蒼井さんも少女の背中を撫でながら、顔を上げて鋭い視線を紗那に送った。

「ちゃんと説明しなさいね」

「あ、ああ……」

紗那は頭を掻きながらぶっきらぼうに頷いた。



トラブルは突然に - 5 -

「あのう、紗那のお姉さん？」

「ええ、そうよ」

「ああ、そうなんだ。でも、そんなに怖そうじゃないよ？」

「なっ！ 美音、おまえ……」

「怖そう？ 怖そうってなに、紗那？」

「うわあ〜」

紗那の説明を聞く前に泣き止んで落ち着いたのか、少女が俺たち相手にいろいろ話しかけてくる。最初の印象とは違って結構物怖じしない少女のようだ。

少女は小学校高学年ぐらい。薄手のチエニツクにジーンズ地のホットパンツ姿で、ごく普通の少女に見えた。

ひょっとしたらこれでも天上人なのだろうか？

まあ、ゆうかや蒼井さんを見てると、そんな気もしてくるんだけど。

ちなみにさつき蒼井さんがこの少女と一緒にいたのは、この子が寝ている部屋に入ってきたかららしい。

つまり紗那はリビングに不穏な空気を感じて、自分が見に行く間この子をゆうかのところに行かせようとした。

それが何処でゆうかと行き違ったのかわからないけれど、部屋に入ってきた少女に気がついた蒼井さんが驚いて俺たちのいるところに連れてきたわけだ。

少女は今度はソファの反対側に座るゆうかを振り返り、

「えっと、ゆうかお姉様？」

「ええ」

ゆうかが微笑む。少女はあどけない笑顔を浮かべて、ゆうかにぴとっと抱きついた。

「優しくて強いお姉様だと紗那が言っていました」

「そお……」

ゆづかが紗那を見ると、紗那は少し照れたような表情を浮かべた。少女がゆづかに抱きつきながら俺を振り返り、

「えっと、裕人お兄さん？」

「あ、ああ」

「ゆづか姉さんの尻に敷かれている旦那さんの？」

「ぶっ！」

「うわあ！ だからストップ、美音！」

思わず吹いちまった。紗那のやつ。言いたい放題だな。

俺が睨むと紗那は頭を抱えた。ゆづかが優しく微笑んで俺を制する。

まあ、いいさ。ある意味、その通りだもんな。

しかし、ほんとにこの少女は、なんなんだろう？

俺はそう思っていた。

はしゃいでいた少女はしばらくすると疲れたのか、電池が切れた様にコトリと眠ってしまった。

今はソファの上でタオルケットを掛けられてすやすやと眠っている。

その寝顔を見ながら紗那がなんだか心配そうに見ているのがすごく印象的だ。

「蒼井さんは、もう大丈夫なのか？」

少女の傍ら、少女を挟んでゆづかの反対側に座っている蒼井さんに声を掛ける。まだ顔色が悪い。

「え、ええ、裕人さん、もう、大丈夫です」

口ではそう言っているけれど、まだ相当しんどそうだ。

「なんなら蒼井さんもベッドで休んできていいよ」

「瑞穂？」

ゆづかも心配顔を向ける。

「いえ、大丈夫です。お姉様」

蒼井さんはきっぱり言うのと、反対側のソファに俺と並んで座っている紗那に鋭い目を向ける。

「さあ、紗那、なにが起こっているのか、ちゃんと説明しなさい」

「わかった……」

紗那は覚悟を決めたように話し出した。

「俺が天界から追われてるのは、その子??美音??を天界から連れ去ったからなんだ」

「連れ去った?!」

俺は驚いて声を上げた。

「どういうことなんだ?」

「それは……こいつを助けようと思って」

「助ける?」

「こいつが元に戻されないように」

「元に戻す?」

「なによ、それ?」

「どういうことです?」

みんなが口々に疑問を投げかける。

話が見えない。なんだ? どういうことだ?

「ちよつと待ってくれ。この子は天上人なのか?」

「いいや。美音は、天上人じゃない。ただの普通の人間だ。そう生まれただけなんだ」

紗那が眉根を寄せる。

「でもよ、俺もはつきりは知らねえけど、美音は天界の宝器の生まれ変わりなんだそうだ」

「え?」

「まあ!」

「……宝器?」

俺たちは顔を見合わせた。

なんだそれ？ 天界の宝器の生まれ変わり？ そんなことがあるのか？

「それは、本当なの？」

ゆうかが真剣な声で聞いた。

「さあ、俺にははつきりわからない。……でも、この一月、天の百官たちの間ではえらい騒ぎになってたんだ」

紗那がさらに詳しく説明する。

およそ一月前、天界にその少女は連れてこられた。そして宮殿に  
厳重な警護の下幽閉されたのだ。

少女はごく普通の地上の人間らしかった。けれど、おそらく無理矢理に天に連れてこられたのだろう。彼女の地上での記憶もあらかた失われていた。

それでも、警護役として選ばれたのは、地上に暮らしたことのあ  
る紗那のようなものたちだった。

少女は天界でただ一人、不安げに生活を送っていた。

紗那はその少女をひどくかわいそうに思った。

まだ年端もいかない少女。自分がどんな運命に巻き込まれたのか  
もわからない。

だから、少しでも少女の心が楽になるように、紗那は少女にいろ  
いろ話しかけた。

地上のこと、地上での生活、学校や町や人々のこと。

今、地上にいる自分の姉のこと。

その姉が敬愛する（そして自分も尊敬している）ゆうか姉さんと  
その伴侶の青年こと。

それらを、出来るだけおもしろ可笑しく話して聞かせた。

最初、わけもわからず怖がっていた少女が、やがて頬を綻ばせて  
笑うようになったとき、紗那は自分の胸に大きな感情が育っている  
ことを知った。



俺はこの少女を守ろう。

そう思った。

なぜ、この少女が天界に連れてこられたのか？

どうして幽閉されているのか？

天の百官が連日なにを議論しあっているのか？

そんなことは知らない。そんなことはどうでもよかった。

このかわいそうな少女を自分は守りたいと思った。

この子の笑顔がもっと見たいと思った。

この子を救ってあげたいと思った。

そして、つい先日、少女の処遇が決まった。その決定は……

少女を元の宝器に戻すというものだった。

は？ それって、どういうことだ？ と一瞬紗那は思った。

そして理解した。

それは、人間の少女の器を毀してその精髓に存在する宝器を取り出すということだ。

つまりは少女の死を意味する。

「だから俺は、こいつを奪って逃げたんだ！」

紗那が立ち上がって叫ぶように言った。

「美音を奪って警護の奴らを蹴散らして天界から逃げたんだ」

紗那が俺たちをぐるっと見回す。その瞳に強い意志が煌めく。

「俺は間違ってたか？ 姉さん、俺は？ ゆうか姉、裕人兄さん、

俺は……」

紗那がぐつと拳を握りしめる。

「間違ってるのか？」

紗那の問いに俺は答えた。

「いいや」

「いいえ」

ゆうかも優しく微笑む。

「あなたを……」

蒼井さんが紗那を真っ直ぐ見つめた。

「誇りに思うわ」

ドサツと倒れ込むように紗那がソファに腰掛けた。その目がわずかに光っているように見えた。

「おまえのやったことは正しい。いくら天界の宝器の生まれ変わりだからって、それはこの子には関係ないことだからな。それをこの子の命を奪うなんて、俺も絶対許せない」

胸の中にふつつつと怒りがわき上がってきた。

「いったい、天の奴らは人の命をなんだと思ってるんだ。自分たちの都合で簡単に奪っていい様なもんじゃないだろう！」

「それにしても、そんなひどい決定をするなんて、この子は……」

ゆづかがすやすや眠る少女をひどく深刻な表情で見つめた。そのまま心配そうに口を噤む。

蒼井さんが少女の額に浮かぶ寝汗を指で拭った。

その時。

ズンとした殺気が辺りを満たした。

紗那が弾かれたように立ち上がり、ゆうかが顔を上げる。

俺が辺りを見回したとき、いきなり部屋の中に影が浮かび上がった。

とつさに剣を取って立ち上がる。その時には白刃が迫っていた。

「くっ！」

よけつつゆうかや蒼井さんを守る位置に移動しようとする。けれどそれを妨げるようにまた影がわき上がる。

「くそ！」

紗那が同じように現れた男と剣を交え、ゆうかが少女を守るように腕を拡げていた。蒼井さんは立ち上がろうとして、崩れるように膝を折った。

「瑞穂！ 後ろに」

「でも……」

「美音ちゃんを守って」

部屋に現れた影は全部で六つ。あの時蒼井さんと対峙していた天上人だった。

「くそう！ またおまえたちか！」

一つ下がった位置にいる女性・稚陽姫わかひめが不敵に笑った。

「謀反人紗那とその娘、返してもらいましょう」

「断る！」

俺は即座に答える。

「では、そなたたちも天への謀反人と見なす」

その言葉に俺はゆうかを振り返った。

あの時、ゆうかは永遠ともいえる時を経て、ようやく今の幸せを手に入れた。

それは和解なんてもんじゃないけど、とりあえず天と折り合いを付けたわけで。それを、もう一度毀してしまうのは……

俺の一瞬の逡巡を、だが、ゆうかは頷くだけで消し去る。

その瞳が俺の背中を押した。

「紗那を見捨てるぐらいなら……この少女を見捨てるぐらいなら、俺は謀反人になろう。そう日輪の女王に告げればいい！」

「後悔するぞ」

稚陽姫の合図で男たちが動いた。

敵は六人。俺たちは四人（少女を入れれば五人）

だが、そのうち動けるのは俺と紗那とゆうかの三人。蒼井さんはまだ無理だ。

二人の男が同時に俺に打ち掛かってきた。

大男の大剣がずっしりと腕にひびく。なんとか押し返した次の瞬間、横合いから鋭い刃が伸びてくる。

「くっ！」

横っ飛びに跳んで交わした。

ちらつと見ると紗那も二人を相手に打ち合っている。残りの一人が俺たちの間を抜けてゆうかたちに迫る。

「行かせるか！」

追おうと思つた道を剣が阻んだ。

「くそ！」

キンと刃が交わって風が弾ける。敵がゆうかに迫る。

「ゆうか！」

俺は叫んだ。ゆうかは剣も持っていない。

けれど掌を差し出したゆうかの周りに光の粉が現れた。

光がまるで縄のように網を作る。男の打ち下ろした刃を阻んだ。

「なに?!」

打ち掛かった男が驚愕の声を上げる。そのままゆうかの身体が白く輝き出す。

「うぐ」

男たちの動きが鈍った。

「ゆうか姉さん、助かったぜ」

紗那が動きの鈍った男の一人を蹴り上げる。俺も一步下がって間合いを取った。

「夕凧姫」

稚陽姫が一步前に出る。

「あなたのお相手はわたしがいたしましょう」

その瞬間、稚陽姫の周りに赤い光が乱れ飛んだ。男たちの動きが回復する。

ゆうかの力を相殺したのか？

ゆうかが軽く眉をひそめ、前に出た。

「稚陽姫、こんなところでわたしと貴女が争えば、ただでは済まなくなりますよ」

「おもしろい。一度叔母様とは力比べをしてみたかったです」

「わかひ……」

「いきますよ」

稚陽姫の周りで赤い光が渦を巻いた。その渦がゆうか目掛けて襲いかかる。

ゆうかの周りに再び白い光の網が展開する。

二つがぶつかって弾け飛んだ。

その間、俺は再び二人の男たちに押し込められていた。

「くそう！」

男たちの連携にじりじり下からされる。ゆうかや蒼井さんから引き離される。

くそう！ どけよ！

俺は刀身に気を込めた。白い光が伸びる。俺に迫り来る男の剣を弾いた。

「でや！」

渾身の力で打ち下ろした。相手が横っ飛びするのを追いかけて剣

を薙ぐ。手応えはあった。

「ぐはっ」

一人が床に転がる。よし！

その時、キンと甲高い音がした。

「くうっ！」

蒼井さんの呻き声。

「蒼井さん！」

「姉ちゃん！」

二人を相手にしている紗那もチラツと振り返る。

いつの間にか、さつき紗那が蹴散らした男が蒼井さんに斬りかかっていた。

蒼井さんが少女を片手に抱えて、もう一方の手に持った剣で男の剣を受け止めている。その額が苦痛に歪む。

「瑞穂！」

「姫御子様、あなたの相手はわたしですよ」

稚陽姫が蒼井さんを助けに行こうとするゆうかを阻むように、腰から引き抜いた剣を背後から突き出す。

「ゆうか、あぶない！」

俺は蒼井さんを助けに行こうとして、とっさに方向転換。そのままゆうかの身体を掴んだ。その時？

ものすごい突風が吹いた。

「うわあ！」

「きゃあ！」

「なんだ！」

ゆうかと二人して床にたたきつけられる。俺はゆうかを抱えたまま背中をしこたま打った。

痛ってー！　なんだ？　なにが起こったんだ？

抱えているゆうかが顔を上げる。

「裕人さん」

「大丈夫か？」

「はい、ありがとうございます」

ゆづかは一瞬微笑んで、それから後ろを振り返った。俺も部屋を見渡す。

部屋の中はひどい惨状だ。家具がぐちゃぐちゃに乱れ飛んで埃が舞っている。

「なにがあつたんだ？」

二人して立ち上がるうとしたとき、誰かが瓦礫の中に立っていた。

「なっ！ おまえは！」

「小僧、また会ったな」

「風伯！」

ひげ面の見覚えある男が少女を小脇に抱えて立っていた。その傍に蒼井さんが倒れ伏している。

「瑞穂！」

「蒼井さん！」

「美音！」

紗那も吹き飛ばされたのか部屋の壁近くで立ち上がった。

「くそう。二段構えだったのか？」

天界の兵たちはおとりで、風伯たちが別働隊だったのか。そう思った。その時、

「風伯、貴様！」

同じように壁際に飛ばされたのだろう稚陽姫が立ち上がって風伯を睨んだ。さつと剣を構える。

「え？ なんだ？」

一瞬なにが起こったのかわからなかった。

「禁軍総帥稚陽姫殿には、お礼を申しますぞ。よくぞ夕風姫さまとその小僧を引きつけていただいたて」

「なにをぬけぬけと申すのだ、風伯。その娘を返しなさい。そなたの暗躍、女王はとうに知っておられるのだ」

「あははは。出来ませぬな。これは天の意志なのだ。あなたは知らないでしょうがな？」

「なに？」

稚陽姫が眉根を寄せる。

「どういうことだ？」

「そのうちわかりましょう」

二人の会話を俺は呆然と聞いていた。

なにがなんだかわからない。こいつら味方同士じゃないのか？

どうなってるんだ？

その時、

「あ？ え？ なに？」

風伯に抱えられていた美音が意識を取り戻した。辺りを見回してその表情が驚きからすぐに恐怖に変わる。

「あ、あ、いや！ これ、なに！ やだ！」

少女がバタバタと暴れ出す。

「ああ、うるさくなってきたので、わたしはそろそろおいとましよう」

風伯がにやりと笑う。

「美音！」

その声に少女は紗那を見つけ叫んだ。

「紗那！ 助けて！」

「おう、今行く！」

「紗那、待つて！」

紗那が飛び出すのと、後方から赤い光が風伯めがけて飛んだのがほぼ同時だった。

光の軌跡上に紗那の身体が躍った。

「くっ、あぶない！」

ゆうかが光の網を放ち、俺が剣を伸ばして飛び込もうとしたとき、赤い光の槍が紗那を切り裂いた。

「ぐわっ！」



紗那が床に転がる。光が行路をそれて風伯の脇を抜けていった。

「バカな！ 最後まで邪魔だてするのか」

「ふははは。今回の運はわたしのものだ」

風伯の身体が風を纏う。空間がユラリと揺れて影が消えていく。

「紗那――！」

少女の悲痛な叫びも消えていく。

「風伯、待て！」

「逃げるな！」

稚陽姫と俺は同時に叫んでいた。

俺は倒れた紗那や蒼井さんに駆け寄ろうとして、けれど、二人の男たちの繰り出す剣に足止めされた。

稚陽姫が悔しそうに風伯の消えた後を見つめ、それから、

「引つ立てるのだ」

男たちに命じた。

倒れている紗那が男の一人に抱えられる。

「紗那！」

もう一人が蒼井さんに近付く。

「瑞穂！」

ゆづかの身体が再び輝き出す。男たちの動きが鈍った。

今だ！

「でや！」

俺は身体ごと体当たりする覚悟で目の前の大男を蹴散らした。

蒼井さんの傍にたどり着く。剣を構えた。

稚陽姫が舌打ちする。

「まあ、いいでしょう。あの娘を取られた今となってはもはやその娘は無用。引き上げるぞ」

男たちが無言で頷く。

「待て！ 紗那を置いていけ！」

俺の言葉も虚しく、来たとき同様、彼らは一瞬にして消えていっ

た。

後には床に倒れ伏した蒼井さんと、深刻な表情で奴らの去った後を見つめるゆうか、そして、いったい全体なにが起こったのか、まだ混乱したままの俺が残っているだけだった。

くそう！　こんなの最悪だ！

### 続3章―天の意志 - 1 -

めちゃくちゃになったリビングの片付けはひとまず置いて、俺たちは蒼井さんをもう一度ゆうかのベッドに休ませた。

部屋の中二人で顔を見合わせる。ため息しか出なかった。空気が重苦しい。いろんなことが脳裏をよぎる。

これからどうしたらいいんだろう？

掠われた美音のことは？

連れ去られた紗那のことは？

蒼井さんも心配だし。

稚陽姫と風伯の敵対も訳がわからない。

いったいなにが起こっていると言っただろう？

ゆうかも真剣な表情でさっきから何事か考えている。

残された俺たちはこれからなにをすればいいんだ？

まさか、全てを無かったことにするなんてのは、出来ない相談だ。紗那が語った話を聞いてしまった以上、そんなこと出来るわけがない。

それならば……俺たちがすべきことはわかりきってる。

紗那を助け出し美音を助け出し救うこと。

だが、その方法は？

ここにいるのはゆうかと俺と蒼井さん。でも蒼井さんはこんな状態だ。

まえにゆうかを取り戻しに天上に乗り込んだときは三人だった。今度は二人で……やれるか？ でも、やるしかない！

「ゆうか」

「裕人さん」

二人同時に話しかけていた。たぶん同じことを考えていたんだろう

う。

「紗那と美音を取り返そう」

「ええ」

ゆうかが微笑む。俺はそれに勇気づけられる。

「まず、居場所のわかつてる紗那からだ。天と戦うぞ」

「裕人さん、わたしは……戦おうとは思いません」

「え？」

ゆうかの言葉に首を捻った。

戦わない？　じゃあ、どうするんだ？

ゆうかが強い眼差しを俺に向ける。それはゆうかの決意の強さだ。

「じゃあ、どうする？」

「わたしは、お姉様に会おうと思うのです」

「日輪の女王に？」

「ええ」

「でも、それで、紗那を取り戻せるのか？」

「……わたしにも確信はありません。ですが、これは明らかに異常な出来事なのです。禁軍総帥である稚陽姫が自ら地上まで追いかけて、風伯がそれを横取りする。こんなこと、わたしの知る限り、今まで一度も起こったことのないことです」

「そうなのか？」

「ええ。ですから、なにが起こっているのか？　どうしてこんなことになっているのか？　ちゃんとお姉様に問いただしたいと思うのです。その上で……」

ゆうかは眼差しを強めた。

「納得できなければ、納得できるようにしてもらいましょう」

そう言くと、ゆうかはにこりと笑顔を見せた。今まで見たこともない不敵な笑みだ。

「ゆうか、おまえ……」

少し驚きながら俺は答える。

「よし、やろう！　じゃあ、正々堂々正面から突撃だ」

「はい」

ゆうかの力強い声。それに重なるように別の声が聞こえた。

「わたしも行きます」

「え？」

「……瑞穂」

振り返るとベッドから顔を上げて蒼井さんがこちらを見ていた。その眼差しに強い意志が宿っている。でも、まだ顔色は真っ青だ。

「蒼井さんは待ってた方がいいよ」

「いいえ。わたしも行きます。掴まっただのは紗那なのです。そしてあの子が助け出した少女。だから……わたしも行きます」

きつぱりと強い口調で蒼井さんが宣言する。

俺はゆうかと顔を見合わせた。ゆうかがふつと息を吐く。

「わかりました」

「ゆうか？」

「瑞穂も一緒に行きましょう」

「いいのか？」

ゆうかは軽く微笑んで、

「たぶん私たちがなんと言っても瑞穂は天界に来るのでしょうか？」

蒼井さんが硬い表情で頷いた。

「わかっていますよ。それなら、わたしや裕人さんと一緒の方がずっといいです」

「ゆうかお姉様……」

「一緒に行きましょう、瑞穂」

「はい……ありがとう、ございます」

蒼井さんがベッドの中で頭を下げる。ゆうかが俺にいいでしょう？ と聞いた。

「ああ。わかった。じゃあ、そう言うことで……みんなで行こう」

「はい」

それで俺の二度目の天上界行きが決まった。

「本当はダメなんですけどね」

そう言いながらゆうかが掌をパチンと合わせる。合わせた手の間からキラキラと光が漏れ出してきて、ゆうかがさつと腕を拡げると離れた掌の間に光の軌跡が広がった。

その光の中からなにかが飛び出してくる。夜空に向かって長く伸びた。

「うわあ！」

初めて見る！

俺は感嘆の声を上げて空を見上げた。

夜空に浮かぶように現れたのは長大な身体を悠々と浮かせた生き物。伝説の龍。神話の生き物だった。

「あの子に乗せてもらいましょ」

ゆうかがその龍を見上げて俺たちに告げた。

天界に向かうのに前回は天馬に跨っていったのだが、今回、そんなものはいなかった。いや、たといたとしても、俺は馬を走らせられない。

ゆうかや蒼井さんは乗れるのだろうけれど、今の蒼井さんを一人で天馬に乗せるわけにもいかない。そうすると一頭に三人で乗っていかないと無理だった。

それならと言ってゆうかが提案したのが龍だった。

「本当は地上に呼び出したりするのはイケないんですけど」

そう、ゆうかは言ったが、この際仕方ない。まず天上に行けなきゃ始まらないんだ。

俺たちは龍の背に乗り込んだ。俺とゆうかでまだ体調のやばい蒼井さんを挟んで掴んだ。

三人ともなぜか制服。だって一応これは正式な礼服代わりにいけるだろう？

俺たちは天上の百官に正式にまみえようというのだから。

「行きます」

「ああ、やってくれ」

ゆづかの合図で龍が動き出す。長い胴体が揺れるように波打って地上を離れた。

待ってるよ、紗那。今、助けに行つてやるからな。

遠くなる地上の灯りを眼下に見ながら俺は闘志を沸き立たせていた。

白い雲の彼方に天上界はある。

普段どうやって人の目から隠されてるのか、俺には全然分らないが……俺たちを乗せた龍が遙か高みから近づいた。

前に来た時はゆづかの庵があるひなびた場所に降りたが、今度は違った。眼下に壮麗な建物が広がっていた。

と言っても近代高層建築の類ではなく、一見木造のけれど色とりどりの華やかな屋根瓦を持つ建物がいくつも建ち並び、屋根のある渡り廊下で繋がっている。

確か昔旅行で行った京都の大きな寺やなんかでこんな感じじゃなかったつけ？

「降ります」

ゆづかの言葉に龍が急速に降下する。

「うわお」

ゆづかの髪が舞い上がる。蒼井さんが身体を緊張させる。

そういや、前の時もこんなだったなと、ジェットコースター気分を味わいながら思い出した。

見る間に壮麗な建物が近付いて来る。その中の一つ、広い庭園を持つ建物の真正面に龍は降りたった。

俺たちは滑るように龍の背中から降りた。ゆづかが龍の長い背を何度か撫でる。そのまま龍は飛び去っていった。

「ここは？」

俺は周りを見渡した。

目の前に見上げるほど高い建物。降りた広大な庭の後方には池（なぜか虹色に水が光っている）や丸い橋、小さな渡殿があちこちに配されている。



「百官の集う場所」

「え？」

ゆづかが答える。

「いわば天上の御所です」

その時ばらばらと慌てたように太刀を帯びた男たちが建物の渡り廊下を駆けてやってきた。左右からきた数十人の兵が俺たちを離れた距離で取り囲む。

皆、太刀を抜いて俺たちに向けてかざした。俺も持ってきた剣に手を掛ける。

「裕人さん、待って」

「ああ、分かってる」

俺たちは戦いに来たわけじゃないからな。

それでも、あっちが掛かってきたら火の粉は振り払わないとな。

俺は男たちの動きをじつと注視した。けれど彼らはそれ以上近づくつもりはないのか、その場でじつと構えを崩さない。

その時、背中にコッソンとなにかが当たった。

「うん？」

「あ、ごめんなさい」

蒼井さんが苦しそうに息を吐いていた。立っているのが辛そうだ。

「大丈夫？ 俺に掴まっていいよ」

「あ、大丈夫……」

蒼井さんの身体がふらつと揺れる。おれは思わず支えた。

「……すみません」

「いいって」

その間に誰かが渡り廊下をやってきた。

煌びやかな服装の武將たちを引き連れてやってきたのは……

「稚陽姫」

りりしい戦闘服姿の女將軍だった。

「これはこれは夕風姫さま……と、そのお連れの方々。天界になに用があつて来られました？」

「なんだと！」

皮肉たつぷりなその言い方に頭に血が昇る。

「紗那を返してもらいに来ただけです」

ゆづかの言葉に稚陽姫が嗤った。

「謀反人を取り戻しに？　できるわけがないでしょう？」

「紗那は謀反人なんかじゃない！」

俺は思わず剣を抜きそうになった。さやから光が迸る。

「裕人さん、ダメです」

「うつ……すまん」

ゆづかの制止によりやく押さえる。

「どうした？　来ないのか？」

稚陽姫が嘲るような視線を向ける。けれどゆづかは凜と声を上げた。

「私たちは争いに来たものではありません。紗那の謀反のことをお姉様？？天上を司る日輪女王に尋ねに来たのです」

「そのようなこと、今更地上に降られた姫御子にはできぬことです  
よう」

「いいえ。かつて地上の司を仰せつかったものとして、地上に少女に関わる今回のこと、わたしには見過ごすことはできません」

「笑止です。叔母上」

稚陽姫が目を細める。

「もはやその事実は何んの頼みにもならない。我が母女王も、あなたたちに会われはしないでしよう。疾く地上にお去りなさい。そうすれば、今回のこと不問にします。わたしはそうそうあなた方にかまっなどいられないのです」

「そんなことできるもんか！」

俺は稚陽姫を睨んだ。

「では、あなたたちを捕らえるまで」

その言葉に稚陽姫の周りの武将たちがさっと殺気を露わにした。

くそう！ これじゃまずいな。

俺はゆうかの腕に軽く触れた。

どうする？ 強行突破するか？

でもゆうかは首を横に振った。再びゆうかの透き通るような凜とした声が響いた。

「お姉様。日輪の女王さま。聞いていらっしやるのでしょうか？」

ほんの暫くの静寂。それからどこからともなく声が漂った。

「いかにも、聞いていますよ、夕風」  
はっ？

俺はきよろきよろと辺りを見回す。どこにも女王の影は見えない。それでもゆうかはかまわず続けた。

「では、今回のこと、私たちに納得のいくお話をお聞かせください。さもなくば、紗那を解放してください」

女王は少し思案したようだった。しばらくして

「いいでしょう。では、百官の前であなたたちの考えを奏上してみるのがいい」

「分かりました」

ゆうかがどこからともなく聞こえる女王の言葉に頭を下げた。

「稚陽姫」

「はっ！」

続いて響いた女王の声に稚陽姫がハツとして答える。その表情は少し悔しそうに見えた。

「そのものたちを案内あないしなさい」

「ですが、女王……」

「よいのです」

「……分かりました」

稚陽姫は軽く頭を下げると俺たちに向き直る。

「女王の仰せならば、付いて来なさい。ただし、殿上で武器の携帯は認められない。差し出しなさい」

「なに！」

さすがにそれは危険が大きすぎると思った。周りを敵に囲まれて武器もなく向かうなんて。もし打ってこられたら……. だけど

「裕人さん、大丈夫です」

ゆづかが普段どおりの笑みを俺に向けた。俺の緊張がふっと解ける。

そうだな。戦いに来たわけじゃなかったんだよな。

俺は近寄ってきた兵に剣を渡した。蒼井さんも杖代わりにしていた剣を渡す。俺は改めて彼女のふらつく身体を支えた。

「瑞穂、いけますか？」

「はい、ゆづかさん。裕人さんには申し訳ないですが」

「では、行きましょう」

俺たちは周りを兵に囲まれるように廊下を歩いていった。

その部屋の前で全ての兵が引き返した。

ただ一人稚陽姫だけが俺たちを先導して入っていく。

ただっ広い大きな部屋の左右に煌びやかな服を身につけたたくさん  
の天上人が座っていた。

その真ん中を俺たちは歩いていった。

全く場違いな高校の制服姿の俺たち。ゆづかの短いスカートが風  
もないのに翻る。

ざわざわとした周りのささやきが聞こえた。

「あれが夕凧の姫御子……」

「長らく庵に籠もられておいでだったが」

「初めてお姿を拝見するが、あれは……どここの衣装か？」

「ちよつと扇情的に過ぎませぬか？」

「それよりも、あの後ろに続く男、例の……」

「ああ、あれがな……」

「ええ、あれが……」

「ほう、ほう、あれがか……」

なんかうつとおしい。

こそこそ言わんでくれと言いたくなってきた。

なんか高校でいつも周りから向けられるのと同じ視線を感じる。

どうせ、俺は天上でも嫌われ者だよ。まあ、いいか。

蒼井さんを支えながらなんだかたつぷり百メートルは歩いた気がする。  
する。

先導していた稚陽姫がすつと道を避けた。

正面に一段高い壇上、白い御簾が掛かっている。その御簾の右側に  
こちらを向いて稚陽姫が立った。

左側にはやはり俺たちを睨むようにして男が立っている。白髪のひげを生やしたかなり年取った感じのその男は、けれど鋭い眼光を俺たちに向けていた。あからさまな敵意を感じる。

誰なんだろう？

ゆづかに尋ねようとした時、御簾の中から声が響いた。

「夕凧と初雷土王、しばらくですね」

「なんだか知らないけど、その呼び方やめてくれないか？　俺は矢上裕人だ」

俺は思わず言っていた。

「こら！　殿上で直答はできぬぞ！」

「は？」

髭面の男が声を怒らせた。

なんだ？　なに言ってるんだ、こいつ？

「よい、老陽翁<sup>ろうやういっとう</sup>。彼らに直答を許します」

「しかし、女王……」

「よいのです」

「は……」

老陽翁と呼ばれた男が忌々しげに口を窄めた。

「我が姉たる日輪の女王にお尋ねいたします」

ゆづかが凜とした声を上げた。部屋の中が静まりかえる。

「天上においては罪もなき地上の少女を連れ去り、その天命を奪いし事を決定したと聞きました。それは本当ですか？」

「いかにも」

女王の感情のない平坦な声が返った。

「なぜ、そのようなことを？」

「あのものは地上にあつてはならぬのです」

「なにが問題なのでしょう？」

「あのものの中にあるものが危険なのだ」

「それはいったい何なのですか？」

女王が少し逡巡したようだった。

「……それは、詳しくは言えぬ」  
「なぜです？」

ゆづかの厳しい口調。

対峙した女王がふつとなにかを弛めた気がした。

「のう、夕風」

「はい？」

「そなた覚えておるか？」

「なんのことでしょう？」

「四宝のことを？」

「四宝？ …… あっ」

ゆづかが驚いたように目を見開く。

「まさか！ あれは……」

「ゆづか、なに？」

俺がそう尋ねた時、御簾の傍らの老陽翁が口を挟んだ。

「そちら、あれを取り戻すことを妨げたそっじゃな」

「なっ！」

なにをいつてるんだ？

「稚陽姫があれを回収するのをじゃまだでいたし、あまつさえ、他の者に奪われたそうではないか」

あれ？ 回収だと？

こいつ、美音のことをなんて言いやがるんだ！

「それは、そっちのせいだろうが！」

「なにを申すか。元はと言えば、その方がそもそも元凶じゃろう」

「は？ なんのことだ？」

「おまえが、夕風の姫御子さまを誑かし、天上から連れ出したのがそもそも間違いなのじゃ」

なにを言ってるんだ！ と思った。

俺がゆづかを誑かしただって？

寝言はねてから言え！

と怒鳴ってやろうとしたとき、ゆうかが叫んだ。

「やめてください、老陽翁！ それ以上言うとわたしが許しません」  
ゆうかの髪がふわりとはためく。まるで闘気のように身体が薄く  
光を纏った。

「愚かな。ここで戦おうというのか？」

御簾の右側にいた稚陽姫の周りを赤い光が飛びかい出す。

部屋の中が急に騒がしくなった。

俺はゆうかを守るために前に出ようとした。

老陽翁がじりつと後ずさる。

「やはり、こやつら、天に弓引くつもりか。む、謀反人だ。引っ捕  
らえるのだ！」

その声に部屋中がいきなり乱れた。

ばたばたと走り出すもの。

叫声を上げて逃げていく天上人。

代わりに入ってくる天兵。

やばい！ と思った。

どうしよう？ 突破して逃げるか？

でも、紗那を助け出す目的が果たせてない。

このまま突破すれば紗那を見つけにいけるのか？

俺は逡巡してゆうかを見た。

けれどゆうかはさつき見せた闘気をすでに消し去っていた。周りの  
混乱にもかかわらず、真っ直ぐ目の前の御簾を見つめていた。ま  
るで見えないその中を貫くようにじっと見つめている。

そう言えば、さつきから女王の声が消えたなと思った。

「ゆうか、どうする？」

集まってきた天兵と、剣を向け油断なく構える稚陽姫を交互に見  
やりながら尋ねる。

「……わかりました。お待ちしていますわ」

「え？ なに？」



ゆづかの小さなつぶやきを聞いた気がした。

「あ、いいえ、裕人さん」

ゆづかの表情に微笑みが浮かぶ。こんな時なのにふっと緊張が解けた。

「こいつら蹴散らして囲みを突破するか？」

ゆづかは俺と蒼井さんの顔を見回し、

「いいえ」

「じゃあ？」

「捕まりましょう」

「え？ …… はい？」

驚く俺にゆづかは静かな笑顔を見せたのだった。

「ああ、紗那！」

「へ？ 裕人兄さん？ え？ 姉さん？ …… ゆうか姉さんまで！」  
薄暗い部屋の中で紗那が驚いたように立ち上がった。

俺たちは後ろの兵に急かされてその部屋に入る。格子の入った、  
いわゆる座敷牢ってやつだ。

殿上で天兵たちに囲まれた俺たちは、おとなしく彼らに捕まった。  
抵抗をしなかった俺たちは、老陽翁が喧しく喚き立てたにもか  
わらず、女王の命で手枷もされずこの部屋に連れてこられた。  
入ってみたら、紗那が閉じ込められていたわけだ。

「元気だったか、紗那？」

「俺は、いや、えっと、平気だけど……… なんで、みんなで？」

「あなたを助けに来たのよ」

蒼井さんが弟に言う。

「は？ それで、みんなして捕まったのか？」

「まあ、そうなんだが………」

「はあ？ ちよっと兄さん、なに間抜けなことしてんだよ！」

「いや、すまん」

「すまんって、あの……… なんだよそれ！」

紗那がハアとため息を吐いた。それから

「それよりも、美音は？ 美音はどうなったんだ？」

「すまん。それもまだ分からないんだ」

「はあ………」

紗那はがつくりと肩を落とす。

「なんだよ、みんな、そろって……… はあ、やっぱり俺がいないとダメか」

「紗那、なんてことなの!」

「だってよ、姉さん、その通りじゃんか」

「違います!」

そんな姉弟げんかのような会話にゆうかが声を掛ける。

「ごめんなさいね、紗那」

「あ、ゆうか姉さんのせいじゃないから」

「なにそれ?」

「いいんだよ」

再び始まる姉弟げんかを離れて、俺はゆうかに聞きたいことがあった。

「ゆうか、ちょっといいか?」

「はい」

「さっきの話、俺にも分かるように教えてくれ」

さつき女王がゆうかに尋ねた言葉。四宝がなんとかを聞いたとき、ゆうかは驚いた顔をしていた。

あれは、どういう事だったんだ?

ゆうかが俺に瞳を向ける。その瞳がわずかに揺れた。

「裕人さん、これから話すこと、落ち着いて聞いてくださいますか?」

「あ? ああ。わかった」

「紗那、あなたも聞いて」

口喧嘩みたいな事を言い合っていた紗那と蒼井さんが慌てたように口をつぐんでゆうかを見た。

「なぜ、天があのような決を下したのか、わたしには少しだけ分かった気がします」

「なんなんだ? それは?」

「お姉様、さつき四宝って……なんなんですか?」

「ん? なんだよ?」

紗那も身を乗り出してくる。

ゆうかが静かに話し出した。

「四宝とは、その名の通り四つの宝、すなわち四つの神器のことです。それは、鏡、剣、玉、鐸の四つですが、そのうち最後の鐸は失われていました」

「そんな話、聞いたことないよ」

紗那が首を傾げた。蒼井さんも頷く。むしろ俺の方がどこかで聞いた話だと思った。

「地上では、三種の神器っていうのはあるけど……」

「裕人さん、そうです。最初の三つはそれなのです」

「そうなのか？」

「ええ」

「じゃあ、四つ目が？」

「ええ。それが美音ちゃんに宿っているようです」

「そうなのか……でも、そんなものが、なぜ？」

「さあ、わたしにもそこまでは分かりません」

「でも、それがどうして美音の命を奪ってまで取り出さなきゃいけないんだ？」

「それは……四宝は途方もない力を秘めているのです」

ゆうかは言う。

元々四宝は遙かな昔、まだゆうかや日輪の女王たちが生まれるさ  
らに前に最初の天上人（つまりはじめの神たち）によって造形され  
たものなのだ。

それいわば原初の気の固まり。

持つべきものが持てば世界を作り替えることもできる力を秘めて  
いる。

その力は地上に降りた神の末裔によって地を切り開くために用い  
られた。

それはゆうかが天に返り、裕人が輪廻に結びつけられた後の、け

れど遙か太古の話だ。

「四宝のうち、初めの三つはよく受け継がれ、それは後に天上に戻されました。今でも地上にはその伝説が生きています。けれど、四つ目の神器は、早くに失われたのです」

「そう、なのか？」

「それがなぜなのか、天上の庵に籠もっていたわたしは知りません。その力がどんなものなのかも、もはや知っているものは殆どいないでしょう。」

けれど、確かに、それが美音ちゃんに宿っているとしたら、そして誰かがそれを邪に扱おうとしたなら、すごく大変なことになる可能性があります」

ゆづかの話にみなが沈黙する。

脳裏に今知った事実が重くのし掛かる。それは、めちゃくちゃやつかいな宝だな。でも、

「……それと美音ちゃんの命とは、また別だろう？」

「ええ、裕人さんに言うとおりです」

「でも、それじゃあ、風伯が美音を奪って逃げたのは、なんかやばいことをしようとしてるのか？」

紗那が慌てて聞いた。

「その通りです」

その時、背後から重い声が聞こえた。

「お姉様」

「女王！」

部屋の格子の外に日輪の女王が立っていた。

女王は格子を開けて入ってくる。後ろに剣を掲げた稚陽姫が付いていた。

狭い部屋で今日初めて見る女王の顔が近い。その表情が少し疲れて見えた。

「お姉様、顔色が……」

「よい。大したことはない」

女王はそう言うと、俺たちをぐるりと見回した。俺は少し緊張する。

いったい何のために来たんだ？ 俺たちの処分を言い渡そうってか？

「お姉様、私たちをここに集めたのは、お話がありなのですね？」

「集めた？」

「ええ」

ゆづかが頷く。

「先ほどわたしにだけ囁かれたのです」

「あ……そう、だったのか」

あの時、ゆづかがなにか呟いたのを思い出した。女王の背後に控えている稚陽姫が軽く目を見開いて驚いている。

「そなたたちに……」

女王が話し出す。

「言いたいことはいくつもあります。夕風も王も、我らとそなたたちは互いのことに口出しせぬはずではなかったのか？ それをこのような面倒を起こすとは、約が違うのではないか？」

「お姉様、いえ、女王様。ですが、これは見過ごしにできるようなことではありません」

「そうだ。おまえたち天上人は人の命をなんだと思ってるんだ？ おまえたちの勝手にできると思っているのなら、それは間違いだ」

「女王に向かって口が過ぎるぞ」

稚陽姫が眉を逆立てる。

「本当のことだ。紗那のやったことは正しい。俺たちはあの子を助ける」

「あの子供の中に宿るものは危険なのだ」

「だからといって、あの子の命を奪うなんて、許せない」

「だまりなさい！ 天の意志は決したのです」

「そんなこと知るかよ」

俺は稚陽姫にかみつく。

「かつて、天の意志を変えて見せたのは、おまえたちじゃないか」俺の言葉にゆづかがわずかに目を伏せ、女王は眉を動かした。

「ここで言い争っていてもなんの益もない。今、かのものは奪われているのだ」

女王の言葉に俺たちは口を噤んだ。

そうだ。それが問題だ。

「だいたい、どうして風伯のやつがあの子を掠ったんだ？」

「お姉様？」

俺たちは疑問の顔を女王に向ける。女王の表情に苦悩の色が濃くなった。

「天上界に妖しげな動きがあるのです。その出所はまだ分からないけれど今回のことで、風伯がそれに荷担していることは分かりました」

「何をしようとしてるんだ？」

「それもまだはつきりとはわからぬ。けれど、おそらくは……」女王が思案気に告げる。

「天の支配の交代」

「支配の交代？」

「もしくは、天と地の再創造」

「は？　なんだ、それ？」

「それだけの力を、あの神器は秘めているのだ」

俺は呆気にとられてゆづかを振り返る。ゆづかは深く頷いた。

「そんなのが、なんだかわかんないやつに奪われたんだとしたら…」

…

「天と地に大変なことが起きる……でしょう」

ゆづかが深刻な表情を浮かべる。

「そう、これは重大な事態なのです。だから、そなたたちには我々の邪魔をして欲しくない」

女王がきっぱりと言った。俺はちよつと躊躇する。

いや、だって、これは……けれどその時、

「俺が助け出す！」

紗那だった。

「紗那……」

蒼井さんが紗那を切なげに見た。

「俺が見つけ出して、絶対助け出してやる」

「ふん、できるものか」

稚陽姫が鼻で笑った。

「今、我々が天上界の総力で探している。おまえなどに見つけられるはずがない」

「ふふん。それが違うんだな」

紗那がたちまち相手を挑発するように言う。

「まあ、天界の力なんて要するに遠見のできるやつに探させてるだけだろう？　それじゃあ、いつまで経っても見つかりっこないさ」

「な、なに！」

「俺なら確実に美音を見つけられるぜ」



「ほんとうなの？」

蒼井さんが疑わしそうに聞く。

「どこに掠われたか、当てはあるのか？」

俺の問いに紗那は片目を瞑って

「ま、そう言うこと」

胸を張った。

「それが真ならば、紗那よ、我らに協力しあのものを取り返すのじや」

「やだね」

「なに！」

稚陽姫が唸る。

「俺は謀反人だからな。天上界には協力しねえ」

紗那が子供のように舌を出した。

「おのれ、こいつ！」

「待ちなさい、稚陽姫」

女王がいきり立つ稚陽姫を制す。

「紗那童子よ、それではそなたが連れ出したかの娘を助けることはできぬぞ」

「天界も滅びるんだろう？」

紗那がふて腐れたようにそっぽを向く。睨む稚陽姫。

しばらく黙っていたゆうかが口を開いた。

「お姉様、ここはひとまず紗那を解放してくださいませんか。私たちが紗那とともに、あの子を取り戻します」

「そうして、再び連れ去ろうというのでしょうか？」

「稚陽姫！」

「わたしは納得いきませぬ。この者たちがおとなしく引き渡していれば、このような事態にはならなかったのです」

「もうよい」

「ですが……」

「よい」

女王が言った。

「われは天上に事を妨げるものがいると知っている。だから、この事はわたしからの提案じゃ。そちたちでかの娘を取り戻すがよい」

「女王！」

「ただし、そのまま連れ去ったり隠し去ったりしたならば、天は容赦せぬ」

「あの子をどうするつもりだ？」

「それは、再び協議しよう」

「女王、わたしは納得できません。この者たちにまかせてもし逃げられたら、やっかいです」

「なんだと！」

「わたしが……」

その時、蒼井さんが進み出た。

「わたしが人質としてここに留まりましょう」

「姉さん！」

「瑞穂……」

「それなら、問題ないでしょう？」

蒼井さんに俺は言った。

「そんなこと、蒼井さんがする必要ないよ。俺たちみんなで帰ろう」

「いえ、裕人さん、わたしは……今の状態では戦いで役に立つことできませんから。これで紗那が解放されるのなら、その方が良いでしょう。わたしは紗那の身代わりということで」

「蒼井さん」

「姉さん……」

「ほう……しかし、その人質、有効なのか？」

稚陽姫が問う。さつと血が昇った。

「ばかやろう！俺たちが彼女を見捨ててると思ってるのか？」

「ふん。……しかし、それだけでは不十分」

「なにが不足なんだ！」

「その戦い、わたしも参加する」

「は？」

「なんだ？」

俺と紗那が同時に声を上げた。

「そなたたちだけでは、心許ないと言っているのだ。それに……」

稚陽姫が薄く笑って俺を睨んだ。

なんだ？ あいかわらず感じ悪いな。

「それで、よろしいですか？」

女王が頷いた。

「瑞穂、ごめんね」

「いいえ。ゆうかお姉様」

蒼井さんが紗那に顔を向ける。

「いい、紗那。絶対美音ちゃんを助けるのよ」

「わかってらい」

紗那が子供のように鼻を鳴らした。

牢から出た俺たちは蒼井さんを一人残して天上を去った。ゆうかの後ろで天馬の背に揺られて地上に向かう。

俺たちを監視するために付いてくるんじゃないかと思った稚陽姫は来なかった。

まあ、俺たちは逃げも隠れもしないからな。

「じゃあ、兄さんたち、俺はちょっと確かめることがあるから」

地上に降りて天馬から降りた俺たちに紗那が馬上から言った。

「わかった。美音ちゃんを捜すんだな」

「ああ、どこに行ったか突き止める」

「紗那」

「うん？」

ゆうかの呼びかけに紗那が振り返る。

「美音ちゃんの居場所がわかってても、決して一人で行ってはいけませんよ。必ず私たちに知らせてください。いいですね？」

紗那は一瞬答えに詰まってから、

「ああ、わかってる」

なんだかゆうかに見透かされてた感じだな。まあ、これで無茶なことは出来ないだろう。

「あ、そうだ」

俺は自分のポケットから携帯を取り出すと、紗那に放った。

「持ってけよ。それで連絡くれ。相手はゆうかの携帯でいいから」

紗那は不思議そうに携帯を眺めていたが、

「わかった」

そう答えて手綱を引いた。たちまち天馬が飛び上がっていく。

朝日が昇る前の少し明るくなつた空に紗那の姿は消えていった。

ああ、とんでもなく長い一夜だったな。と俺は思った。

続4章―転校生って、はい？ - 1 -

「あー、えーと、ゆうか？」

「はい？」

「今日は、休んじまっちゃだめかな？」

「ダメです」

ゆうかがキツパリと言う。

「裕人さん。期末テストですよ」

「うぐ……」

朝の光が部屋に満ちる頃、俺はわずかな仮眠からゆうかに起こされた。

一時間も寝れたかなあ？

こんな状態で、しかも昨日はテスト勉強も出来なかったわけで、今日の試験を受ける意味があるんだろうか？

おとなしく追試を受けた方がいいんじゃないかという考えが脳裏に浮かぶ。

「さあ、早く早く」

ゆうかはそんなことまったく考えても見ないようで俺を布団から追い出した。

それにしてもゆうかだってほとんど寝てないのに大丈夫なのか？素直に感心するぞ。

ぱたぱたと制服のスカートを翻して部屋を出て行くゆうかがドアのところまで振り返る。

「裕人さん、今日は朝ご飯食べましょうね」

ちよっと頬を赤くしてそう言うゆうかにいっぺんで心が癒される。

あー、この笑顔は俺だけに向けられてるんだよなあ。

と思うと、なんだか脳天気にも勇気が湧いてくる。

「すぐ行くよ」

俺は元気よく立ち上がると、頭を振って眠気を吹き飛ばした。

ゆうかと学校の昇降口で分かれて教室に着くと、当然ながら蒼井さんの席は空席だ。

天上に残った彼女のことを思うと、こんなところでテストなんか受けてる場合じゃ無い気もするんだが。

けれど、今すぐに俺に出来ることはなにもないことも確かだ。天界がしゃにむになって探している美音を俺一人が加わったからといって、簡単に見つけられるとは思えない。

ここは当てがある紗那に任せるしかないだろう。

そんなことを考えていると、まだ予鈴前だというのにがらつと教室のドアが開いてクラス担任が入ってきた。

あれ？ テストの教科担任じゃないよな？

その登場にざわざわする生徒たちを見回して担任が告げる。

「突然だが、転校生だ」

「はあ？」

クラスみんなが面食らったような顔をする。そりゃそうだ。

こんな時期に転校生？ もうすぐ夏休みなのに？ へんなの。

そんな周りの声を聞きながら俺はイヤな予感がしていた。

担任に遅れて入ってきた転校生を見た途端、ガタンとイスを倒し

て俺は立ち上がっていた。

「な、なんでおまえがここに！」

それは……制服姿の稚陽姫だった。

俺の叫びに遅れること数瞬。一旦、静かになった教室が爆発するように歓声に包まれる。

「うわー！ 美人」

「すごい。背高い」

「きゃあー」

「うおー」

稚陽姫はすらりとした肢体を制服に包み、長い髪はやはりポニールに纏め、まるで剣士のような中性的な美貌を湛えている。

そりゃまあ、騒がれるだろうな。

「うげっ！」

後ろから首に腕が回った。

「矢上っち、もしかして、あの転校生とお知り合い？」

俺の首をホールドしながら桜井のやつが俺を睨む。

「いや、あの、えっと、実は……そうなんだが」

「ウオー！　なんで、おまえばかり！」

「あだ、あだだ……首絞めるな！　放せ、桜井?!」

俺は叫ぶしかなかった。

ひのみやわかひ

日ノ宮稚陽と紹介された稚陽姫はとりあえず空いていた蒼井さんの席について、いきなりのテストを受けることになった。

いや、テストなんか答えを書いているようには全然見えないわけだが（気になってテスト中チラチラと見たんだが、ずっと姿勢を正して前を見ていた）

なにしに來たんだ、ここへ？

そんな俺の疑問にお構いなく、休み時間になって興味津々のクラスメートたちが稚陽姫の周りに集まった。

「ねえねえ、日ノ宮さん、こんな時期に転校なんて、日ノ宮さん、どこから來たの？」

「わたしか？　わたしは、天上から來た」

それを聞いて、わーと俺の胸がひっくり返った。

オイオイ、なに言ってるんだよ！

「てんじよう？　それって、日本のどの辺？」

「真上だ」

「真上って？　真ん中っていうことかなあ？　じゃあ、長野あたり

にあるのかしら？」

「うわー、ナイス勘違い！ 俺は誰ともなしにそう呟く。

「ねえねえ、どうして転校になったの？ やっぱり、お父さんの仕事の関係？」

「いや、わたしの仕事のせいだ」

「え？ 日ノ宮さんお仕事してるの？ なになに？ もしかして芸能関係？」

「芸能関係？ というのはわからないが、わたしの任務は……」

「だー！ なに言おうとしてるんだよ、おまえ！」

俺は我慢できなくなつて怒鳴つていた。

「たたく。正体ばれるようなこと言おうとするんじゃない！」

「だいたいおまえなあ。なんでここにきたんだよ？」

稚陽姫はふつと不敵に笑う。

「もちろん、おまえを監視に」

「いや、別に俺たち逃げないし」

「まったく信用できないな」

なにを！

なんでそこまで言われなきゃいけないんだ？

「おまえは夕風姫さまをたらし込んだ悪党だからな」

「たらし込んだって……」

頭痛くなつてきた。

「そんなわけ無いだろう！」

「いや、そうに違いない！」

「どうして！」

「おまえなどが夕風姫さまと釣り合はずがないからだ！」

「うぐっ」

思わず言葉に詰まつちまつた。なんとなく痛いところを突かれた気がする。俺だつてちよつとは気にしてるんだよ。

「だがな、そんなことは百も承知の上で、誰がなんと言おうが、俺は、俺たちは、あの時、お互いを選び合ったんだ。生涯の伴侶とし



て。それを他の奴らにとにかく言われたくない。

「おまえの知ったことじゃないさ！」

「なに！」

稚陽姫がさつと立ち上がる。その全身から赤い闘気が揺らめいて見えた。

「バ、バカ！　こんなところで力使うな！」

俺は慌てて稚陽姫の腕を両側から押さえた。その瞬間。

「おおっ！」

周りで妙な歓声上がる。

「うん？」

なんだと顔を振ると、いつの間にやら俺たちの周りをギャラリ―が取り囲んでいる。

「え？　え？　なんだ？」

「いやあ、矢上っちが転校生といきなり口論始めたんで、みんな興味津々なんだよ」

桜井が丁寧に説明してくれた。

「うわあ！　なんでもない。なんでもないから、みんな忘れてくれ！」

俺は慌てて稚陽姫から手を放すと、怪訝な顔で周りを見ている彼女から離れて自分の席に戻った。

転校生って、はい？ - 2 -

それから俺は稚陽姫の行動に何度もハラハラさせられることになった。

だから、テスト中に勝手に席を立つな！

他の人を覗き込むな！

頼むから素性の疑われるような行動は取らないで欲しい。

俺はテストの終わった三時限目、ドツと疲れた気分で稚陽姫に言った。

「あのなあ、こっちに来るんなら、もう少し高校生ていうもんがどういうもんか調べてから来てくれよ」

「なにか問題でも？」

「大ありだ！」

俺はたまらず言った。

「授業中は席を立つな。テスト中は人の回答を見るな」

「なぜだ？」

「なぜって……」

「そついうもんなんだ」

「そつなのか？」

「ああ。それに、学校にいるんならちゃんとテストはやった方がいいぞ」

「ああ、それなら問題ない」

「どうしてだ？」

「四宝を見つけて取り返したら、わたしはここには用はない。すぐにいなくなる」

「まあ、それもそうか……」

「したがって、そのようなことおまえに言われる筋合いではない」

「うー、あいかわらず偉そうだな。」

「いや、それだけじゃなくてだな……」

俺の言葉に、まだなにか？ と取り付く島もない顔を向ける。

あー、どうすりゃいいんだろうな。こいつ？ なんていうか、全然世間知らずだ。

……て、当たり前か。こいつは天上人で日輪の女王の娘で禁軍総帥なんていうやつだからな。

それにしても、なんかならないのか。ハア。

俺がため息を漏らしたとき。

「裕人さん」

昨日と同じようにゆうかが教室のドアから顔を出した。俺と稚陽姫がやり合っているのを見て軽く目を見開く。

「稚陽姫……裕人さんのクラスに来たのですか？」

「ええ」

稚陽姫がぶつきらばうに答えた。

「監視しやすいですから」

「迷惑かけてませんか？」

「なっ！」

稚陽姫が焦ったような声を上げる。その頬が少し赤くなった。

それを見て俺は……なーんだ、と思った。

こいつ、実はわかってるんじゃないか？ 自分が少し変なことをしてるってことに。

へえ、そういう神経もあるんだ。なんだか、ちょっと笑える気がした。

「ここに一緒にいるのなら、稚陽姫」

「はい？」

「一緒にお昼に行きましょう」

「は？ わたしが？」

「ゆうか、こんなやつと……」

驚く俺たちにゆうかは軽やかに笑いかける。

「裕人さん、どうせ監視されるのなら、楽しくされた方がいいです  
し」

「は？」

「これからともに戦うのなら、稚陽姫のことをよくわかっておくこ  
とも必要です」

「えーと……」

すぐには返事が出来なかった。

こいつのことをわかっておく必要？ そうなのかな？

こいつは天界のお目付役だぜ。しかも、俺、すごく嫌われてる気  
がするんだが……

「それに、稚陽姫にも、裕人さんのことを知って欲しいのです」

「わたしは！」

稚陽姫が抗議の声を上げる。

「ダメよ、稚陽姫」

ゆうかが人差し指を立ててその言葉を封じる。

「さあ、行きましょう」

なぜかゆうかは楽しそうにそう言つと、俺たちの腕を両手で取っ  
て歩き出した。

「やっと買えましたあ」

ゆうかがトレーを持って俺と稚陽姫が座っているテーブルに戻っ  
てきた。トレーの上には三人分のハンバーガーとポテトにジュース。

「これでお安くなったんですよ」

ゆうかはニコニコと割りチラシの残りを見せながら席に着いた。

さつきから俺と稚陽姫は仏頂面で無言で座っていたわけだが。

「はい、裕人さん、これ」

「あ、ああ……」

ゆうかに渡されたハンバーガーを手を取った。

「稚陽姫のはこっちな」

「……かたじけない」

稚陽姫の仏頂面の言葉にゆうかはどういたしましてと軽く応じている。

それにしても、監視する方とされる方が一緒に飯を食うのって、なんだか間違ってるないか？

それにこいつは最終的に敵になるかも知れないのに。

そう思いながら俺は無言で、渡されたハンバーガーを頬ばった。

「どうですか、裕人さん？」

「え？」

「お味は？」

「あ、ああ、うまいよ」

「よかった」

ゆうかが嬉しそうに微笑む。そのやさしい笑顔に胸が鳴った。

「昨日裕人さん、食べたがってたのに、来れませんでしたからね」

ああ、それで……ゆうかが迷いなく俺たちをハンバーガーショップに連れてきたのはそのためだったんだ。

そんなことすっかり忘れていた。昨日からいろんな事がありすぎたからな。

俺の胸に暖かいものが流れ込む。ゆうかの優しさが俺の心を穏やかにする。

「ふん！」

軽く舌打ちをして稚陽姫は俺たちからそっぽを向くと、ハンバー

ガーにかぶりついた。なんというか性格がよく出た食べ方だな。

「稚陽姫」

「はい？ なんですか、夕風姫さま？」

稚陽姫はこちらも見ずにぶっきらぼうに答える。

「うーん、ここではね、ゆうかと呼んでくれると嬉しいんだけどな」

「それは……姫御子様のお頼みなら」

稚陽姫が渋々という感じでこちらを向く。

「おねがい」

「うつ」

ゆうかの言葉にいきなり稚陽姫が目丸くする。その頬が仄かに染まった。

「わ、わかりました……ゆうか様」

「ゆうかで」

「……は、はい」

「ありがとう」

ゆうかの笑顔に稚陽姫がもう一度そつぽを向いた。

「それにしても稚陽姫、わたしは嬉しいわ」

「はい？」

稚陽姫が振り返る。

「なんです？」

ゆうかは稚陽姫を眺めるように見て、

「あなたがそんな女の子らしい格好をするのをみるのは久しぶりだわ」

「あう！」

稚陽姫は今度ははっきりわかるほど頬を染めた。

「こ、これは、任務のため仕方なく……」

「うつん。よく似合ってるわよ」

「夕凧姫様！」

「ゆうかよ」

「うつ……ゆうか、さ……」

「大人になったあなたのこんな姿を見られてわたしは嬉しいのよ」

「それは……」

ゆうかが本当に嬉しそうな笑顔を稚陽姫に向ける。彼女は俯いて黙った。

そのやり取りを俺は呆気にとられて見つめていた。

へえ、稚陽姫のやつ、普段はゆうかには頭が上がらないんだ。

あの戦いの時の勇ましさは何処に行ったんだ？

なんか、変な感じだな。

それから、ゆうかに促され俺も稚陽姫もぼつぼつと会話に加わった。

でも当然話が弾んだりはしなかった。

食事を終わって俺たちは三人で店を後にした。

転校生って、はい？ - 3 -

「だから、なんで、ここなんだ？」

俺は頭を抱えながらゆうかに聞いた。ゆうかはにっこり微笑むと答える。

「楽しそうでしょう？」

ハンバーガーを食い終わった後、ゆうかが家に帰る前に寄りたところがあると言って俺たちを連れてきたのは、ゲームセンターだった。

いや、まあ、ゲームセンターはそれなりに楽しいところではあるんだが。

ゆうかと二人でも来たことがないこんなところに、なんでこんなやつと三人で？ 正直戸惑う。

なに考えてるんだ、ゆうか？

「これやりましょう」

ゆうかが前に立ったのは、ストリートファイタータイプの対戦ゲーム。

え？ これで戦えと？

「はい」

にっこりゆうかに微笑まれて俺は脱力する。ま、まあ、いいか。

「これは、なんだ？」

稚陽姫が変なものを見る目でゲーム画面を見ていた。あー、そりゃ、しらんだろうな。

「ゲームだよ。地上の遊び道具」

「ふむ」

「これは対戦ゲームっていつて、格闘戦で相手を倒すんだ」

「格闘？ 倒す？」



なんだか稚陽姫の瞳が急に輝きだした気がする。えーと……

「やりたいのか？」

「え？ あ……ああ」

稚陽姫が躊躇しながら頷いた。なんだか、さっきからこいつの印象、えらく変わってきたなあ。

「じゃあ、やり方教えてやるから席に着きな」

俺の言葉に稚陽姫が素直に席に着いた。その表情がなんだかわくわくしているように見えた。

「どうだ？ わたしの凄さを思い知ったか！」

「おー、すごい。二十人勝ち抜きはマジすごいぞ！」

俺とゆうかは稚陽姫が座るモニターの後ろで手を打った。

さすが天上人というか（関係ないか？）、武将というか（たぶんこっちは関係あるよな）、稚陽姫はボタン操作を覚えると最初の何回かは操作ミスで負けたが、コツを掴むと連戦連勝。相手の間合いを見事に見きって攻撃を加えた。

うーん、強い。

とはいえ、ゲームに勝って真剣にはしゃぐ稚陽姫の姿はなんだかすごく子供っぽかった。

やっぱり最初の印象とは大違いだ。こいつ、こんなふうにしなやかな表情も出来るんだな。なんだか別人だ。

「裕人さんも、対戦しないんですか？」

「俺か？」

ゆうかの言葉にさてどうしよう？ と思った。

「初雷士、いや、矢上裕人……わたしと勝負しろ」

稚陽姫が振り返ってやけに真剣な表情で俺に迫った。

俺はゆうかを顧みて、その笑顔に促されて頷いた。

「まだだ！ もう一勝負するぞ！」

「えー、まだやるのか？ いい加減あきらめたらどうだ？」

俺はモニター越しに稚陽姫を見る。真っ赤に顔を染めた稚陽姫がまるで獲物を見るように目を爛々と輝かしている。

うーん。どうしたもんか？

稚陽姫との対戦ゲームの勝敗は俺の圧勝だった。

まあ、中学時代ちよつとは腕に覚えのある俺にいくら天上人だってそう勝てるわけがないんだよな。ここら辺、亀の甲より年の功。経験勝ちってやつだ。

それにしても、稚陽姫の熱くなること。こいつホントに子供っぽいな。こんなやつだったんだ。

「俺、ちよつと飲みのもでも飲みたいから抜けるわ」

立ち上がって歩き出す。隣で俺たちの対戦を楽しそうに眺めていたゆうかがすつと付いてきた。

がたと缶ジュースを自販機で買いながら、俺は傍らのゆうかに聞いた。

「なあ、あいつって、あんなやつだったのか？」

「はい」

ゆうかは明るい声で答える。

「稚陽姫はホントは明るくて思いやりのあるいい子なんですよ」

「ふーん」

俺は半分飲んだジュースをゆうかに差し出して飲むかと聞いた。

ゆうかがそれを受け取って一口くくと飲んだ。

「ゆうかは、あいつと親しかったのか？」

「ええ。彼女が小さい頃から知ってます。よくわたしの庵に遊びに来てくれたものでした」

その頃の彼女はともゆうかに懐いていたらしい。

「それにしても、今度のこと、あいつ俺たちにきつくはないか？」

「そうですね……でも、たぶん本質は変わってないと思うのです」

「そうか？」

「ええ。なにか誤解があるのだと思います。あの子は、ちょっと頑固で思い込みが激しいところがあるので……」

ゆうかが困ったように眉根を寄せた。

「でも、責任感が強くて、今回のことも自分なりに最後まで責任を持とうと思っているのだと思います」

「ふん」

俺は稚陽姫に出会ってから今までの記憶を振り返ってみた。

たぶんその思い込みとやらは俺とゆうかのことなんだと思う。あいつにとつちや、俺がゆうかの伴侶になったことが許せないんだろうな。

ま、それは俺も譲れないから、仕方ないけどな。

「だから、裕人さん、稚陽姫をあまり悪く思わないでくださいね」

ゆうかがそう言って俺にジューズを返してくる。

「もったいいの？」

「はい」

俺は稚陽姫の思い込みの元をゆうかに言うのはやめておいた。

チラッとゲーム機のほうを見ると、また稚陽姫が誰かを相手に勝ち抜いているようだ。なかなか夢中になっているように見える。いや、けっこうマジみただけど。なんだか笑い声が漏れそうになった。

「さてと、もう一勝負してやるか」

俺がゲーム機に戻ろうとした時、ゆうかの携帯が柔らかなメロディを奏でた。

ゆうかが携帯を取り出して開く。いきなり声が聞こえた。

「これでいいのかなあ？ ゆうか姉さん聞こえてる？」

「紗那！」

ゆうかの表情が一気に引き締まった。

「やったー。繋がるじゃん！ やっほー！」

「紗那、どうしたの？」

「あー、みつけたよ。美音」

「本当なの？」

「ほんとうか？」

俺たちは同時に聞いた。

「わあ、兄さんもそこにいるのか？」

「ああ」

「じゃあ、俺行くから」

「はあ？」

「紗那、待ちなさい」

俺は呆氣に取られる。

「ちよつと、待った。今どこだ？ ていうか、美音ちゃんはどこで見つけたんだ？」

「うーん。待つなんてまどろっこしいことできないよ」

「こら！ 俺たちも行くからちゃんと場所教えろ！」

俺はゆうかの携帯に向かって叫んでいた。

「紗那！ 約束でしょう？」

ゆうかの声には有無をいわせない力がこもっている。

「あー、分かったよ。じゃあ、居場所分かるようにするから。でも、そんなに待てないからな。おれは。じゃあ！」

ぶつんと会話は切れた。

「あ、おい、待て！」

もう携帯はうんともすんとも言わない。

「あいっ……居場所はどしたんだよ！」

俺はゆうかと顔を見合わす。ゆうかも呆れたような困ったような表情をした。

その時、ふつとゆうかの手の上の携帯が光を発した。それは機械の元々のギミックなんかじゃなく、携帯の周りの空間自体が輝きだしたようだった。

「あれ？」

「まあ！」

見る間に光が一つに収束し、まるでレーザー光のように真っ直ぐに空間に伸びた。けれどその光はなにもない空間ですっと切れて見えなくなっている。まるで空間の裂け目に消えるように。

「これは……」

「道しるべです」

ゆづかが光の先を見つめながらいった。

「行きましょう、裕人さん」

「ああ」

そこで俺は思い出す。迷いはしなかった。

「稚陽姫も連れてな」

「はい」

ゆづかが微笑んだ。

続5章―四宝の鐔 - 1 -

「じゃあ、行きます」

「ああ」

ゆうかが俺の手を握る。

少し離れたところで立つ稚陽姫は不思議そうにゆうかの携帯を見つめている。

その携帯から伸びる光はあいかわらず唐突に空間の途中で切れていた。

俺たちはゲームセンターを出て人通りの少ない裏通りに移動した。すっかり格闘ゲームに夢中になっていた稚陽姫は、けれど紗那からの連絡があったことを告げると、すつと真剣な表情に戻った。そのギャップに改めて驚かされる。

こいつはいつもはこうやって素を隠して生きてるんじゃないだろうか？

そんなふうに思った。いや、まあ、俺がとやかく言うことじゃないけどな。

白い光が俺とゆうかの周りを覆い尽くす。いつもの異空間への移動。俺はまだ自分では出来ないが、移動自体にはそろそろ慣れた。白い闇の中に「道しるべ」の光がずっと伸びている。それを追って俺たちは歩いた。傍らを稚陽姫もやってきている。

白い道はどこまでも続いていた。光の帯が遙か彼方へと伸びている。

いったいどこまであるんだ？

俺がいつになったらたどり着くのか不安になった頃、白い光の中

に色の付いた輝きが混ざってきた。

「ゆうか、あれは？」

「あそこが出口のようです」

俺の身体に緊張が奔る。

この先になにが待っているのか？

いったい、どんなところなのか？

誰がいるのか？

俺たちは白い闇の外へ飛び出した。

「え？」

白い闇の外へ確かに降り立ったはずなのに、見渡す限り白い空間が広がっていた。二人して顔を見合わず。

「出たんだよな？」

「はい」

俺は首を傾げた。

「……霧、かな？」

「いえ、違います。これは……」

ゆうかが驚いたように辺りを見回す。

「なんなのだ、ここは？」

遅れて現れた稚陽姫が首を捻った。

あれ？ こんな光景どこかで……と不意に思った。

なんだっけ？ 前にも見たような気がする。

その時、白い世界の濃淡がサワサワと動いていった。本当に霧の

中のように思えた。けれどこれは

「……気か？」

「はい」

ゆうかが答える。

「これは気です。すごく濃密な。まるで遙か太古の大地にあったような」

「あつ……」

思い出した。いつか見た夢だ。

遙か昔、俺とゆうかが出会った頃。太古の気によって俺たちは命を生み出していた。その時の夢。確かにこんな濃い霧のように見えただ。でも……

「なぜ、今それが？」

「わかりません。もうこんな濃い気のある場所など、無いはずなのに……」

ゆづかの言葉を俺も稚陽姫も首を傾げて聞いた。  
その時???

「うわ！」

腹に響くような爆発音が響いた。

地面がかすかに揺れる。

これは！

「もしかして紗那!？」

音のする方を見やる。白い気の霧がもやもやと動いた。

「紗那！」

俺は大声で呼ばわった。

「兄さん、そっち気をつけて！」

「え？」

突然響く紗那の声！

その瞬間、白い気の中から巨大ななにかが突進してきた。

「うわっ！」

とつさにそばにいたゆうかを抱えて倒れ込む。稚陽姫がサッと跳び下がるのが目の端に見えた。

倒れ込んだ頭の上を熱い固まりが飛び越えていった。

「なんだ！」

影を追って振り返ると、身体を赤い炎で覆った猪のような生き物が牙をむいてこちらを睨んでいる。



「は？ 化け物？」

「あれは……火猪？」

俺の腕の中でゆうかが驚いた声を上げた。

「なんだよ、あれ？」

「たぶん、火猪……という天界の古い生物に似ています。でも、なんだか違うような気も……」

ゆうかが珍しく自信なげに首を捻った。その火猪の瞳が身体と同じように赤く燃えるように光っている。

「怒りで我を忘れているんだわ……裕人さん」

「うん？」

「ここはわたしにまかせてください」

前にゆうかが伝説の火の鳥を封じ込めたときのことを思い出す。こんな天上の生き物なら、ゆうかの敵じゃない。

二人して立ち上がるとした時、火猪が再び突進してきた。ゆうかが俺を庇うように前に出て両手を突き出す。

「おやめ」

ゆうかが諭すように声をかける。その声に火猪の勢いが……止まらなかった。

「えっ?!」

「うわ!」

あぶない!

もう一度ゆうかの身体を掴んで伏せた。けれど今度は火猪は頭を低くして突っ込んでくる。

やばい! と思った、その時、

「なにをしてる!」

稚陽姫がいつの間にか手にした剣を（どこから出したんだ?）一閃させた。

火猪の眉間が両断される。そのまま、もんどり打って倒れて動かなくなった。

ほつとして立ち上がった俺たちを稚陽姫は苦々しげな表情で見ると叫んだ。

「なにをしているのです、矢上裕人！　夕凧姫を危険にさらすなど

……」

「ありがとう、稚陽姫」

「くっ」

ゆうかの感謝の言葉に一瞬稚陽姫の言葉が途切れる。そのまま、そっぽを向いた。

「……これだから、おまえに任せておけないのだ！」

その吐き捨てるような言い方にぐつと来る。けれど……

確かにあぶなかったな。こいつに助けられなきゃ、ゆうか共々吹っ飛ばされてたかも知れない。

「すまん」

俺は素直に謝った。稚陽姫が驚いたように目を見開く。

「わ、わかれば、いい」

ぶっきらぼうにそう言った。

「あー、それにしても、その剣、どこから出したんだ？」

俺はさつき疑問に思ったことを尋ねた。

「いつも腰に吊しているが」

稚陽姫が当然というように答える。

「は？　腰に吊してって、さっきまでなかったぞ」

「小さくしていたのでな」

「え？　……小さくなるんだ」

「もちろん」

いや、もちろんって言われてもな。どうなってるんだかまったくわからんが……まあ、いいか。天界には俺の常識なんか通じないもんがいっぱいあるんだろうな。

そう思ったとき、また派手な爆発音が響いた。

「おわ！」

それに続いて、ごうつと風が吹く。白い大気その風に煽られた。

白い気のベールが後方に引いていく。世界がサーと姿を現していく。

目の前になだらかな丘陵が広がった。

「これは……」

その景色のなか、あちこちに動くものがいた。

「なんだ？」

目の前に広がる光景に俺は呆氣にとられてしまった。

そこに、さっきの火猪みたいな見たこともない生き物が動き回っていた。

しかも一種類じゃない。

少し遠くを二股首の巨大な虎(?)が咆吼を上げている。その前を巨大な蛇のようなものが一本の真っ直ぐな長い角を持つ鎌首をもたげながらくねくね這っている。

視線の反対側には、ダチヨウのような翼を持った二本脚の巨大な生き物がいて、でもその顔には象のように長い鼻がついていた。

他にも大小様々な見たこともない生き物たちが野を駆けている。

「なんだ？ こいつら……」

俺はびっくりしすぎてようやくそれだけ呟いた。

なんてでたらめな生き物たち。さっきの火猪といい天界の生き物ってこんなものばかりなのか？

「こんな……こんなことって」

その時、ゆうかの声で、俺は初めてゆうかが俺の腕をきつく掴んでいることに気がついた。その手が微かに震えているように感じる。

「ゆうか、どうした？」

「裕人さん……これは、この子たちは……」

俺を見上げるゆうかの瞳が揺れる。

「新たに造り出された生き物です」

「え？」

「今まで一度も生まれたことのない、まったく初めての……」

「そう、なのか？」

ゆうかは頷き、そして付け加える。

「この原初のような濃い気を使って生み出された、しかも、悪意に満ちた生き物たち……」

その時、どこからか鐘のような音が聞こえた。

それは一つではなく複数の音が奇妙な音階を奏でた。

「あつ、また……」

ゆうかが遠くを見つめて言葉を漏らす。視線の先、白い大気の中から巨大な鳥のようなものが飛び出してきた。

漆黒の羽はカラスのようで、ただその頭はカラスのそれではなく、まるで猿のような顔だった。

「くつ、だれが、こいつらを……」

脳裏に一人の男の顔が浮かぶ。前に天上の生き物を地上に呼び出した男。俺たちがここまで追ってきたはずの……

「風伯か」

俺は唇を噛みしめる。

「いいえ、たぶん、違います」

「え？」

ゆうかが首を振った。

「あのものには四宝の力を使うことは無理です」

「そうなのか……て、これって、神器の力なのか？」

俺は驚いて尋ねる。

「ええ」

「じゃあ、いったい、誰が？」

「わかりません。でもきつと……この世界を造り変えようとしているのです」

ゆうかが厳しい表情で答える。

「なんだって、そんなこと？」

「それは……私も、知りたいです」

ゆうかが厳しい口調で、きっぱりと告げた。

## 四宝の鐸 - 2 -

その時、咆吼が響き渡った。

慌てて視線を向けると、いつの間にか丘を駆け下り出していた稚陽姫に巨大な二首虎が襲いかかるうとしていた。

「あつ！」

俺はとっさに走り出そうとして、自分がなにも持たない丸腰な事を思い出した。

「くそ！ 武器がない！」

稚陽姫は剣を構えて二首虎を迎え撃とうとしている。焦りが胸を満たしそうになる。

「どうしたら……」

「裕人さん」

ゆうかの落ち着いた声が聞こえた。

「ゆうか、なんか武器になるものないか？」

俺は焦ってゆうかに尋ねた。けれど、二人とも戦いには関係ない場違いな学生靴しか持っていない。稚陽姫の剣のような不思議なアイテムもない。

焦る俺にゆうかがふわりと笑った。

「え？」

その笑顔が意表を突いた。

なにを？ と思った。こんな時になにを？

「裕人さん、稚陽姫のことを心配してくれているんですね？」

「は？ おれが？」

言われて初めて気がつく。そういえば、そうかな？

「ありがとうございます」

ゆうかがにこりと微笑む。

「あ、いや、えっと……よく考えたら、そんな必要ないか」

あいつはめちゃくちや強かったんだよな。

視線の先で稚陽姫が剣を一閃。二首虎は恐れるように跳び下がってそれを避けた。

それにしても、

「武器がないのはやっぱり困るな」

「大丈夫です」

ゆうかが落ち着いた口調で言う。

「裕人さんなら、生み出せます」

「え？」

「これほどの気の中、すべては裕人さんの手の中にあるのと同じです」

言われた意味は臆気にわかった。遙か昔、俺がゆうかとともに成した記憶。でも、それは……

「すまん、ゆうか。俺、どうすればいいのか、わからないよ」

「私が」

ゆうかの両手がそつと俺の手の甲に添えられる。

「手伝います」

ゆうかの手が触れた途端、理屈ではなく、俺はわかった。

周り中に満ちる気を感じる。強い息吹が俺たちを取り巻いていた。

「裕人さん、想像してください」

「うん？」

「あなたの欲する形を」

ゆうかに言われたままに俺は思い描く。

ゆうかを守り、美音を取り戻す力が欲しい。

紗那を助け、蒼井さんを解放する力を。

稚陽姫に続くことのできる力が。

その瞬間、すーと白い大気が寄り集まってきた。小さな粒子が輝きながら急速に形を作る。ゆうかに添えられた俺の両手の中に一本の剣が収まっていた。

「わあ！」

我ながら驚いた。

「できました」

「ああ」

ゆづかが俺を嬉しそうに見つめる。

瞬間、断末魔の叫びが上がった。

ハッとして振り返る。

二首虎が稚陽姫の剣で一匹づつに引き裂かれていた。

「あいつ、やるな」

稚陽姫がすぐさま走り出す。その先はまだ濃い大気が阻む彼方。

「ゆづか、俺も行く」

「はい」

俺は急いで駆け出した。

「どけー！」

目の前に二本足の巨大な象が迫る。

まるでダチヨウみたいない長い首の先に長鼻の象の顔が突いているのははつきり言ってシュールだ。なんかインドかどこかの神話の怪物みたいない気がする。しかも、でかくて速い！くそ！

俺はダチヨウ象の動きに神経を集中する。ハアハアと息が漏れた。ここまでカラス猿の爪をかくぐり、バチバチと電撃奔る大角鹿の大群の中を突破し、恐ろしく長い牙を立てて飛びかかる漆黒の豹もどきをなぎ倒してきた。

今度はお化け象か！

走り来る二本足の象の瞳は獐猛な光を放ち、長い鼻がムチのように振り上げられる。

つつ！俺は鼻が振り下ろされる刹那、身体を地面に投げ出した。そのまますれ違いざまに象の足を剣で払った。衝撃が両腕に伝わる。渾身の力で耐えた。



二本足の象はバランスを崩して、突っ込んできた勢いのままもんどり打って転がっていく。

やったぞ！

ふうー、と息が漏れた。

その時、カンコンとまた鐘の音が響く。ようやく近づいた白い大気の中から、火を纏った影が飛び出してきた。

火猪！

「またかよ！」

あー、もう、きりがないぞ、これ。さっきからあの鐘の音がするたびに、なんか変な動物が飛び出してくる。絶対あの音のせいだな。

俺は立ち上がって火猪と対峙した。

「でえい！」

真っ直ぐ突っ込んできた火猪を横に飛んで避けながら、剣を伸ばした。手応えは十分。でも、

「熱つつつ」

火猪の炎が半端ない熱さだ。

さっきからこんなやつばっかだな。

くそう！ これじゃあ、いつまで経っても紗那や、美音を助けにいけないぞ。

いったい、あの白い気の中に、なにがあるんだ？

鐘の音とは別にさっきから時々聞こえる爆発音。あれは紗那の間違い。あの中に紗那もいるはずなんだ。

それに、稚陽姫もさっき白い大気の中に飛び込んでいった。

ああ、もう、なんとか、ならないのか！

「裕人さん」

「あ、ゆうか。大丈夫か？」

いつの間にかゆうかが追いついてきていた。

「はい、大丈夫です」

ゆうかがにつこりと頷く。そうだ！　と思った。

「ゆうか、あの白い気を払えないか？　あの中に、なにかあるはずなんだ」

ゆうかは前方に広がる白い闇を見つめ、

「やってみますね」

頷くと腕をすつと伸ばし掌を前に広げた。

ゆうかの身体が淡く光り出す。ゆうかのまわりで白いきらめきが踊り出した。

「行って」

ゆうかが優しく告げた。

光がキラキラと輝きながら白い大気に吸い込まれていく。出来た穴からまるで煙がかき消えるように白い気が晴れていった。

気が晴れるにつれて、すぐそばで剣を構えている稚陽姫の姿が現れた。その先に角を持つ大蛇。さらに先で現れる二つの影。

「紗那！」

ようやく紗那の姿を目に捕らえられた。

呼ばれた紗那はチラッとこちらを振り返る。でもすぐ顔を元に戻した。その先に紗那が対峙しているのは……

「風伯！」

やっぱりあいつだ！

風伯が紗那越しにこちらを見た。忌々しげに眉を寄せる。その時、紗那が風伯めがけて駆けだした。

「やれ！」

風伯の命と共に背後の気の中からまた影が飛び出す。その影が躍るように紗那に飛びかかった。

「くっ！」

紗那が転がるように跳び下がる。一瞬前まで紗那のいた場所に鋭い爪を立てた大鷲のような生き物がいた。

「紗那！　大丈夫か？」

「ああ、なんともねえ」

立ち上がった大鷲に向かって剣を構えた紗那がこちらを見ずに答えた。でも、その肩が激しく上下している。風伯が酷薄な笑みを浮かべた。

「風伯、おまえ」

「これはこれは、王に夕風姫、それに禁軍総帥まで、こぞってお越しとは、嬉しいかぎりですな」

「なっ！」

「ばかにしているのか！」

稚陽姫が怒鳴った。

「いえ、いえ、その様なことあるはずもない。皆さん、いいところに来られたと思いましてな」

「は？ なにが言いたいんだ？」

俺の言葉に風伯が答える。

「あなたたちは、新しい世の創世に立ち会えるわけですからな」  
「は？」

「もっとも、王や夕風姫には二度目かも知れないが」

風伯がにやりと笑った。俺はゆうかと顔を見合わす。

「やっぱり、あいつの狙いは世界を造り替えることなのか。」

「くっ、そうはいかない。美音は何処だ！」

「さて、誰のことかな？」

風伯はとぼけたように顔を巡らせた。

「風伯、あなたに四宝は使えないはずですよ。美音ちゃんを返しなさい」

ゆうかが凜とした声を上げる。

「ああ、あの四宝の器のことですな。いかにも、四宝はわたしの身には余るもの。けれど、それを使える御方もいるのですよ」

「それは誰ですよ？」

「あなたがよく知る人ですよ」

「え？」

「なに？」

ゆうかと稚陽姫が同時に声を上げた。風伯が口の端を上げて笑う。

「それ故、これは新たな天の意志なのだ」

「なんだと！」

稚陽姫が押さえられないように声を上げた。

「我が母、日輪の女王の意志に逆らう天の意志など存在しない！」

「あははは。今まではそうかも知れない。しかし何ごとにも不変では有りえないことを覚えておかれるといい」

「なにを！」

いきり立つ稚陽姫を冷笑しながら風伯が言う。

「もつとも、わたしは面白ければどちらでもかまわないのだがな」

その時、カンコンとまた鐘の音が響いた。

「うわ！」

地面がぐらりと揺れた。後退していた白い気がさらに薄れていく。

風伯の後ろ、今まで気に隠されていた場所が現れた。

白い気が晴れた場所に現れたのは、土を盛って作られた祭壇のよ  
うなものだ。しつらえられた壇上に二つの人影。

「美音！」

紗那が叫んだ。

壇上に立てられた長く太い柱。その根本に美音が括り付けられて  
いた。

「美音ちゃん！」

ゆづかの叫び。けれど美音は気を失っているのか俯いた顔を少し  
も動かさない。

柱の頂上には注連縄が巻かれ、その柱の周りにも縄を張った細い  
棒が立てられている。

なんかの儀式か？

よくテレビの歴史ドラマで出る加持祈祷の場面が思い浮かぶ。そ  
の記憶の通り、祭壇の手前にはこちらに背を向けて一人の男の姿が  
見えた。

「おまえ、誰だ！」

男がおもむろに振り返った。

「え？」

その顔を見て、一瞬わけが分からなくなった。

「おまえは……老陽翁」

その姿を認めた稚陽姫が愕然と呟いた。

あの、百官の集う堂上で日輪の女王の左に控えていた男。それが  
なぜ、ここに？

一瞬、彼が風伯から美音を奪い返したのかと思った。けれどそれ  
はすぐに違うと分かった。風伯は自分を見た老陽翁に黙礼を返した  
のだ。

老陽翁が忌々しそうに声を上げた。

「なぜ、おまえたちがここに来るのだ？ 天上界で幽閉されているはずであらう？」

その言い方にこいつがこの事件の黒幕だと直感する。

「俺たちを幽閉させたのは、おまえだろう」

「いかにも、邪魔者は排除するのが必定じゃからな。それにしても、これは、稚陽姫までやってくるとは、とんだ誤算じゃわい」

「老陽翁。いったいなぜ、そなたがこのようなことを？」

稚陽姫の問いに年嵩の神は言った。

「わしはな、イヤになったのよ。いや、落胆したのよ」

「落胆？」

「そうだ。そちの母たる女王の差配にな」

「なにを？」

「そうさな。近近には夕風の姫御子とそのものが大きな理由であるが……」

そう言っただけ俺たちをチラッと見た。

「元々は天上の神たる誇りの問題じゃ」

「なにを言っているのだ？」

老陽翁は少し遠い目をした。

「遙か昔、この世と共に生まれ出た三柱の始祖神は自らの力で我らを創造された。わしはその端に連なるもの」

「そのようなこと、わかつている。それ故に、そなたは老陽翁として天界に重きをなしている」

稚陽姫の言葉に老陽翁は首を振る。

「いや、天界はもはや代替わりして久しい。始祖神の力が衰えた後に別の形で生まれた神の子孫、つまり、そなたたちの時代じゃ」

老陽翁の言葉がなんだか老人の躁り言に聞こえる。

「いや、天界のみならず、今や地上も神の子孫たる人で満ちておる」

「よいことではないか？」

「そうかな？」

「なに？」

「元々は神の子孫であつても、増えすぎた人はどうしようもなく墮落しておるようにわたしには見える」

「は？　なんだって！」

俺は声を上げた。老陽翁は俺の言葉をあつさりと無視する。

「だから天界がちゃんと支配してやらなくては、せつかく始祖神が作ったこの世界がたいへんなことになるだろうとな」

「なんだそれ？！」

なんてお節介なんだ。と思った。

地上は地上でいいだろう？　支配するってなんだよ？

「それが、此度の女王の処置。つまりはな、地上のことを天界で支配することなく、その地上の王に任そつとする事よ。その様なこと、わたしには看過できぬのじゃ」

「地上の支配をまかすだつて？」

俺は呆氣に取られた。

なんのこといつてるんだ？　俺たちは、地上の支配なんてまかされていないし、するつもりもないんだぞ。

「老陽翁。それはあなたの誤解です」

ゆうかが言つた。

「私たちは、地上の支配も天界に対する企みもなにも持つていませんわ」

「夕風の姫御子よ、それは同じ事だ」

「同じ事？」

「いかにも。そこな地上神の転生とそなたが伴侶となること、否応なく地に王が誕生する。それは、まさしく地の理。地上の支配に他ならぬ」

「ですが、わたしたちは……」

「もうよい」

老陽翁が忌々しげに首を振る。

「わしは世界を守るために新たな秩序を築くことにした」

「新たな秩序だつて？」

「左様。世界をもう一度あるべき姿に作り直すのだ」

「いったい、それは、どんな？」

ゆづかが不安げに尋ねる。

「このような愚かな人のいない世界。神とその創造物だけの世界じゃ」

「ばっ！ ばかな！」

あまりの驚きに声が出なかった。

人のいない世界？ 神とこの変な動物たちだけのいる世界？

そんな世界に造りかえようってか？ ばかじゃないのか！

「そもそも、世界の気が衰えたとき、目合い（まぐわい）なぞして新たな神を生み出したことが間違いだつたのじゃ」

老陽翁の繰り言が続いている。けれど、俺はもうそんなこと聞いちやいなかった。

この世界をそんなふうに造り替えられたら、今生きているものはみんな死に絶えてしまう。

地上の生き物が、人々が、学校の友達が、その家族が、みんな死に絶える。そんなこと許せるはずがなかった。

確かに、人は地上に満ちて、悪いことするやつや、とんでもないやつもいる。けれど、それだけで全てを否定するなんて絶対間違っている。

それなのに、自分の好みの世界に作り替えようってか？

たとえ神様でも、やっていいことと悪いことがあるだろう？

「わしは始祖神の造った世界を……」

「あんたが望む世界でなくて悪かったな」

「うん？」

独り言のようにまだなにかを話していた老陽翁に俺は言った。

「だがな、この世界にはこの世界の良さがあるんだ。俺たちはそれを知っている。だから……」



俺は老陽翁を見つめきつぱりと告げる。

「この世界を勝手に変させたりしないぞ！」

「もう遅いわ」

老陽翁はくるつと背を向けると祭壇に向かってなにかを振った。

柱に縛られている美音の身体がビクツと跳ねる。

俯いていた顔が一瞬上がった表情のない面が見えるのと、カンコンという音が響いたのが同時だった。

「うわあ！」

「きゃ！」

地面が激しく揺れた。倒れそうになるのをなんとか耐えて、ゆうかを支える。地面に見る間に亀裂が走っていった。

また、なんか生まれるのか？

俺は緊張して剣を構える。祭壇上で老陽翁がずっと腕を振っている。カンコンという音が途切れずに鳴り響いた。

地面の亀裂からボコボコとなにかが立ち上がる。瞬く間にそれは異形の形を取った。

「なんだこれ？」

それはさっきまでの異形の生き物とは違う、まるでどこかの映画で見たことの在りそうな人型の土の塊だった。

「土人形？」

その顔は作りかけの失敗作のように醜く歪んで、その目は死んだように光がなかった。

「こんなモノまで……」

ゆうかの瞳に怒りがよぎる。

「ゆうか、こいつらは？」

「これは……命のないただの操り人形です」

その間にも、土人形はいくつもいくつも立ち上がってくる。見る間に祭壇と俺たちの間を埋め尽くした。

「くそう！ 数で勝負ってか？」

「いいえ、たぶん、命あるモノたちを生み出すには時間が掛かりますから、その代わりだと思います」

「そうなんだ」

それにしても、この数！ さて、どうしたもんか？ と逡巡した

とき、

「やれ！」

老陽翁の話を沈黙して聞いていた風伯が土人形たちに命じた。

土人形たちが一斉に駆け出す。地響きが起こった。

「うわー！ 多すぎだろ！」

「ゆうか、下がってて！」

俺は剣を構えた。正直この数を止められるのかわからない。それでも、こいつらを蹴散らして、美音を取り戻さなきゃ。

くそう！ やるぞ！

先頭の土人形目掛けて剣を振り下ろす。ガキンと音がして剣が相手の腹に受け止められた。

「くっ」

硬てえ！ と言うか重い！

そのまま土人形は力任せに押してくる。さすがに剣で押し返すことは出来なかった。

一旦跳んで下がった。

目の端に紗那や稚陽姫が同じように土人形たちと打ち合っているのが見える。

紗那は跳ねるように相手の攻撃をかわしながら打ち込み、稚陽姫の動きはすごく速い。

けれど、強靱な土人形が剣を弾くのは同じようだ。

「くそう」

俺は渾身の力でもう一度剣を振り下ろす。腕に重い衝撃が伝わる。でも、硬い土人形はびくともしない。

これじゃあ、ダメだ。くそ！ どうしたら……

「裕人さん、気を！」

ゆうかの声。俺ははっと気がついた。

そうだ！ 忘れていた！

土人形の力に押されながら、右手に意識を集中する。掌の内側の

雷の紋章が光り出す。刀身を白い光が駆け上がった。

ふっと圧力が抜ける。光に包まれた刀身が土人形の身体にずぶずぶとめり込んでいく。

「でやあ！」

俺はそのまま剣を振り下ろした。土人形がばらと崩れて土に帰った。

よし！

と思つたのもつかの間。一体をやつつけても、次のやつがすぐ迫ってきた。

こいつら動きは全然速くないけど、とにかく数が多い。

剣を大上段に振りかぶって、思いつきり打ち下ろす。白く光った気を纏つた刀身が相手を砕いていく。

二体目、三体目、四体目。うゝ、きりがねえ。

やつつける以上にさらに増えている気がするぞ。

いつの間にか周り全てを土人形に囲まれていた。

紗那は？ ゆうかは？ 稚陽姫は？

大丈夫なんだろうな？

俺は少し焦ってきた。

土人形たちに阻まれて辺りがまったく見えない。

その時。

近くでばらつと土人形が崩れる。稚陽姫の姿が見えた。後ろ姿の肩が大きく上下している。

あいつ、結構疲れてるんじゃないだろうな？ 大丈夫なのか？

自分もずつと気を放ちつつ戦っているから疲労感を感じる。

目の前の相手を渾身の力で切り崩しながら稚陽姫を見やった。

稚陽姫は剣をさらに一体に斬りつけた。その剣が相手を崩すことが出来ず身体にめり込んだまま止まる。

「くっ！」

稚陽姫が苦しそうな声を出した。

後ろからさらに土人形が稚陽姫に迫る。稚陽姫の背後がから空きだった。

「何やってるんだよ！ あぶないだろうが！」

俺は急いで後ろからせまる土人形に斬りつけた。

「がきつと硬い手応え。やばい、気の力が弱まってるか？」

俺はさらに意識を集中して刀身に気を放つ。痺れるような腕の痛みを伴って土人形が土に帰った。

稚陽姫が気づいて振り返る。

「なにやってるんだよ！ 後ろ、から空きだぞ！」

「うるさい！」

稚陽姫の表情が疲労からか歪んだ。その間にも周りからさらなる土人形が迫ってくる。

「くっ！」

近付いた俺たちは互いに背を付けて敵を見やった。稚陽姫の肩が上下に揺れている。後ろを見ずに言った。

「おい、大丈夫か？ 疲れてるんじゃないのか？」

「うるさい。わたしは大丈夫だ」

「ほんとだろうな？ 強がってるんじゃないぞ！」

「大丈夫だと言った！」

土人形が真つ正面から突っ込んでくる。がきつと剣を当てて受けた。

「ぐっつ」

そのすごい力の押された。気の集中が切れる。刀身から光が失われる。

その瞬間、すつと稚陽姫と合わせていた背中に抵抗がなくなった。

「うわ！」

いきなり後ろに倒れそうによろけた。土人形の腕が飛んでくる。

避けられない！

「くそう！」

自ら尻餅をつきながら剣を突き出そうとした。その瞬間。

襲い被さってきた土人形がばらばらと崩れていく。  
思わず、その土を腕で振った。

傍らに剣を振り下ろした形で稚陽姫が立っていた。

「おまえこそ油断するな」

稚陽姫が怒ったように言っただけにすぐに次の土人形に向かっていく。

あれ？ 助けられたんだよね？

単に怒られただけのようだが……まあ、いいか。

それにしても、周りは土人形だらけ。離れていった稚陽姫の姿も再び敵の間に隠れる。

さて、どうしたもんか？ これじゃあ、キリがない。

俺も相当疲れてきた。なんとかこいつら一気に片付けられないのか？

びつしりと敵に囲まれながらなんとかしなくちゃと焦る。だが、  
そう素晴らしい案は思い浮かばない。

俺は再び近くの相手に向かった。

今、何体目だ？ だんだん腕が痺れて上がらなくなってきた。汗  
が目に入る。頭がボーとしてきた。集中できない。

くそう。このままじゃ、いずれやられる。なんとか、なんとかし  
ないと……

「裕人さん！」

「ゆづか！」

どこからかゆづかの声が聞こえた。

「ゆづか、無事か？」

「はい。わたしは大丈夫です」

ゆづかの力強い言葉にちょっとだけホッとする。

「今、道を造りますから、美音ちゃんを助けにいつてください」

「道？」

道ってなんだ？

俺が首を傾げたとき、バタバタと土人形が倒れて、いや、崩れていくのが目に入った。

「え？ どうして……」

人形が崩れていくのは一直線上だった。確かにまるで道のようにそこだけ土人形がいなくなり、その道の最後に眩い光を纏ったゆうかが両腕を天にかざしているのが見えた。

そして道の反対側には、美音と老陽翁のいる祭壇が見える。

老陽翁が手に持つ棒のようなものを振る度に美音の身体がビクツと震える。同時にカンコンと音が響いた。

その音とともに今崩れたばかりの土人形がまたボコボコと立ち上がりかける。

そうか、だからキリがないのか！

「裕人さん、早く！」

「わかった！」

俺はゆうかが開いてくれた道に飛び込んだ。美音目掛けて駆け出そうとした。その時。

「兄さん、お先！」

今までどこにいたのか、紗那が横合いからすごいスピードで飛び込んでいった。

「美音！ 今行くぞ！」

紗那が叫ぶ。

一瞬俺の動きが止まった。それから慌てて紗那が飛ぶように駆けていく後ろ姿を追いかける。

その時、祭壇上で老陽翁が美音に近づき、その頭に手を乗せるのが見えた。

あいつ、なにする気だ？

俯き加減の美音の顔が老陽翁に持ち上げられ、紗那に向けられた気がした。

「美音！ 美音！ 美音！」

紗那が叫んだ、その瞬間。

縛り付けられている美音の身体が強く跳ねた。仰け反るように顎が上がる。なんだかすごくヤバイ気がした。

あいつ、美音になにしたんだ？

そう思ったとき、前を走っていた紗那がいきなり立ち止まって、

そのままガクリとくずおれた。

「え？」

なんだ？ なにが起こった？

「紗那！」

倒れた紗那に駆け寄る。紗那が苦しそうに喉を掻きむしっている。

「しっかりしろ！」

なにが起こったのかわからない。

美音の身体が揺れて、けれど、今までと違ってなんの音も聞こえなかった。なのに、紗那が突然倒れるなんて。

カンコンとまた音が響く。数を増した土人形がゆうかの造つてくれた道をふさぎにかかる。

ヤバイ！

俺は紗那を肩に担ぐと、一旦下がった。

道の反対側にゆうかの姿がかるうじて見える。

「でや！」

邪魔しに来た相手を剣で払う。片手ではもはや切り崩せなかった。それでも土人形たちをなんとか振り払い紗那をゆうかのところに

連れ帰った。

「裕人さん！ 紗那！」

「紗那が突然倒れた！」

ゆうかが紗那の身体に手を当てる。まだ苦しんでいる紗那の周りが白い光で包まれた。

「大丈夫なのか？」

「はい、おそらく」

あれは、なんだったんだろうな？



なぜ、紗那は倒れたんだろう？　どんな攻撃だったんだ？

さっきの状況を思い出しても、なにがなんだかわからなかった。

乱戦の中、稚陽姫が戦っている姿がチラチラ見える。動きが鈍い。いつこうに減らない相手に稚陽姫の疲労もさらに増しているようだった。

このままじゃ、じり貧だ。なんだかわからないけど、もう一度やるしかないか。

「ゆうか、もう一度……」

そういいかけて、紗那の手当をするゆうかの顔色が酷く白くなっていることに気づく。額に汗も浮かんでいる。

「ゆうか、大丈夫なのか？」

「はい？」

ゆうかは怪訝そうに俺を振り返る。

「気の使いすぎじゃないか？　顔色悪いぞ」

その言葉にゆうかはにつこり微笑んだ。

「まだ、大丈夫です。それに、裕人さんや稚陽姫の方が遙かに疲れしているでしょう？」

「いや、でも……」

ゆうかが指を立てて俺の言葉を制した。

「美音ちゃんを助けましょう」

きっぱりとしたゆうかの言葉。その瞳に強い光が瞬いた。

「……ああ、そうだな」

俺は頷く。そして告げた。

「ゆうか、すまん。もう一度道を開いてくれるか？」

「はい」

ゆうかが力強く頷く。

俺は立ち上がって呼吸を整えた。今度道が開いたら、一気に行くぞ。

「やります」

「ああ」

ゆうかの全身が輝きだす。強大な気が迸る。その気をゆうかは両腕に集めた。

そして振り下ろす。光がまっすぐ伸びて軌跡上の土人形を粉碎していった。

「やっぱり、ゆうかはすごいな」

眩きながら、俺はその軌跡上を駆け出した。

行く手を阻もうとする土人形たちを蹴散らしつつ、俺はゆうかが開いてくれた道を祭壇の所へと駆けた。

剣に気を込めて一気に遠く伸ばそうかとも思ったが、老陽翁を狙って近くにいた美音を傷つけたら大変だ。

やっぱり近くまで行って奪還するしかないよな。

俺が近づくの気づいた老陽翁が再び美音の頭に手を置いた。

背筋に悪寒が奔る。なにかがやばいと直感が告げる。

どうする？

一瞬迷った。瞬間、美音の身体が大きく跳ねた。

「ぐっ！」

きーんという耳鳴りにも似た大きな音が頭の中に響いた。頭が割れるように痛む。

「なにが？」

起こったんだ？

一瞬で世界が白く染まる。自分がどこにいるのか分からなくなつた。

まるでいつもの異空間だ。

さっきまで周りに満ちていた土人形も、助けようと近づいていた美音もその傍らにいた老陽翁の姿もない。

始めにこの場所に来た時のような白い霧が漂っている。

なに？ なにかがおこったんだ？

戸惑う俺の目の端で霧が動く。その中から影が走り出してくる。

なんだ？ また変な生き物か？

けれど、白い霧を割って現れたのはゆうかだった。その表情がひどく切羽詰まっているように見える。

「ゆうか！」

声に出したつもりだった。でも少しも声が出なかった。

なんだ？ 俺、どうなったんだ？

自分がどんな姿でいるのかわからない。顔を振っても自分の姿を認識できない。

そのうち、ゆうかの出てきた霧の中から土人形がぞろぞろと現れた。ゆうかを追って駆けてくる。ゆうかはよろよろと逃げていく。

やばい！

俺はゆうかを助けるために駆け出そうとした。けれど……

くそ！ 足が動かない。それどころか身体が全く動かなかった。

まるでどこか壁にでも縛り付けられているようだ。必死で手脚を動かそうとするが、びくともしない。

その間に、土人形たちが逃げるゆうかに見る見る追いついた。

「きゃあ！」

ゆうかの腕が掴まれる。ゆうかの足が止まる。途端に土人形がゆうかを取り囲んだ。

「あ、やつ！」

ゆうかが手を掴んだのとは別の土人間に抱え上げられる。ばたばたと足が動いた。

ゆうか！ ゆうか！ なにやってるんだ！

いつもの力でそいつらを倒してくれ！

動けない俺はゆうかに必死で叫ぶ。でも、声は全く出なかった。

「あ、きゃあ！」

ゆうかの着ていた制服がびりびりと引き裂かれた。さらに多くの土人形がゆうかの身体を抱え上げ押さえつける。ゆうかの肌が露出する。

くそ！ あいつら！

やめろ！ やめろ！

「う、あつ…… ああつ！」

くっ！

制服を引き裂かれ大きく肌を曝したゆうかに土人間がのしかかる。  
ゆうかの表情がゆがんだ。

「い、いや、あう、裕人さん！ 裕人さん！」

「ゆうか！ ゆうか！」

出ない声を必死に出そうと藻掻いた。

目の前でゆうかのからだが生人形たちに弄ばれていく。

くっ！ やめろ！ それ以上やったら、ただじゃすまないぞ！

胸が苦しくなる。掻き篁りたくなる。

ゆうかの表情が苦しげに歪む。

「うわん……きゃう、あつ……うぐ」

「ゆうか！ ゆうか！」

「ゆ、裕人さん……裕人……さん……あー！」

ゆうかの瞳に涙が光った。その身体がぐったりと沈む。

胸が張り裂けそうだった。

「ゆうか！ ゆうか！ ゆうか！」

「裕人……さん」

「ゆうか！」

「裕人……さん」

「ゆうか！」

「裕人さん……しっかり」

「ゆうか！ ……うん？」

口元になにかが触れた。仄かな甘い香りが漂った。

「う……うっ」

目眩にも似た酩酊感が襲う。ふっと視界が白から現実に戻った。  
え？

声にできなかったのは口を塞がれていたから。甘い香りが揺れる  
と、口を覆っていた柔らかいものが離れ、ゆうかの瞳が俺を覗き込  
んだ。

「裕人さん、大丈夫ですか？」

「ゆうか……」

まだ甘い香りの余韻にすぐに頭が動かない。ゆうかの顔越しに青い空が見えた。

「あっ！」

ゆうかに抱えられていた。慌て上半身を起こす。

「お、俺……どうなったんだ？」

「たぶん四宝の力で、妄想に引きずり込まれていたんです」

妄想？ あれが妄想なのか？

確かにあれは俺の一番見たくない悪夢だった。あんなのに引きずり込まれたらもう戦う気力なんかなくなってしまいそうだ。

「こんな事が、できるのか……」

「裕人さん、あれは、四宝の力のほんの一部でしかありません」

「そうなのか？」

「ええ。今は美音ちゃんの器の中にあることで解放される力はほんのわずか。でも、今のままでは、そろそろ美音ちゃんが保ちません」  
「どういう事だ？」

俺は最悪の事態を予想して尋ねる。

「器である美音ちゃんが壊れ、四宝の力が解放されます」

「くっ！」

やっぱり最悪だ。

「矢上裕人」

「は？」

突然名前を呼ばれて振り返る。そこに稚陽姫が憤慨した瞳をこちらに向けていた。

「いつまでやってるんだ！」

「おわ！」

びつくりしてゆうかと少し距離をとる。ようやく周りが見えた。

「ええ?!」

さっきまで見渡す限りいた土人形が今は殆どいなかった。根こそ

ぎ土に帰されたようだ。そこでゆうかの顔色がさらに青くなっていることに気づいた。

もしかして、これ全部ゆうかがやったのか？

「おまえのせいで、夕凧姫は力を使いすぎたのだ。なにをやってるんだおまえは！」

稚陽姫の怒り。まったく、その通りだ。

「ゆうか、すまん」

「いえ……」

ゆうかが首を振る。

「それよりも、美音ちゃんを……」

そうだ。俺たちは美音を助けなきゃいけないんだ。

そうして、老陽翁の野望を挫く。そうしないと今の世界がなくなってしまうんだ。

カンコンとまた音が響いた。

ぼこつと再び土人形が立ち上がる。ほんとにきりが無い。

ようやく現状を深く認識した。俺たちひどくやばい状況だ。

「裕人さん、美音ちゃんが老陽翁の手に操られている限り、攻撃はやみません」

「ああ、分かってる」

「ですが、裕人さん」

「うん？」

「あの音を封じることができません」

「本当か？」

俺は勢い込んでゆうかに聞いた。それができるならこのキリのない土人形たちの攻撃を終わらせることができる。

「どうするんだ？」

「音は波です」

「は……いい？」

「……と物理の授業で習いました」

「えーと……」

ゆうかがなにを言い出したのかわからない。まさか、こんな時に物理の講義？

「波は吸収すれば広がらず、打ち消せばなくなります」

ゆうかが人差し指を立てて、うちの理科教師の口調で言った。

「えっと……そ、そうか！」

なんとなく理解した。防音壁で音を吸収したりするようなもんだな。

でも、ちょっと待ってくれ。いま、ここでどうやって？ そんな壁なんてないぞ？

「結界を張りましょう」

ゆうかが俺の疑問に答えるように言った。

「そんな結界ができるのか？」

「ええ、たぶん」

「たぶんなのか……」

俺は少し落胆する。

「裕人さんになら、できるはずですよ」

「俺?!」

いきなり言われて驚いた。

「結界の作り方なんてわかんないぞ」

「わたしが手伝います」

ゆうかが俺の右手を取った。掌の紋章が熱を帯びる。

「大丈夫です。裕人さんほど世界の気を扱える人は、今の世界にいないのですから」

ゆうかは稚陽姫に顔を向けた。

「あの音を打ち消します。あなたが美音ちゃんを助けてください」

稚陽姫はなにか言いたそうな表情をしたが、思い直したように頷いた。



「では、もう一度道を開けます」

さつきほとんど一掃したはずの土人形は再び数を取り戻していた。祭壇との間をまた埋めだしている。

「ゆうか、その状態で大丈夫か？」

何度も気を放出したゆうかの顔色は極端に悪くなっている。もう限界じゃないのか？

「大丈夫です」

見つめる俺の前でゆうかが力強く言う。

「これだけの濃い気の中ですから、すぐに回復します。それに……」  
ゆうかの頬が柔らかく綻ぶ。

「後で、裕人さんにも助けてもらいますから」

「そ、そうか」

「はい」

言ってゆうかはすっと立ち上がった。俺もゆうかの傍らに。

ゆうかの全身が輝き出す。

度重なる力の放出のせいで、やっぱりゆうかの表情は苦しそうだ。俺はそつと掌をゆうかの背中に添えた。

前に天上界でやったように自分の気をゆうかに分け与える。少しでもゆうかの力になればと思った。

ゆうかの全身の輝きが増す。

ゆうかが振り下ろした腕から白い光が奔った。

光の線上にいた土人形たちがぼろぼろと崩れていく。

「今だ！」

稚陽姫が駆け出す。

ゆうかが俺の背後に回った。

「こんどは裕人さんの番です」

「ああ」

後ろから抱きつくようにゆうかの腕が俺の身体に回った。

うわ！　ちよっ！

こんな時だというのに、胸がドキッと跳ねる。

ばか！　集中しろ、俺！

「裕人さん、そのまま腕を大きく開くように押し出してください」

「わ、わかった」

腕を走っていく稚陽姫の後ろから美音目がけて持ち上げる。

掌を開く。

俺の内部の気に応ずるように大地の気が動いた。

サーと見えない幕が美音の頭上から広がったのがわかった。老陽

翁も飲み込んで結界が覆う。

出来たのか？

けれど、再びカンコンと鐘の音が聞こえた。

「だめか？」

「裕人さん、気を調節してください」

「調節？」

「音に合わせて、それを打ち消すように」

「なんだって？」

そんなことができるのか？

「できます。裕人さんなら」

背中から聞こえるゆうかの声は確信に満ちている。

それなら……できるはずだ。

俺の胸にも自信が沸き上がってくる。

ゆうかの言葉を信じる。

そう、俺はいつだってゆうかを信じている！

俺の身体に添えられたゆうかの掌を通してさっきとは逆に彼女の気が俺に流れ込んできた。

二人の気が混ざり合い、互いの体内を自由に行き来していく。ゆづかが何をしようとしているのかわかった。

そう、結界を構成する気を操って、あの音を相殺すんだ。音を波で打ち消す。波は波で打ち消せるんだ。放たれる音を気で感じる。

耳だけではなく目で肌で五感で感じるように。そして気で織りなした結界を変化させる。

音が結界を通り抜けようとする秒にも満たない時間の中で結界を変化させて打ち消す波を起こす。

俺は集中した。感覚を研ぎ澄ます。そうして離れた結界の気を操った。

ゆづかの無言の導きに従って。そして……音が消えた。

復活しかけていた土人形が半分崩れたままの状態で動きを止める。稚陽姫が敵に近づいた。

老陽翁がまた美音の頭に手を置いた。

まずい！ あの攻撃が来る。

俺や紗那がやられたやつ。たぶんあれはすごく指向性のある音なんだ。だから一点集中で回りには音がしなかったんだろう。

でも、それも打ち消さないと！

びくと柱に括り付けられている美音の身体が跳ねた。

その一瞬、さらに神経を集中する。

結界の気が揺れる。

考えるより早く、俺はそれを操っていた。

音はしなかった。

稚陽姫が勢い付けて壇上に躍り上がる。

そのまま老陽翁に向かって……

「え！？」

稚陽姫の身体が舞うように吹き飛ばされた。そのまま地面にたたきつけられる。

「稚陽姫！」

ゆうかが叫んだ。

くそう！音を消せなかったのか？

けれど、いつの間にか祭壇近くに男の影が立っていた。

「風伯！」

そうか、烈風の刃で稚陽姫を吹き飛ばしたんだ。

「そう簡単に取り戻させたりせんよ」

風伯はちつつちと指を振った。

「おまえ、なんでこんな事に味方するんだ？ 天の意志に従うんじゃないのかよ？」

「いかにも、わたしは天上の住人。天の意志には従う」

「じゃあ、なぜなのでしょう？」

ゆうかも尋ねる。

「元はと言えば、夕風姫、あなたのことで少しくじったこともある。今の天界のやり方に多少は不満もある。だがまあ今回のことは、俺の酔狂さ」

「なに？」

「面白そうだからと言うことだ」

風伯の口の端が上がった。

「そのために、美音を弄ぶのか！？」

俺は怒りを込めて叫んだ。けれど、

「それは天界も同じ事。その少女を毀つつもりなのだからな」

「くっ」

俺は唇を噛みしめる。

確かにそうだ。それは俺たちも納得がいかない。

「それは違うぞ！」

横合いから憤然とした声が聞こえた。いつの間にか稚陽姫が立ち上がり、風伯に向かって剣を構えている。

「ほう？　なにが違うのだ？」

風伯は面白そうに顎をしゃくる。

「天の意志はこの世の平穩。そのために熟慮を重ね、決定したのだ」  
「その世界をいっそ新しくするという選択もある」

「させるか！」

稚陽姫が風伯目がけて駆けた。風伯の風の刃が進る。稚陽姫の剣がそれを両断する。

その時には風伯はサツと跳び下がっていた。

カンコンとまた鐘の音が鳴った。

やばい！

結界への注意が疎かになった隙にまた鳴らされた。土人形が再び動き出す。

「くそう！」

俺は再び集中する。

けれど、このままじゃ、美音を救い出せにいけない。

どうする？　焦りが胸に広がってきた。

このままじゃ、美音自体が耐えられずにダメになってしまう。

「兄さん、ゆうか姉さん、俺が行く」

「紗那！」

「もういいのか？」

さっきまで横たわっていた紗那がいつのまにか立ち上がっていた。まだ青い顔で肩を大きく揺らしている。

「俺が美音を助け出す。だから、その結界、もう少し保たしてくれ」  
俺はゆうかと顔を合わせた。

「紗那、いけるのね？」

「ああ、もちろんだよ」

「よし、いけ！」

「おう！」

俺の声に合わせるように紗那が飛び出した。まるで猿のように動

かない土人形の間を飛び跳ねていく。

俺は結界に意識を集中して、四宝の放つ音を打ち消す。

紗那が風伯と稚陽姫の戦いの間をすり抜け、結界の中に飛び込むとする。

中では老陽翁が美音の頭に手を置いて近づいてくる紗那を狙っている。

やばい！ 結界の中じゃ、音は消せない。

俺は焦った。

紗那が結界の中に飛び込む。美音の身体が跳ねる。

その瞬間???

俺は無我夢中で気に力を込めた。

「紗那！」

結界の中に飛び込んだ紗那の剣が老陽翁に伸びた。

それより早く老陽翁が仰け反って剣をかわしたように見えた。

紗那が再び大きく剣を振りかぶる。

無事だったのか？

紗那が剣を振り下ろそうとしたその時、さっき仰け反った老陽翁がそのままずると倒れた。

「え？」

なにが起こったんだ？

同時に美音の首が、がくつと落ちる。紗那が剣を放り出して美音に駆け寄った。

「美音！」

その光景を見て俺たちは結界を解いて急いでその場に向かった。

美音を抱える紗那のそばで老陽翁が口から泡を吹いて失神していた。

「これは？」

「放った四宝の力を自ら受けたのでしょうか」

「え？」

「裕人さんが跳ね返したのです」

「おれが？」

「ええ。あなたの結界で」

俺はちよつと呆氣に取られていた。

あの時、自分でもなにをしたのか思い出せない。けれど、それで敵を倒せたとしたら、結果オーライだな。

「これは期待はずれだな」

「風伯！」

背後からの声に振り返ると、稚陽姫と対峙している風伯が俺たちが美音を助け出した事実に渋い顔を向けていた。

「もう、終わりだ、風伯」

稚陽姫が言う。

「おとなしく縛に付け！」

「それはご辞退申し上げます、稚陽姫どの」

風伯はいつも通りの不敵な笑みを見せると、

「今回はこれまでですな。では、わたしはこれで」

「逃がすか！」

「女王殿によろしく」

言うが早いか風伯の姿は大氣の中に揺らめいて消えていった。

「くそ！」

稚陽姫が舌打ちしてなにもなくなつた空間を睨み付けた。

「美音！ 美音！」

紗那が少女の名前を懸命に呼んだ。俺たちは急いで美音を柱から解放した。

ぐつたりと動かない身体を紗那が大切そうに抱えて顔を覗き込んでいる。

「しつかりしろよ！ 美音！」

「紗那……」

ゆうかがそんな紗那の傍らで美音を見つめる。その手を少女の額にかざした。

「ゆうか姉さん……」

掌が仄かに光る。少女が眉根を寄せて、ふうと息を吐いた。ゆうかが手を退けると同時に少女の瞳が薄く開いた。

「美音！」

「美音ちゃん」

「……紗那？」

少女の虚ろな瞳に光が戻る。見つめる紗那と視線が合った。

「紗那！」

「うつ、え？ お！」

美音はいきなり紗那の身体に取りすがった。

「紗那！ 紗那！ 紗那！」

うつうつと嗚咽を漏らし出す。紗那の胸にしっかりと抱きついて顔を沈めた。

「もう、大丈夫だぞ」

紗那が真剣な声で少女を抱きしめる。

なんだか、ちょっと妬けるな。紗那、いい男じゃないか。

「もう泣かなくていいぞ」

「もう大丈夫よ、美音ちゃん」

少女が涙でくしゃくしゃの顔を上げて俺たちを見た。それから、ほっとしたような笑顔を浮かべる。

よかった。彼女が無事で。

そう思った。その時。

「では、その娘、預からせてもらおうか？」

「なに?!」

稚陽姫が近付いてくる。少女が再び強く紗那にしがみついた。



「おまえなんかに渡さない！」

紗那が敵愾心に満ちた瞳で稚陽姫を睨んだ。

「そのものを取り戻した後、天界に連れて行く約束だったはずだが」

「そんなもの、俺は……」

「紗那」

ゆうかが紗那の言葉を制した。

俺はちらつとゆうかと視線を合わす。なんなら、このまま逃げしまふ手もあるわけだけど……まあ、ゆうかはそんなことしないよな。

そう思ったとき、彼女が口を開いた。

「では、お姉様のところへ参りましょう」

「ゆうか姉さん！」

紗那が抗議の声を上げる。ゆうかは紗那を見やった。

「紗那、約定は守りましょう」

「でも……」

不満げな紗那にゆうかが凜と宣言する。

「紗那、私たちは正々堂々と美音ちゃんを守るのです」

ゆうかが紗那と俺を見渡した。

俺は強く頷いた。

「ああ、それでいいと思うぞ」

こうなったら天の意志がどうであれ、俺たちのすることは変わらない。ゆうかがそう望むように俺も全てを守りたい。

「ならば、その娘をこちら……」

言いかける稚陽姫にゆうかが言った。

「稚陽姫、この子は私たちが直接お姉様のところに連れて行きます。それでよろしいでしょう？」

「……まあ、いいですが」

稚陽姫がフンと不満そうにそっぽを向いた。

それから俺たちは今回の陰謀の首謀者、気を失っている老陽翁を引き据えて天に昇った。



## 続終章―新しい家族 - 1 -

再び天の百官が集う正殿。

正面の御簾越しに俺たちは女王と対峙した。

美音を挟むように俺とゆうかが立ち、紗那が美音の背後を守った。

「紗那！ ゆうかお姉さん！ 裕人さん！」

堂上を滑るように蒼井さんが駆けてきた。

「瑞穂！」

「蒼井さん！」

「姉さん」

百官のざわめきの中、蒼井さんが俺たちに駆け寄る。ゆうかにぶつかるように抱きついた。

「無事で、よかった……」

「瑞穂も……もう大丈夫？」

「ええ。もう、ぴんぴんしてます」

蒼井さんの瞳がくるくると動いた。いつもの猫のような人なつこい表情。俺もほっとした。

「これで、こちらの約束は果たした」

御簾の中から女王の声が聞こえた。

老陽翁はすでに無く、取り次ぐものもない。直接の会話だ。

ただ稚陽姫だけが御簾の傍に控えている。

「約束どおり、そのものはこちらに渡してもらおう」

女王の言葉に俺の胸の中で緊張が奔った。ここで美音を天に渡す事なんか出来るはずがない。ゆうかが口を開く。

「お姉様、その前に、お聞きしたいことがありますわ」

「なんだ、夕凧？」

「お姉様方は、この子が四宝を宿していること、前々から知っておられましたね？」

え？ と思った。

そうなのか？ 四宝は失われて行方知れずだったんじゃないのか？  
「それが、どうしたのじゃ？」

直接の肯定ではなかったけれど、それで女王が知っていたことが  
わかった。

「ではなぜ、今になって、こんな無茶なことをなさったのでしょうか？」

「それは……」

「利用しようとするものが現れたから？」

「うむ……」

「ならば、お姉様、もう、そのものは捕らえられました。悪事は潰  
えたのです」

女王は無言。ゆうかがさらに続ける。

「ですから、天がこのような非道の決定を行う理由はなくなりまし  
た。この子を地上に帰してください」

「それは出来ぬ」

女王の即座の否定。

「なぜでしょうか？」

「そのものの中に宿るもののこと、皆の知るところとなった。知ら  
れていないときならいざ知らず、そのまま地上に置くのはあまりに  
も危険じゃ」

「でも……」

「それにな、夕風」

女王が陰りのある声を出す。

「そのものの家族は、すでにこの世におらぬ」

「え？」

なんだって？！ 驚きが俺を包む。

いったい、なにが？

「そのもの、一度、あ奴らに掠われかけたのだ。その折、家族を殺  
されておる」

「まあ！」

ゆうかが口を押さえた。

「なにい！」

俺の心に怒りがわき上がる。風伯のとぼけた表情が脳裏に蘇った。くそう！ あいつめ！ なんてことしやがるんだ！

今度会ったただじゃ済まさないぞ。

それにしても……

横を見ると美音はずっと紗那の腕の中で震えている。

美音の身の上がすごくかわいそうで、俺はどうしたらいいのかわからなかった。

しばらく何事か考えていたゆうかが口を開いた。

「ならば、この少女は私たちが預かります」

「え？」

「は？」

周りで俺たちも声を上げた。

ゆうかが俺を振り返る。その瞳に決意の光が瞬いている。

それを見て俺も決心した。

いいさ。わかった。そうしよう。

俺は頷く。

天涯孤独に近いことは俺も経験したんだ。美音を助けられるのなら、それが俺の天命なのかも知れない。

「それで、よろしいでしょう？」

ゆうかが女王に言った。しばらくの沈黙。それから御簾の中で女王がかすかに笑った気がした。

「……それも一考であるな」

「では……」

「待ってください！」

ゆうかの掛けた声を遮るように声がかかる。稚陽姫がさっと御簾

の前に進み出た。

「私は同意できません」

「稚陽姫……」

「ほう、なぜじゃ？」

「この者たちに四宝を預けること、あまりにも危険です」

「それはいかなる理由じゃ？」

稚陽姫が俺たちの方を向いて言い放つ。

「この者たちは天に従わぬもの。いつまた謀反を起こすかわかりませぬ」

「なに言ってるんだ？ 俺たちにそんな気は少しもないぞ」

「それは、以前にお姉様と誓ったはずです」

そう、俺たちはただ平和に暮らしたいだけだ。それだけなんだ。

ただ？？？だからといって見過ごせないことはある。それが親しい人たちのことならなおさら。

紗那にすがりついて震えている美音の姿を俺は同じように胸が震える思いで見っていた。

この少女を守りたい。守らなければならない。

たとえ、天上を敵に回しても。そう思った。

「たとえ、そうだとしても、この者たちに四宝のことを任すのは危うい。また、いつ別の誰かが四宝を利用しようと仕掛けてくるかも知れないのです」

稚陽姫が主張する。

「ほう。そなたは、夕風と矢上裕人の守りでは不足と申すのか？」

「その通りです」

稚陽姫が俺を指さしてきつぱりと言った。

「そのものは未熟故、わたしは信用できません」

「くっ」

なんだよ！ やつぱり、俺、こいつに徹底的に嫌われているんだな。

ハアとため息が出そうになった。

「じゃあ、どうしろってんだよ？」

俺の問いに稚陽姫が答えた。

「ならば、わたしと……この場で戦え」

「え？」

稚陽姫が腰から獲物を抜いて俺に狙いを付ける。

「もし、おまえが勝てば、わたしはもう口出しせぬ。しかし、わたしが勝ったなら、四宝を置いて、ついでに夕凧姫も天上に戻ってもらおうか」

「なに！」

「稚陽姫？」

なにを言ってるんだこいつは？

美音のことはともかく、ゆうかのことは関係ないだろう？

「過日、その場にわたしがいれば、今のようなことはなかったのだから、これは正当な主張だろう」

稚陽姫が俺を睨んだ。

くそう！ どうすりゃいいんだ？

俺は少し冷静に考える。

こいつと戦って勝てるのか？

あの場で見た彼女の剣は神速の剣。俺の付け焼き刃の剣で押さえられるとは思えない。

けれど……ゆうかがなにも言わず俺を見つめている。その瞳にはなぜか絶対の信頼が宿っている。

ゆうかは俺を信じてくれている。

ならば、ここで逃げるわけにはいかない。たとえ、逃げたとしても、いつか同じように俺とゆうかを引き裂く力が現れる。

俺は、俺たちのことを天上人たちにはつきりと認めさせないといけないんだ。

「よし。わかった。やろう」

俺は静かに頷いた。





## 新しい家族 - 2 -

殿上がざわめく。百官が慌てたように我先に退いた。女王の御簾の前に広い空間が空いた。

稚陽姫が一振りの剣を放ってよこした。俺はその剣を受け取る。手に取ると俺の気を纏ってぼくと白く光った。

「兄さん、頑張ってくれよ」

紗那が美音を抱きかかえるようにしながら言う。

「いつもの練習どおりで」

蒼井さんが笑顔で声をかけてくれる。

「裕人さん、自分を信じてください」

ゆうかがそう言って微笑みながら後ろに下がった。

俺は剣を手に持ちながら稚陽姫と対峙する。

稚陽姫はすでに隙ひとつ無い構えで俺を睨み付けていた。

「構える。それまで待ってやる」

稚陽姫が冷静な声で告げる。俺は静かに剣を両手で構えた。瞬間。

稚陽姫の姿が影を残して動いた。

俺は……

「え？」

「裕人兄さん！」

「裕人さん！」

構えていた剣を両手から落とす。そのまま真っ直ぐ腕を突きだした。

稚陽姫の打ち込んだ剣が俺の身体を切り裂く……より一瞬速く、両手の間に現れた白い光が白刃を阻んだ。

「なに！？」

稚陽姫が目を見開く。信じられないという顔だ。

俺は自然に笑みを浮かべた。

……どうせ、剣技でこいつに勝てるわけ無いからな。

それなら中途半端に剣を使うよりは、俺が自在に扱えるとゆうかが信じてくれている氣を操った方がましだ。

それに老陽翁との戦いで俺は少しだけ自分の力に自信が持てていた。

だから俺は剣を捨てた。

そして稚陽姫の剣が身体に触れる紙一重のタイミングで、なんとか押さえ込めた。

いけそうだ！

そのまま両腕で稚陽姫の剣を挟もうと思った。

「小癪な！」

稚陽姫がさつと跳び下がる。その合間に突きが来た。

「うわ！」

かろうじて避けながら、俺も氣を操る。稚陽姫の背後の氣を爆発させた。

「なに！」

稚陽姫が爆風でよろめく。

「よし！」

すかさず彼女の周りの氣を掌握する。

光が彼女の腕を掴む。そのまま光の帯を巻き付けた。

「バカな！　こんな！」

ちよつと卑怯な氣がするけれど（ある意味飛び道具だからな）そんなことがまっくられない。

稚陽姫相手に隙を見せたら一発でやられる。このまま一氣に行くぞ。

俺は稚陽姫を氣で織りなした光のロープで動けなくする。

「わあ、すごいです。裕人さん、そんなことも出来るようになったんですね？」

蒼井さんが感嘆の声を上げる。俺はちょっと誇らしい気分になった。

「くっ、こんなもの」

「え？」

稚陽姫の身体から赤い光が溢れ出す。その光が俺のロープを切断した。

「おわ！」

ヤバイ！ 再び集中しようとしたとき、もう目の前に白刃が迫っていた。

くそ！ 間に合わない！

白刃が肩をかすめ服が破れて血が飛び散った。

くっ！

それでも俺は渾身の力で気を操る。痛みの中で掌握した気を稚陽姫に放った。

「きゃあ！」

続けざまの斬撃を浴びせようと大上段に振りかぶっていた稚陽姫の身体が空中を小さく舞う。そのまま少し離れた床に叩き付けられた。

俺は痛みを堪えながら顔を上げた。切られた腕は力が入らず、だらんと垂れたまま。

倒れた稚陽姫が苦しそうに身体を曲げてうずくまっている姿が目に入った。

あ、まずい！ と思った。

えーと、なんかちょっとまともに入りすぎたか？

でも、あんな状況じゃ当然手加減なんてできないからな。俺も必死だし。

それにしても、あいつ、大丈夫なのか？

俺はふらつきながら、まだ倒れたままの稚陽姫に近寄った。

稚陽姫が顔を上げて、苦しげな表情の中、キツと俺を睨んだ。

「トドメを刺しに来たのか？」

俺は呆れた。

「トドメ？ なに言ってるんだ、おまえ？」

俺は稚陽姫の腹を見る。外傷は無さそうだった。

「大丈夫そうだな。よかった」

「なっ？」

稚陽姫が思いつきり怪訝な顔をする。

「ゆづかの知り合いのおまえを傷つけたりしたら、寝覚めが悪いからな」

「な、なにを言ってるんだ、おまえは？」

なぜか稚陽姫が焦ったように言った。心なしか顔色が赤い。なんだ？

「そこまでじゃ」

「うん？」

「この勝負、矢上裕人の勝ちと見なす。そなたたちの好きにするがいい」

女王の決定だった。

俺は稚陽姫に手を差し出す。彼女はそっぽを向いた。

仕方ねえな。

俺は稚陽姫の腕を無理矢理掴むと引つ張って立ち上がらせた。

稚陽姫はまだ苦しそうな表情でに立ち上がると、くるつと背を向けた。

「このお返しは、必ず……」

そう呟くのが聞こえた気がした。けれど確かめるより前に稚陽姫は足を引きずりながら御簾の彼方に消えた。

代わりに、みんなが俺の所に駆けてきた。

「裕人兄さん、やったぜ！ 見直した」

「そうか？ あははは」

「裕人さん、すごかったです。まるでゆうかお姉様を見ているようでした」

蒼井さんが目をうるうるさせて俺を見つめる。そして……

「裕人さん、お疲れ様です」

ゆうかが本当に嬉しそうな笑顔を浮かべていた。

「ああ、ありがとう」

「？」

なぜだか俺はそう答えていた。

ゆうかは少し首を傾げ、それから明るく笑った。

### 新しい家族 - 3 -

「で、部屋割りなんだが……」

俺はちよつと悩みながら声をかける。

リビングのソファでみんなが座って俺のほうを見ている。

みんなって言うのは、ゆうかに蒼井さんに紗那の美音だ。

もう一度みんなの顔を見渡して、さて、どうしたもんかと思った。

地上に戻ってきた俺たちが、まず真っ先に考えなくちゃならなかったのは、当然美音のことだった。(ちなみに真っ先にしないといけなかったのは、ぼろぼろになったリビングの片付けと修理だった。りしたわけだが)

天上の女王にあれだけ見得を切ったからには、俺たちが美音を守らなけりやならない。

と言うことは、当然彼女と一緒に住むことになるわけだ。

ゆうかも当然そのつもりだった。俺もそれでいいと思った。ところが……

「わたし、紗那と一緒にじゃなきゃだ！」

美音は紗那の腕に取りすがってそう主張した。

そうなると誰も強くは言えない。第一、彼女が天上で唯一親しくしてくれた紗那と離れたくないのは当然なのだ。

紗那が照れた表情で、ちよつとでれつとしたまま頭を掻いた。いや、そんなことより、

「じゃあ、紗那も一緒に住みましょう」

「え？」

ゆうかが明るくそう言ったときには、もうそれは決定事項のようなもんだった。

「でも、それでは、ゆうかさんと裕人さんに迷惑がかかります」  
蒼井さんがすごく心配して言った。

「じゃあ、瑞穂も一緒に暮らしましょう」

「は？ ……ええっ!？」

蒼井さんが驚く。俺も仰け反りそうになった。

「ダメ……ですか？」

ゆうかが上目遣いで俺に聞く。

「うっ……」

一瞬返答に困った。

両親が亡くなり、一人暮らしが長かった俺は賑やかな家庭に憧れていた。

だから、一緒に住む人が増えるのは、むしろ大歓迎なんだが、しかし……いいのか？

「俺は……かまわないけど」

「嬉しい！ ありがとうございます、裕人さん」

「あ、ああ……」

その時、俺の意識はまだ呆気にとられたままだった。

「ねえ、瑞穂、そうしましょう。紗那もいいでしょう？」

紗那も俺と同じように呆気にとられていたようで、ゆうかに促されるままに「うん」と頷いていた。

「嬉しい！」

ゆうかが胸の前で両手を合わせて喜んでいる。

俺は……まあ、いいかと思った。

賑やかなのは大歓迎だしな。

そんなこんなで、あれよあれよという間に、俺の家の住人は三人も増えることになった。

ついこの間まで一人暮らしだったのにびっくりだぜ。

で、決まったもんはいいとして、次の問題は部屋割りだ。

さすがにそんなにたくさん開いてる部屋がない。

さて、どうしたもんかと俺は頭を悩ませた。

美音は、やっぱり一人で寝かすわけにはいかないだろう？ まだ

幼いし、彼女を守ることも必要だし。

そうすると相手は……やっぱ、ゆうかな。

あーますますゆうかの部屋に行きづらくなるなとかいう考えがチラツと脳裏に浮かぶ。

いかん、今、そんなことは重要じゃないんだ。

俺は頭を振ってそれを振り払う。

そんなこんなで、俺の考えた部屋割りは……

「蒼井さんは廊下の突き当たりの部屋を使ってくれ。今は物置みたいになってるから、後で片付けるよ。紗那は俺と同じ部屋を使うことにする。そして、美音はゆうかと一緒だ」

これでどうだ、というように俺はみんなを見渡した。

ゆうかはおつとりと微笑んでいたが、紗那と蒼井さんが驚いたような、まったく理解できないという表情で俺を見つめていた。

あれ？ なんか問題あったか？

「えーと……」

俺が尋ねようとしたとき、いきなり紗那が言った。

「兄さん、なに考えてるんだ?!」

「え？ え？ ダメか？」

「当たり前だろう？」

「えーと、どこが？」

「だいたいさ、なんで兄さんとゆうか姉さんが同じ部屋でないんだ？」

「へ？」

「伴侶なんだから、同じ部屋なのが当然だろう」

「あ、いや……」

「そうですよ。おかしいです、そんなの」

蒼井さんがびっくりするほど真剣な表情で言った。



「うつつ」

俺は言葉に詰まる。

「前からそう思っていたんです」

「そ、そうなのか？」

「はい。だいたいゆうかお姉さんが、どれだけ裕人さんのことを待っているのか？」

「あ、いや、それは……」

「これ以上、ゆうかさんを寂しくさせないでくださいね」

「あ、ああ、それはわかった」

「では、裕人さんはゆうかお姉様に部屋に行ってください」

「え？」

「わたしは美音ちゃんと一緒に部屋にします」

「じゃあ、俺は、兄さんの部屋を使うことにする！」

「紗那、おまえ、勝手に……」

「よし、決めた！」

俺は姉弟の攻撃にあって反論の余地さえ与えてもらえなかった。

あわあわしながらゆうかを振り返る。

ゆうかは楽しそうに幸せそうに微笑んでいた。

## 新しい家族 - 4 - 最終回

賑やかな夕食。

ゆづかの温かな手料理をばくつきながら、俺も幸せな気分になる。紗那が意外に上品に食事を取り、美音が嬉しそうにゆづかや蒼井さんに話しかける。

なんだか胸がぽかぽかした。

女性陣が美音も連れてお風呂に入って、少女の明るい笑い声が聞こえてくる。それがまた楽しそうだった。

「裕人兄さん……」

「うん？」

紗那がいつになく真剣な表情で俺を呼んだ。

「どうした？」

「……すまねえ」

紗那がおもむろに頭を下げる。

「何やってるんだ、紗那？」

俺は慌てて言った。

「俺の我が儘で、兄さんやゆづか姉さん、それに俺の姉さんにも、みんなに面倒かけた。ほんとに、申し訳ない」

「なにいつてるんだよ。バカ」

俺は言った。

「おまえが謝ることなんて全然無いさ。俺たちが進んでやったことだ」

「でも……」

「それにな」

俺は紗那に笑いかけた。

「惚れた相手を助けるのは漢おにいなら当然のことだからな」  
「なっ！」

紗那の頬がいきなり染まる。

「な、なんで……」

「わからないわけ無いだろう?」

俺はちよつとにやつきながら紗那に告げる。

「俺も同じだからな」

紗那はちよつと目を見開いて、それから照れたように笑った。

その時、がちゃと音がしてリビングの扉が開いた。

風呂上がりのパジャマ姿のゆうか入ってくる。後から美音がかけてきてゆうかと手を繋いだ。

「ゆうかお姉さん、お母さんみたいな匂いがする」

「そう?」

「うん」

ゆうかはしゃがむと美音を抱き寄せる。美音の濡れた髪をタオルで優しく拭いた。美音がちよつとくすぐったそうなのでも嬉しそうな笑顔を見せる。

後ろから蒼井さんも部屋に入ってきた。

「わたし、嬉しい!」

美音が言った。

「いっぺんにお兄さんとお姉さんが出来たみたい」

「そう?」

「うん。紗那はお兄さんみたいだし、瑞穂さんはお姉さんで、ゆうか姉さんは、お母さんみたいなもの」

俺は紗那と顔を合わす。かわいそうに、おまえ、お兄さんと思われてるぞ。

紗那は軽く肩を竦めた。

「俺は?」

聞いてみた。

「うゝん、お父さん?」

「なぜ、俺だけ、疑問系?」

「だって……」

少女は子供らしい笑顔を見せて笑った。

「えっと、あの、ゆうか……」

「はい」

俺は改めてドキドキしながらゆうかを見つめていた。

元ゆうかの部屋。これからは俺たち二人の部屋になることになった部屋の中で、二人で見つめ合っていた。

「ご、ごめんな。蒼井さんたちに押し切られて、こう言うことになっちまって……」

ゆうかが少し首を傾げる。

「裕人さんは、お嫌ですか？」

「あ、いや、違う」

俺はぶんぶんと首を横に振る。

「そうじゃなくて、その……」

「わたしは、嬉しかったです」

ドクンと心臓が音を立てた。

ゆうかの唇が綻んで花のような笑みが広がる。頬が綺麗なピンクに色付いた。

「お、俺も……」

本当はこうしたかったんだ。いつもゆうかと一緒にいたかった。でも……

「ちよっと、恥ずかしいんだ」

俺もたぶん顔が赤い。首筋から熱が上がってくる。

「わたしも……」

ゆうかも恥ずかしげに瞳を揺らす。

「ね、寝ようか？」

「はい」

俺たちは明かりを消した。

ベッドの中でゆづかの柔らかな肌の温もりを感じた。その肌からいい香りが鼻腔を擽る。

俺はさっき美音の言った言葉を思い出した。

「お母さんの匂いか……」

「うん？」

ゆづかが身じろぎする。

「ああ、さっき美音がそんなことをいってたなあと思ってさ」

「裕人さん、美音ちゃんのこと、ありがとうございます」

「なんだよ。別にゆづかにお礼を言われることなんか無いよ。俺もこれでよかったと思ってる」

「はい。……それにしても、子供はかわいいですね。まるで瑞穂や稚陽姫の幼い頃を見ているようです」

「そうなのか？」

「はい」

その嬉しそうな声に俺は何気なく言葉に出す。

「ゆづかは子供が好きなんだな」

「ええ」

「よかったな。美音のお母さん役が出来て」

「そうですね……裕人さんも子供が欲しいですか？」

「え？」

突然の質問に思考が止まる。えっと、それは、あの……

「つくりますか？」

心臓がいきなり跳ねた。

わわわわ、ちよっ、ゆづか、な、なにを言ってるんだ？

いつの間にかゆづかが俺を見つめている。

俺は焦った。

いや、子供は欲しいと思うけど、でも、しかし、まだ俺たち高校生なわけだし（厳密には俺だけか？）、だから、その、あの……

「えっと、まだ、ちよっ……早いんじゃない？」

ゆうかがクスツと笑った。

「そうですね」

その笑顔が俺の心臓を貫く。愛おしい。ゆうか。俺の伴侶。

「今は、それより……ゆうかが欲しい」

「わたしも裕人さんが欲しいです」

真っ赤に顔を染めて瞳をキラキラ輝かしてゆうかが言った。その瞳に吸い込まれそうになる。

俺はゆうかの身体を優しく抱きしめた。ゆうかの腕が首に回る。そうして俺たちは、お互いをお互いで心ゆくまで満たした。

慌ただしくも楽しい朝のひとときの後、俺たちはそれぞれの学校へと出かけた。

どうやったか不明だが、紗那や美音もちゃんと学校に席をつくったらしい。

美音はともかく、紗那は大丈夫なんだろうな？　なんだか不安だ。

俺はゆうかと蒼井さんと一緒に登校する。

蒼井さんが気を利かして一人で出ようとするところをゆうかに掴まった。

「一緒に行きましょう」

「でも、ゆうかお姉さん、お邪魔では？」

「全然大丈夫です。私たち夜も一緒にでしたから」

うわ！　と思った。頬が熱を持ってくる。

時々ゆうかはかなり大胆なことを平気で言うことがあるよなあ。

蒼井さんも頬を染めて目を丸くした。

呆気にとられたのか、そのままゆうかに引っ張られるように俺たちは一緒に登校した。

「じゃあ、帰りに」

ゆうかが下駄箱のところで俺たちに手を振る。別れた俺たちも自

分の教室に向かった。

なんだかんだでテストの最終日。そういえば、蒼井さんは二日休みだよな。追試とか在るんじゃないのか？

「えーと、ずるしちやいけませんか？」

蒼井さんが首を竦めながら言った。

「いや、それは、どうだろう？」

ひよっとしたらゆうかが怒るんじゃないかとも思っけど……どうだろうなあ？

そんなことを考えながら教室の入った俺は、一瞬で凍り付いた。

「は？　なんで、おまえ！？」

教室の中に稚陽姫が座っていた。

蒼井さんもびっくりして目を大きくしている。

俺は急いで稚陽姫の傍まで駆けた。

「おまえ、なんでいるんだ！」

「なにか？」

稚陽姫が当然というように俺に顔を向ける。

「事件が解決したら、天上に戻るって言ってただろ！　なんで、まだいるんだよ？！」

「ああ、そのことか」

稚陽姫は当たり前のように言う。

「四宝の守りにおまえでは心許ないからな。わたしも守りにつくのだ」

「なっ！」

なんだって！

いや、だって、しかし……

「おまえ禁軍の総帥なんだろう？　地上にずっといたらまずいんじゃないのかよ」

「今は、天上より地上があぶないからな」

「なにい！」

言葉が出ない俺に、稚陽姫は皮肉な笑いを浮かべていった。

「それと、おまえとの勝負の決着もちゃんと付ける」

俺は頭を抱えなくなった。

蒼井さんを見ると、彼女も呆れたように肩を竦めた。

なんだか、急にいろんなものを抱え込んだ気がして俺は前途に不安を感じた。

あー、どうなるんだろう？ 俺の人生……

でもまあ、なるようになれだ。

ゆづかや蒼井さん、みんながいればこの先どんなことが起こってもそれもまた楽しいに違いない。

俺はそう思った。

「天の意志・地の理へ続く」  
おわり



#### 新しい家族 - 4 - 最終回（後書き）

これにて「天の意志・地の理」の続編完結です。

最後までお読みいただきありがとうございます。

お話は、なんだかまだ続きそうな最後になっていますが、  
作者的にはなにも考えていません。

今回同様、また、不意にお話が降りてきたりしたら、  
そのうち、続々編、なんてのがひょっこり始まるかも知れませんが、  
もしそんなことがあったら、その時は、どうぞよろしく。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9726c/>

---

天の意志・地の理（ことわり）

2010年10月8日11時04分発行